
P4 クライマックス番長

霧紙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P4 クライマックス番長

【Nコード】

N9013G

【作者名】

霧紙子

【あらすじ】

PS2ソフト『ペルソナ4』を題材にしたコメディ集。登場するキャラクターのイメージ、特に主人公については作者仕様の独断や偏見になっており、カップリング的要素を含んでおり、キャラクターを中傷、貶める表現もあり、気分を害されると思われる描写や表現があります。以上を理解された上、作者をテレビの中に突き落とさないという約束出来る方向でお願いします。

陽介編（前書き）

時間軸については、メチャクチャ適当になってます。作中の日付の曜日は現実のカレンダー機能で調べたので、お許しください。あと、陽介ファンの皆さん、ごめんなさい。

陽介編

2012年1月16日(月)

放課後

「ハハハ…、笑えよ…」

八十稲葉署の面会室で向かい合った陽介の顔は、とてもじゃないが笑えなかった。

昨日、陽介は下着を盗んだ容疑で捕まった。堂島から今朝知らせ、ボタンで飛んできた。

こうなったからには、状況が動くの待つしかない…。
そっとしておこう…。

二人っきりの気まずい空気から去ろうと立ち上がると…。

「待てよ、相棒!!」

泣きながら面会室のガラスに必死に噛み付く、その陽介の姿に足が止まった…。

仕方なく、話を聞くことにした。

「ていうか、お前、俺が犯人だと本気で思ってたのか…」

頷こうと思ったが、さすがに可哀想なので止めた。

仕方なく、堂島から聞いた話から状況整理してみた。

・昨日の今朝、市内在住の女子高生宅から外に干していた下着が数

点盗まれたとの被害届が出る。

・被害者である女子高生は、『犯人を見つけだして、顔面、靴跡だらけの刑にしてやる』との怒りの様子を見せていた。

・昨日の昼過ぎ、陽介宅の自室から、被害者の女子高生の物と見られる下着数点が陽介の机の引き出しから、掃除をしていた陽介の母親が発見、即座に通報。

・これらの物的証拠から、動かぬ証拠となり、昨夜、陽介は逮捕された。

以上が、現時点での状況。

「なあ、お前はどう思う…？明らかに、証拠不十分でおかしいだろ…。何者かが、俺を陥れようとしているようにしか…」

ガラス越しに、陽介は意見を求めてきた。

ドンマイ…、と親指を立てて言ってみた。

「ドンマイじゃねえ！！推理しろよ！あん時バりに推理を！！」

陽介はえらく興奮している。

落ち着けと言った。

「この状況での落ち着けは、むかつく以外のなんでもねえな…」

どうやら、陽介は落ち着いたようだ。

陽介との間にかげがえのない絆を感じる。

「それに、昨日の朝は、一昨日の品だしの手伝いでクタクタだったし、昼までグッスリ寝てた…。だから、俺にはアリバイがある！」

凄く自己弁護に必死な陽介の姿に、少しだけ溝が深まった…。

しかし、確かに、腑に落ちない点が多々ある。

仕方なく、陽介の容疑を晴らすために協力することにした。

「仕方なく、つてのが激しく気になるが、頼んだぜ！相棒！」

陽介の潔白と、下着ドロの真犯人を捕まえるための情報を得るため、警察署から商店街に来た。

雲を掴むような難しい情報収集ではあるが、手始めにホームランバーを食べることにした。

冬場に食べるアイスを、異様に美味しく感じるのは何故かを真剣に考えた。

知識が高まった。

寛容力が高まった。

あの頃の情熱が甦った。

いろいろ考えているうちに、時間が過ぎた…。

もう遅い時間だ…。

情報収集を諦めて、帰宅することにした。

夜

なにか、忘れていることに気付いたが、気にせずに早めに休むことにした。

2012年1月17日（火）

午前

陽介が家庭の事情で欠席している。
どうしたのだろうか…。

まさか、まだマヨナカテレビが…。

「花村の奴、なんで休み？」

「どうかしたのかしら？」

「そういえば、こないださあ、下着ドロに下着盗まれたのよ！もう
ほんっと、許せない！」

と隣の席で千枝と雪子が会話しているのを聞いて、情報収集する
の忘れていたのを思い出した。

どうやら、陽介はまだ未成年なため、下着ドロで捕まったのは伏
せられているようだ。

放課後

千枝と雪子は、すぐ帰ったため、まだ学校に居る仲間達から情報
を得られないかと思い、各自に聞いてみることにした。

まずは、完二からだ。

「ちーす！先輩、暇なんスか？」

完二に、陽介が下着ドロで捕まったのを伝えた。

「花村先輩、信じてたのに……。でも、俺、前向きに生きて行くッスよ！先輩！」

どうやら、完二は疑わずに、すんなりと現実を受けとめた。完二との間にかけてがえのない絆を感じた。完二なだけに。

このあと、完二と夕陽に向かって走りながら帰宅した。

夜

今日は、もう寝ることにした。

2012年1月18日（水）

朝

ジュネスのCMを見て、陽介のことを思い出す。

放課後

昨日から様子がおかしい千枝に、下着ドロについて聞いた。どうやら、千枝は最近、下着ドロの被害に遭ったそうだと。たぶん、千枝が陽介を陥れた犯人の被害者に違いない。

また一歩、真実に近づいた。

「許せないよね！」

同感だ、と頷いた。

千枝は、嬉しそうに頷いた。 千枝との間に、かけがえのない絆を感じた。

このあと、千枝とジャッキー、サモハン、ユン・ピョウについて語り合いながら、帰宅した。

夜

なにかを忘れていた気がしたが、今日はもう寝ることにした。

2012年1月19日(木)

放課後

雪子と過ごすことにした。

雪子との間に、かけがえのない絆を感じた。

もう暗くなったので、途中まで送って行くことにした。

夜

今日は、もう寝ることにした。

2012年1月20日(金)

放課後

りせと過ごすことにした。

りせとの間にかげがえのない絆を感じた。

暗くなったので、途中まで送って行くことにした。

夜

今日は、もう寝ることにした。

2012年1月21日(土)

昼休み

「あつ、先輩……。奇遇ですね……」

直斗と、昼休みにばったり会った。

「先輩、今日の放課後、時間ありますか？先日の花村先輩の濡れ衣の件についてですが…」

陽介のことを忘れていることを思い出した。
放課後、直斗と過ごすことにした。

放課後

直斗に河原に呼び出された。

「どうやら、事件当日の早朝、たまたま現場近くを歩いていた目撃者によると、現場近くで怪しい影を目撃したそうです…。真犯人と睨んでも間違いないでしょう。その真犯人は、犯行後に『クマクマ』』と言い去ったそうです…。この言葉と、花村先輩の自宅を知っていたことから、犯人は…」

どうやら、直斗がしっかり調べてくれていたようだ。
直斗との間にかげがえのない絆を感じる。

こうして、陽介の潔白が証明された。

2012年1月22日（日）

昼

釈放された陽介を迎えに行ったが殴られた。

陽介との間に埋まることのない溝を感じた。
そういえば、最近、クマと会っていない。

陽介編（後書き）

陽介は、本当に好きなキャラクターです。というより、全体的にこのゲームの登場人物は好きです。ただ、陽介の場合は、等身大的な高校生キャラで、プレイ中、一番感情移入したキャラクターです。

陽介編 2

2011年5月15日(水) 曇り/雨

夜

マヨナカテレビの内容について、陽介から連絡があった。

「てことで、明日、巽完二について、かくかくじかじかだな。ここら辺りの詳しい説明は、原作のゲームを参考にしてくれ」

わかった、と言い、電話を切るうとした時。

「ところでさ……。お前……」

なにか話を切り出した陽介に、金は貸さんぞ、と釘を刺しておいた。

「ちげえよ……。この際だから、聞いときたいことがあってよ……」

なにやら、そわそわした様子だ。

「お前、ぶつちやけ、里中と天城。どっちがタイプだ？大丈夫だって、誰にもバラさねえからよ……。へへ」

陽介は、千枝と雪子、どっちが好みかと聞いてきた。

なんて、マせているんだ……。

とりあえず、なんと答えようか。

・千枝と答える。

だが、陽介のことだ。くしゃみしたついでに、千枝本人にバラすかもしれない。

・雪子と答える。

だが、陽介のことだ。背のびしたついでに、雪子本人にバラすかもしれない。

・どちら好みと答える。

だが、陽介のことだ。優柔不断だな…、と陽介にほくそ笑られるかもしれない。

・どちらマイマイチと答える。

だが、陽介のことだ。もしかして、二次元好き…？と心配されるかもしれない。

・陽介と答える。

一番、無難な答えだろう。

陽介と答えた。

「えっ…、ちよっ…」

陽介は動揺している。

「…」

電話の向こうの陽介は、急に喋らなくなった。

沈黙が続く…。

しばらくすると…。

「あつ…、あのさ…、気持ちはあるんだけどな…。俺、その…、お前がそう思っていたなんて…、思ってたなくて…、だな…」

神妙な喋り方の陽介の声が震えている…。

「その…、ごめんな…、俺…」

別にいい…、と答えた。

・寛容力がアップした。

「ああ…、じゃあ…、また明日な…」

ガチャッ…。

ツー、ツー。

電話が切れた。

どこか、電話の向こうの陽介の声は大人びて聞こえた…。また少し陽介との仲が深まった。

今日は、もう寝ることにした。

笑ってはいけない天城屋旅館 前編

2012年1月3日(火)

午後

新年会の王様ゲームでの罰ゲームで、陽介、完二と共に、天城屋旅館に泊まることになった。

『チキチキ! 第一回、一泊二日の笑ってはいけない天城屋旅館』

「どういうことだよ!! っていうか、王様ゲームの罰ゲームってなんだよ!!」

旅館の前で、陽介がキレた。

完二は諦めムードに、うわごとを呟いている。

とりあえず、そっとしておいた。

司会者と進行を任せられたクマがマイクを持って、今回の罰ゲームのルールの説明をした。

「いいですか、クマー。旅館に足を踏みだしたら、最後。明日の昼間まで笑ってはいけないクマ」

「なあ、おい…。これって、アレのパクリだろ…。間違いない…。年末恒例のアレのパクリだろ…」

「うるさいクマね、ヨースケは…。ファンフィクションだから、細かいことはなしクマ」

完二が手を挙げた。

「なあ、ちなみに笑ったら、なにがあるんだよ…。ケツをぶたれるのか…？あつ、天城先輩とか、里中先輩とか、直斗とかから…」

何故か、完二は興奮気味だ。

すると、クマは…。

「笑った人は、シャドウに襲われます」

！！

「んじゃあ、そりゃあ！！罰ゲームとかいうレベルじゃねえぞ！！」

陽介が激しくキレた。

さっきまで、鼻息の荒かった完二が血相を変えてキレた。

「ていうか、待て！コラ、クマ！シャドウとか、テレビの中の話だろぅが！！」

「ファンフィクションだから、細かいことはなしクマ！」

「ファンフィクションなら、そこらへんの設定踏まえろよ！」

なんとということだ…。

なにがなんでも、笑うのを我慢するしかないようだ…。

激しく取り乱す陽介と、完二に落ち着けと言った。

「こんな時でも落ち着いていられるお前の方が、シャドウより怖いわ…」

陽介に誉められた。

伝達力がアップした。

そろそろ、もっと仲が深まるかもしれない。

「深んまねえよ!!!」

そんなこんなで、スタートした。慎重に、笑わないようにしなければ…。

クマに引っぱられ、玄関に到着した。

陽介、完二は、眉間に皺を寄せて笑わないように気合いを入れている。

「ようこそ、天城屋旅館へ」

旅館の中居さんが、出迎えてくれた。

中居さんは、凄くキリツとしている。

中居さんが、自己紹介を始めた。

「天城屋旅館中居の、中井と申します」

ぶっ!!!

陽介、完二、アウトー!

なんと、陽介、完二が吹いた。かなりチープなダジャレに。

すると、二人の背後から、罰ゲーム系のシャドウ（魂を刈るもの。LEVEL・80）が現れ、陽介、完二は強制的に戦闘シーンに入

った。

陽介、完二は、ぎゃー！ぎゃー！と叫びながら、ペルソナを出して戦った。

これは、恐ろしい…。

なんとしてでも、笑わないようにしなければ…。

ボロボロになりながらも、戦闘を終えた二人は、ゼーハー、と肩で息をしている。

落ち着けと言った。

勇気がアップした。

だが、陽介、完二から涙目で睨まれた。

しばらくして、陽介、完二と共に部屋に案内され、座席に座り落ち着くことにした。

クマは準備があると、部屋から出て行った。

「やべえよ、これ…。マジやべえよ、これ…」

陽介は、体育座りで呟いている。

しかし、完二は落ち着きを取り戻し、冷静に努めた。

「クヨクヨしたって、しょうがないツスよ…。とりあえず、明日の昼まで、なんとか笑わないように頑張りましょうよ…」

「ああ…、そうだな」

どうやら、陽介は落ち着いたようだ。

完二は、座席にあったテレビの番組欄を拾い上げた。

「おっ、テレビ観れるらしいツスよ。気分転換に…」

と、完二が番組欄に目を通した瞬間…。

完二、アウトー！

！！

なんと、完二は番組欄を読んだ瞬間に笑ってしまった。

完二は、またシャドウとの戦闘シーンに入った。

「おい、完二の奴、番組欄見た瞬間、笑いやがったぞ！なにが書かれてある」

と、陽介に言われるまま、その番組欄を手を取った。

どうやら、これは番組欄ではなく、なにかの一言だけが書かれたメモ用紙だ。とりあえず、読み上げることにした。

『俺のペルソナ、ジライヤ。お前のハッキリしない気持ち、ジレツタイヤ。 by 花村陽介』

陽介、アウト

しばらくして、極限状態に追い込まれた陽介、完二が口喧嘩を始めた。

「花村先輩…、なんスか、あれ？なにふざけた文、書いてやがるんスか？」

「俺じゃねえよ…、クマが書いたに決まってるだろ…。先輩に向かって、舐めた口叩いてんじゃねえよ…。期待のホスト阿部高和…」
「誰が、期待のホスト阿部高和だ…、コラ…」

どうにも、良くない状況だ…。

とりあえず、また落ち着けと言うことにした。

だが、噛んでしまい、落ち着けを、お、おちゅちゅつけ、と言ってしまった…。

陽介、完二、アウトー！

居間では、もう誰も喋らなくなった。
ただ沈黙だけが過ぎていく…。

しばらくすると、クマが食事を運んできた。

「ユキちゃんからの差し入れクマ。ホンマに、ユキちゃんの優しさは、超合衆国、ニッポン大陸に響き渡るぜクマ」

そう言って、三人に食事を置いた。

どうやら、なんの仕掛けのない普通に板前さんが作った料理のようだ。

ゲツソリしていた陽介、完二の顔に生気が漲った。

「うおー、やったぜ！天城、最高ー！」

「ひゃー！天城先輩、最高ッス！」

すると、またクマが…。

「チエちゃんからも、差し入れクマ。ホンマに、チエちゃんの優しさは、オリンポス山脈に響き渡るクマ」

と言って、クマが着ぐるみから、ごそごそとなにかを取出し始めた。

「おー、里中の奴、泣かせてくれるじゃねえか！」

「なんか、俺、涙出てきたッス！」

「あいつのことだから、差し入れは肉かもな！」

「ビフテキッスかねー、それとも、俺らの笑いを誘おうとして、あの肉ガムを出してきたりしてー」

「さすがに、それは笑えねえよー」

はしゃぐ二人をよそに、クマは千枝からの差し入れを三人に渡す。

サッ…

キン肉マン消しゴム、略して、キン消しが目の前に置かれた。

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」

「本当に、これは笑えねえよ…」

「いただきます…」

重い空気のまま、三人で食卓を囲った。

全員セーフ。

笑ってはいけない天城屋旅館 前編（後書き）

元ネタ「ガキの使いやあらへんで！笑ってはいけないシリーズ」

笑ってはいけない天城屋旅館 後編

夜

食事を終え、一段落が着いた陽介と完二は布団を敷き始めた。就寝するには、明らかに、まだ早い時間帯だ。それに、まだ温泉に浸かってもいい。すると、陽介が…。

「忘れたのか、お前…。以前、ここで起きた文化祭後の思い出したくもない、あの悲劇を…」

布団を敷きながら、完二は…。

「なにがあつたは、お近くのゲームショップ、おもちゃ屋さんで発売中のPS2ソフト『ペルソナ4』をプレイして、お確かめて下さい」

「完二…、お前、誰に宣伝してんだよ…」

「いや、なんとなくツス…」

よほど精神が極限状態なのか、二人は会話すらままなくなっている。

布団を敷き終えた陽介は、そのまま眠りに着こうとしている。

「それに、俺らが眠っちまえば、どんなトラップが来ようとも笑わないで済むだろ…」

「なるほど！花村先輩、頭いいツスね！」

「いや、普通に誰でもわかるよ…」

だが、そう簡単に仕掛け人のクマが眠らせてくれるのかと、二人に言った。

「お前…、なにが言いたいんだ…」

陽介が立ち上がると…。

ザー、ザー！

電源を入れていないはずのテレビから、音が鳴った。

！！

「まさか、これって!?!」

「マヨナカテレビ!?でも、花村先輩、外雨降ってないツスよ!!!」

「ファンフィクションとはいえ、ここは最低限のルール守れよ!!!」

陽介、完二が身構えた。

テレビには、ハッキリと人の姿が映っている。

「おい、これって…!」

「やあ、皆さん…。あなたのクマクマ…!」

マヨナカテレビに映っているのは、間違いないクマだ!

「さあー、完二、寝るぞー!」

「おやすみツス…、先輩…」

陽介、完二は、マヨナカテレビに映っているクマを無視して布団に入った。

「待つクマよ！」

テレビの向こうのクマが、そんな二人を止めようとしている。

「待たねえよ！どうせ、今度はマヨナカテレビに映って、俺たちを笑かそうとか、下らねえこと仕組んでんだろ！」

「ヨースケ、待つクマよ…。そんなことしないクマ」

その言葉に、陽介、完二は布団に入ろうとするのをやめた。

「今は、ポーナスタイム、クマよー。笑っても大丈夫クマ」

試しに、陽介、完二は適当に笑ってみた。

確かに、罰ゲームのシャドウが出現しなくなった。

「おおー、本当ツスよ、花村先輩！」

完二は喜んでいる。

だが、陽介の顔はまだ曇っている。

「なあ、おい…。確かに、今は笑っても大丈夫みてえだがよ…。この企画の元ネタになったアノ番組にも、ある時間だけ笑っても大丈夫な代わりに、笑う以外のなにかをしたら罰ゲームってのを企んでんだろ…」

「そうクマ」

!!

案外、素直にクマは話した。

そのクマの素直さに、より絆が深まった。

「どうでもいいタイミングで深まんない！」

陽介は、相変わらずツツコミに余念がないようだ。

「でも、花村先輩…。場合によっては今より、マシになるかもしれないッスよ…」

「おおー、完二、物分かりが良いクマねー。クマ、キュンと来たクマよー」

「ああ、もうわーっただよ…」

どうやら、陽介は観念したようだ。

「よしー、いいクマねー。今から、2時間は笑っても大丈夫な代わり、これから見せるマヨナカテレビの映像を観ても、決して萌えたりしたらダメクマ」

「!?!」

「名付けて、萌えてはいけないマヨナカテレビ！クマー!!」

…。

少しばかり、沈黙が続いた…。

陽介、完二の顔が固まっている。

「んだ、そりゃ…」

「でも、笑わないより楽ッスね…」

呆れてはいるものの、二人共、楽勝ムードに軽く受け取っている。

「ちなみに、萌えたりしたら、シャドウより怖い罰ゲームクマ」

「はいはい、わーっただ…」

「やれやれ、少しは落ち着けるツスね…」

「それでは、スタート！クマ！」

説明が終わると、クマはマヨナカテレビから姿を消した。

テレビには砂嵐が映った。

「ったく、なにかと思えば下らねえな…」

「そうツスよ！オタクじゃあるまいし、そう簡単に萌えたりするもんかよ」

二人共、布団の上に転がった。

…シャドウより怖い罰ゲームとは…。

とにかく、今は、これから映るマヨナカテレビの映像に、萌えないうようにするしかない…。

すると…。

ザー、ザー

！！

マヨナカテレビになにかが映った。

ハッキリとは、よく見えないが、ピンク色の髪をしたアニメのキャラクターのようだ。

たぶん、ライトノベル系のアニメのヒロインのようだ。

急に、陽介の顔が強ばった。
テレビの映像がこちらを見て、喋り始めた。

「こっ、この変態！変態！！変態！変態！変態！変態！変態！変態！変態！罵られて、喜んでんじゃないわよ！バカ犬！！」

どこかで聞いたような声だ…。
すると！

「グハツ！！」

陽介が血を吐いて、倒れた。

「はっ、花村先輩！」

完二は、陽介の身体を抱えた。

陽介は息を切らしながら、ゼーハー！ゼーハー！と虚ろな目で、
テレビを睨んでいる…。

「こっ…、こっ…」

陽介は途切れ、途切れに、言葉を発している。
完二は涙目だ。

「花村先輩！もう喋らなくていいッスよ！」

だが、陽介は…。

「これ…、はっ、反則だろ…」

「花村先輩！」

陽介は虚ろにテレビを見つめた。

「るっ、ルイズは俺の嫁…」

バタツ…。

陽介は、そう言い残し力尽きた。

「はっ、花村先輩……！！！！！！」

泣き喚く完二に落ち着け、と言った。
寛容力がアップした。

「はい、大丈夫ツス」

完二は、すぐ立ち直った。

どうやら、これから、マヨナカテレビに映る映像に萌えてしまうと、口からトマトケチャップを吐かなくてはならなくなるらしい。
みつともないから、どうしても避けねば。

しばらくすると、また映像が切り替わった。

どうやら、マヨナカテレビには、各メンバーがドツボのアニメのキャラクターが映るらしい。

しかし、オトメンでファンシー好きではあるが、硬派一点のアニメキャラクターに興味のない完二には通用しないだろう…。
すると、次に映ったのは…。

『ターンエー！ガ ダム！！』

！！

なんと今度は、ライトノベル系ではなく、有名ロボットアニメの異端作が映し出された。

一体、どういうことだ…。

「僕は、ムーンレイスなんですよ！」

しかも、主人公の声がどこで聞いたような…。

「ぐはっ！！」

なんと、完二までもが、血を吐いて倒れた。
完二の身体を抱えた。

「せつ、先輩…」

どうやら、完二も罰ゲームを食らったようだ。
無理に喋るな、と言った。
寛容力がアップした。

「りゅ…、流派…、東方不敗は…」

完二は途切れ、途切れに喋る。
自分も完二に続けて喋った。

「王者の風を…」

全身…。

「全霊…」

「見よ！東方は熱く燃えている…」

そう言い終わると、完二は力尽きた。
完二——！！と泣き叫んだ。

脳裏には、あの日の完二との会話が思い出される…。

「へへっ…、先輩！このゲームの声優さん、ガンムパイロット多いッスよね」

力尽きた完二の手を握り、立ち上がった。

俺が…、俺たちが…、ペルソナだ！！

マヨナカテレビの映像がが、また切り替わった…。
しかし、陽介と完二の犠牲から、映し出される映像の共通点が見出だされた。

間違いない…、『声優繋がり』だ…。

これに、陽介と完二は敗れた。

詳しいことは、Wikipediaに頼ればいいたろう。

よって、先に出尽くした2人の攻撃から、次に来ると思われる映

像は…。

・コード ス
・ナ ヤ
・い み
・カン

さあ、どれが来る…。

しばらくすると、テレビに人の姿が映った。！！

菜々子の姿だ…！

間違いない…、毎日見ている菜々子の姿だ、見間違えるはずがない！

すると、マヨナカテレビに映る菜々子は、こう言った。

『へへっ…、お兄ちゃん、大好き！』

ぐあっ…！！

主人公は歯を食い縛った！

こうして、『笑っていけない天城屋旅館』の夜は更けていった。

寛容さがアップした。

勇気がアップした。

伝達力がアップした。

千枝編

2011年X月XX日(火) 晴れ

今日は、川原で千枝の特訓に付き合うことにした。
一通り、特訓し終わった後、中華料理店愛屋で食事をする
ことにした。

「うんまー！」

千枝は幸せそうに、特製肉丼を食べている。

特製肉丼を食べながら、千枝はサモハン・キンポーの動きが、
もともとブルースリーに近いと熱心に語っている。確かに、『燃えよ
デブゴン』での動きのキレは素晴らしかった。

そう話しているうちに、2人共食事を終えたので、会計を済ませ
ることにした。

「あつ、ヤバツ…」

なにやら、千枝はポケットを探りながら焦っている…。

「しまったあー、『48の殺人技』の特訓した際に、川原で財布を
落としちゃったみたい…。どうしよう…」

千枝はすごく焦っている…。

ここは立て替えてやると、千枝に言った。
寛容力がアップした。

「えっ、いいの！？ごめん、マジ感謝ー！」

千枝は、照れながら喜んでいる。

少しだけ、千枝との絆が深まった気がした。

そして、自分のポケットから財布を出そうとした…。

！？

ポケットに触れた瞬間、今日、財布を持ってきていなかったのを思い出した…。

「本当に、キミって優しいんだね…」

そんな千枝の感謝の眼差しに申し訳なく、財布がないのを告げた…。

「ど、ど、ど、ど、どうすんの！？」

ラップで千枝が焦っている。

その独特のリズム感に、伝達力がアップした。

「いや、こんなときにスキルアップしないですよ！」

なんとかして…、この支払いを済ませねば…。

千枝と一緒に考えることにした…。

- 1、携帯で仲間を呼び出して、立て替えてもらう。
- 2、店主を気絶させ逃げる。
- 3、無銭飲食で逮捕。現実是非情である。

「この場合…、1しかない…」

そう言って、千枝は携帯電話を取り出した。

「今から、雪子呼んで、立て替えてもらうしかないわね…」

得意気に、千枝は雪子に電話を掛けた。

だが…。

「あっ、もしもし、雪こっ…」

ピー、ピー

雪子に繋がった瞬間、千枝の携帯電話のバッテリーが切れた…。

ガタン…。

千枝は携帯電話を落とした…。

そっとしておこっ…。

「まだよ、まだ、キミの携帯が残っているじゃない！」

そう言われ、自分の携帯を取り出した…。

だが、手が滑り…。

チャポン！

さっき、自分が食べていたラーメンのスープに携帯が落ちた…。

「…」

千枝は言葉を失った…。

「どうすんのさー!」

落ち着け…、と千枝に告げた。
寛容力がアップした。

「落ち着けるわけないじゃない!?!つーか、いちいち寛容力アップしないでよ!趣味なの!?!」

千枝は、かなり取り乱している。

こうなれば、もう2しかない…。

ペルソナ『イザナギ』をスタンバイさせ、店主を気絶させることにした。

「襲うな!?!」

千枝から、必死に止められたのでやめておこう。

「こうなったら、素直に店主に話そうよ…」

千枝がそう提案したが、以前、この店に来たとき、自分達と同じように財布を忘れた客が居て、店主が普段のとぼけたキャラをやめ、殺し屋みたいに鋭い殺気を放ち、持っていたまな板を赤く染めたことがあったのを、千枝に話した。

千枝の顔が青く染まった…。

「じゃあ、どうするっての…。」

…。

「どうやら、選択肢はないようだ…。」

ペルソナ『イザナギ』をスタンバイさせ、店主を気絶させることにした。

店主にジオを放った。

「アイヤァー!!!」

店主が悲鳴を上げて、気絶した。

「ちよっ！なにやってんの!?!」

千枝は驚いている。

何事にも、犠牲は付き物だと千枝を論じた。伝達力がアップした。

「いや、ちよっと、いくらなんでも!?!」

早く逃げるぞ、と千枝に論じた。

勇気、伝達力がアップした。

しばらくすると、店の戸が開いた。

「ちーっす！あれ？先輩らじゃないツスカ。なにやってんスカ」

完二が現れた…。

「って、店主が気絶してるし！！なにがあつたんすか！？先輩！！」
たまたま、店にやってきた完二は、この光景にアタフタしている。
落ち着け、と言った。

千枝の目が虚ろだ…。

口封じのため、完二にも、ジオを放とうとしたが、千枝からゴッ
ドハンドをくらい、気絶した。

「なっ…、なにがあつたんすか…、里中先輩…」

「お金、貸して…、完二君…。あと、救急車…」

「いいッスけど…、なにが…」

千枝と、完二の絆が深まった…。

千枝編（後書き）

千枝ちゃんは好きです。声が可愛い。女性陣中、イベントごと起きることに對して、一番罪悪感を感じてたりしてますよね。

千枝編2

2011年X月XX日(月) 晴れ

夜

「あつ、おかえりなさいー！」

帰宅すると、菜々子と堂島が出迎えてくれた。

「今日、お父さんとジュネスに行ってきたから、冷蔵庫の中、ギユウギユウだよ」

そう言われ、冷蔵庫を開けてみると、料理の食材がいっぱい入っている。

…。
明日のお弁当を作ることにした。

翌日 晴れ

昼休み

…。
今日は、昨日作ったお弁当を持ってきている。
誰と一緒に食べようか…。

・陽介

以前、部屋に遊びに来たときに、勝手に風呂に入ってしまったので、やめておこう…。

・千枝

以前、部屋に遊びに来たときに、勝手にガスが使われたから、やめておこう…。

・雪子

以前、一緒に麻雀したときに惨敗したから、やめておこう…。

・完二

やめておこう。

・りせ

以前、大豆を使った健康法についての延々と語ったら、ドン引きされたので、やめておこう。

・直斗

以前、バナナの皮に足を滑らせて転んだときに、必死に笑いをこらえられたので、やめておこう。

・一条、長瀬

昨日の夜、長瀬からキン肉バスターを食らう夢を見たので、やめておこう。

…。
消去法で、千枝にした。

屋上で、千枝と一緒に弁当を食べることにした。

「うはー！今日は、どんなお弁当を持ってきたのー！楽しみー」

千枝は張り切っている。

昨日は、冷蔵庫に高級豚肉が入っていたので、迷わずに、衣を着け、油で揚げたトンカツ弁当。しかも、栄養が偏らないように、キヤベツを大量に添えた。

そのことを、千枝に伝えた。

「えー！？マジで、トンカツー！」

千枝は嬉しそうだ。

本当に、肉が好きなんだと思った。

何故、こんなにも千枝が、肉が好きなのかを考えた…。
知識がアップした。

「知識アップしてないで、さっ、早く食べようよー！」

そう千枝に言われ、弁当箱を取り出した。

千枝の目が輝いている。

パカツ…。

弁当箱の中には、トンカチ、ハンマー、釘、ノコギリが入っている…。

「…」

千枝は黙り込んだ…。

弁当箱と間違えて、日曜大工セットを持ってきてしまった…。

千枝の目は、『ギャグマンガ日和』の登場人物のような目をしてる…。

トンカチはないが、トンカチはあった…、とジョークを言ったが、千枝は笑っていない…。

むしろ、千枝から殺意が感じられる…。

「あつ…、あたし…、緑のためき買って食べるから…。じゃあね…」

意気消沈した千枝は、屋上から立ち去ろうとしている…。

期待させた上、しょうもないダジャレを言ってしまう、本当に千枝には申し訳なかった…。

立ち去るとする千枝の肩に手を置いた。

「えっ…、なに!？」

千枝は驚いている。

本当に申し訳なかったので、こう言わずにはいられなかった…。

千枝に、焼きそばパンと胡椒博士と、ポテロング、ヤングマガジンを買って来るように頼んだ。
もちろん、代金は千枝持ちで。
「勇気がアップした。」

顔中に、靴跡が出来た。

このまま電車乗れば、二度と会えない気がして編

2011年4月11日(月) 曇/雨

電車の中で、堂島から迎えに来るとのメールを受けた。

今日から、八十稲葉市で暮らすことになる…。

上手くやっていけるのだろうか…。

電車の中では、イゴールという老人と接触し、さらには、不思議なヴィジョンがチラチラと脳裏に映る…。

一体、これから暮らしていく街でなにが起きるのであるのか…？
果たして、解かねばならない謎とは…？

これらの不思議な出来事に戸惑いを感じながらも、電車は走る…。

しばらくすると、終点に到着した。様々な疑問を抱えながらも、電車から降りた。

これから、待ち構える自分の運命とは…。

電車からアナウンスが聞こえる…。

『終点、沖縄ー！終点、沖縄ー！』

電車を乗り間違えた…。

八十稲葉駅前…。

「来ないね…」

「ああ…」

来ることのない自分を、堂島と菜々子はいつまでも待っていた…。

以下、字数が足りなく投稿出来なかったので、余計な文で尺稼ぎ
劇場。

2011年某月某日 雨

「なあ、相棒……。この際だから、聞こうと思うけどよ……。里中、天城、りせ、直斗のうち、誰がタイプだ？誰にも、バラさねからよ……」

と、陽介に聞かれた……。

誰と答えようか……。

・千枝、雪子、りせ、直斗のうちの誰か。

陽介のことだ。カバディしたときに、本人達にバラすかもしれないない……。

・全員と答える。

陽介のことだ。この浮気症と言われるかもしれない……。

・全員、イマイチと答える。

陽介のことだ。アドルマスターのメンバーで、誰が好きだ……？という質問に変わるかもしれない……。

・陽介と答える。

以前、微妙な空気になったからやめておこう。

・完二と答える。

一番、無難な答えだろう。

完二と答えた。

「えっ！？マジか……」

陽介は、ひどく驚いている。

「そっ…、そうか……」

何故か、陽介は落ち込んでいる…。

このまま電車乗れば、二度と会えない気がして編2

2011年4月11日(月) 曇/雨

電車の中で、堂島から迎えに来るとのメールを受けた。

今日から、八十稲葉市で暮らすことになる…。

上手くやっていけるのだろうか…。

電車の中では、イゴールという老人と接触し、さらには、不思議なヴィジョンがチラチラと脳裏に映る…。

一体、これから暮らしていく街でなにが起きるのであるのか…？
果たして、解かねばならない謎とは…？

これらの不思議な出来事に戸惑いを感じながらも、電車は走る…。

しばらくすると、終点に到着した。様々な疑問を抱えながらも、電車から降りた。

これから、待ち構える自分の運命とは…。

電車のドアが開いた。

『終点、八十稲葉ー！終点、八十稲葉ー！』

ガシャーン！

ドアに顔を挟まれた…。

八十稲葉駅前…。

「あれ…、お父さん？救急車だよ、救急車ー」

「ああ…、誰か、ケガでもしたんだろっな…」

来ることのない自分を、堂島と菜々子はいっまでも待っていた…。

以下、字数が足りなく投稿出来なかったので、余計な文で尺稼ぎ
劇場パート2。

『続々・陽介編2』

2011年10月30日 晴れ

学園祭、二日目

ミス八十高コンテストの投票。

「なあ、お前は、里中、天城、りせ、直斗のうち、誰に投票する？」
と、陽介に聞かれた…。
誰に投票しようか…。

「なあ、早くしねえと打ち切られちまうぜ！」

陽介が茶化したので、陽介にと答えた。

「!?!」

陽介がかなり驚いている。

「ばっ…、バカヤロウ…」

何故か、陽介は照れている…。

このまま電車乗れば、二度と会えない気がして編2（後書き）

今年の夏は、主人公×陽介で。

雪子編

2011年某月某日(日) 晴れ

昼間

今日は雪子と過ごすことにした。

「えっ、本当？じゃあ、ちょっと付き合ってもらいたい場所があるの」

雪子は嬉しそうだ。

これから、雪子とジュネスで買い物をする事になった。

ジュネスフードコート

雪子は、これから買う物についての確認している。

「えーっと…、文房具に、ノート、あと…、三角定規に…」

どうやら、以前、話した一人暮らしについて、必要な用品をメモに書いてきたようだ。こちら辺の詳しいことは、原作ゲームの雪子コミュニティをやればいい。

どうやら、今後のことについて、真剣に考えている…。
そんな雪子の姿勢に、絆が深まった。

「あっ、あと…、必要な物は…」

更に、雪子は買い物メモを読む。

「納豆、湯葉、きな粉ね…」

？

これは、頼まれた家のおつかいの品だろうか…。
更に、雪子はメモを読み上げる。

「あとは、聖戦士ダンバインのDVD全巻も…」

！？

思わず、椅子から滑り落ちた…。

何故、ここで聖戦士ダンバイン…。ガンダムならまだしも、何故、
オーラバトラーを…。

いや…、きっと、これも家のおつかいに違いない…。

そう自分に言い聞かせた…。

更に、雪子はメモを読み上げる。

「あつ、やっぱり、戦闘メカ、ザブングルに…」

！？

驚きのあまり、テーブルに頭をぶつけた。

額から血が流れた。

何故、何故、さつきから、マイナーなロボットアニメを…。

そうだ…、きっと、これも、おつかいに違いない…。

きっと、雪子のお父さんは、その世代に違いない…。

すると、雪子は…。

「ねえ？イデオン、ザブングル、ダンバイン、エルガイムのうち、どれがいいかな…？」

と聞かれ驚きのあまり、テーブルに倒れた。その衝撃でフードコートテーブルを破壊し、顔面血まみれになった。

「だっ、大丈夫？」

血を拭いながら大丈夫と言い、富野アニメなら、キングゲイナーがオススメかな…、と雪子に薦めた…。

寛容力がアップした。
伝達力がアップした。

「わかった…。やっぱり、あなたに相談して良かった…」

雪子から感謝の気持ちが伝わる…。
だが、さつきから、どうしたのだ…。
なんで、彼女の買い物リストは、さつきからカオスなんだ…。

違うテーブルに移動した。
ちなみに、血がまだ止まらない…。
また、雪子がメモを読み上げる。

「あと、必要なのは…」

どうやら、血が止まったようだ…。

「ドカベンの柔道編、全巻ね…」

驚きのあまり、テーブルに頭をぶつけた。
またテーブルが大破した。
額から、シャドウのように血が吹き出した。

「ちょっと、大丈夫!？」

いや、大丈夫だ…、と答えた。
寛容力がアップした。

というか、なんなんだ、そのカオスな買い物リストは…。
一人暮らしにも、おつかいにも必要とされるのか…。
ていうか、せめて、プロ野球編をだな…。

また、テーブルを移動した。

そして、赤くなった自分の身体を拭いていると、また雪子が買い物リストのメモを読み上げる…。

「あとは…、カブトボーグのトムキャットレッドビートルね…」

もう生産してねえよ!とツツコミながら、テーブルに倒れた。

また、テーブルが大破した。

破片が、身体中に突き刺さり、身体から血がシャドウのように吹き出す。

また、違うテーブルを移動した。

さつきから、結構なテーブルを破壊してしまった…。

そして、また雪子は買い物リストを読み上げる…。

今度はなんだ…。
今度は、どんなカオスな品物が出るんだ…。
今度は、どんなカオスな…。

「あと、必要なのは、3色マーカーね…」

どうせなら、ボケろよ!?!とツッコミながら、テーブルを叩き壊した。

その衝撃で、俺の両手が真っ赤に染まる…。

「ちょっと、大丈夫!?!」

大丈夫じゃないよ!と、ダチヨウ倶楽部の上島のようなテーシヨンでキレた。

根気がかなり下がった。

一体、さつきから、なんなんだと、雪子に聞いた…。

「じっ、実はその…」

雪子の顔が曇った。

「そつ、その…、花村君や、千枝が一緒だと…、あなた、よく笑ってたから…」

雪子は顔を赤らめている…。

「だから、今日、わたしも、あなたを笑わせてみようかなって…。だから、さつきから、笑わせてみようかと努力はしたんだけど…。ダメだった…、かな…？」

…。

雪子の真つ直ぐな想いを感じた…。
そう言われ、クスッ…、と笑った。

「あつ…」

雪子は驚いている。

笑いながら、そんなに無理しなくても雪子と一緒にだと、充分に楽しいから気にするな、と言った。

「そつ、そう？あつ、ありがとうね…」

雪子は顔を赤くして、感謝している。

「そつ、それにしても、さつきから、オーバーリアクション過ぎ…、アハハハハ！…！」

どうやら、いつもの雪子の爆笑癖にスイッチが入ったようだ。

二人一緒に、クタクタになるまで腹を抱えて笑いあった。

「じゃあね…」

暗くなったので、雪子を途中まで送って行き帰宅した。

夜

ジュネスフードコート

陽介が泣きながら、自分が破壊したテーブル達を片付けている。

雪子編（後書き）

雪子は家業を継ぐか継がないかで揺れる感情が、就活を控えた自分から見て凄くリアルだな…、と思いました…。だから、コミュ活動では、かなり見入ってしまいました…。あと、友達ルートに、一番行きにくいキャラクターだと思います、彼女…。いや、好きですよ（笑）

実際、これに悩んだ人は居たんじゃないだろうかシリーズ編

2011年某月某日(月) 晴れ

朝

学校に着くと、陽介が死んだような顔をしている…。
どうかしたのだろうか…？

「いや…、昨日…。誰かは解らないけど、迷惑な客が居てよ…。フードコートテーブルが何個もブツ壊されてて、その片付けと修理でクタクタだよ…」

迷惑な客も居るんだな…、と言った。
許せないな…、と陽介言つと…。

「だよな！だよな！つたく、里中じゃねえけど、テーブル壊した犯人を見つけたして、顔面靴跡だらけにしてやりてえよ…」

陽介は喜んでいる。

少しだけ、陽介との仲が深まった。

寛容力がアップした。

昼休み

階段を歩いていると…。

陽介と鉢合わせした。

「よぉ！今日は、一緒に飯でも食い行かねえか？まあ、考えといてくれよ」

と、陽介から誘われた。

今日は、陽介と一緒に過ごそうか…。

しばらくすると…。

今度は、千枝が現れた。

「おーす。今日、暇？一緒に、特訓やってかない？じゃあ、考えといてー」

千枝から誘われた。

今日は、千枝と一緒に過ごそうか…。

しばらくすると…。

今度は、雪子が現れた。

「あら、昨日の怪我は大丈夫？そうだ、今日も、また付き合ってもらいたいんだけど…。考えておいてもらえると嬉しいな…」

雪子から誘われた。

今日は、雪子と一緒に過ごそうか…。

しばらくすると…。

今度は、完二が現れた。

「ちーっす。先輩、今日暇っすか？」

完二からも誘われた…。

今日は、完二と一緒に過ごそうか…。

しばらくすると…。

「あつ、先輩ー」

今度は、りせが現れた…。

同じく、また誘われてしまった…。

しばらくすると、今度は、直斗が…。

「あつ、先輩…、奇遇ですね…」

やはり、直斗からも誘われてしまった…。

しばらくすると、長瀬、一条が現れた…。

「うーっす、今日は部活だなー」

今度は、部活に誘われてしまった…。

しばらくすると…、彩音が現れた…。

「あつ、先輩…、今日は部活ですね」

今度は、吹奏楽部に誘われてしまった…。

しばらくすると…、あいが現れた…。

「今日、暇でしょ、付き合ってよ…」

やはり、誘われてしまった…。

しばらくすると…、尚紀が現れた…。

「あつ…、あの今日、話したいことがあるんで、時間頂けますか…」

やはり、誘われてしまった…。

かなりのコミュニケーションバーから誘いを受けてしまった…。

今日の放課後は、誰と過ごすか…。

しばらくすると、携帯電話が鳴った。

菜々子からだ…。

「お兄ちゃん、今日、早く帰ってきてー！菜々子と遊ぼ」

しかし、今日は、学校に居る全員から誘いを受けてしまった…。

「お兄ちゃん…、忙しいの…」

電話の向こうの菜々子は哀しげだ…。

菜々子と過ごすことにした。

放課後

陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、一条、長瀬、彩音、あい、

尚紀が、同時に口を合わせて呟いた。

「来ないッ……」

その頃、菜々子と一緒に川原で、鬼ごっこをして過ごした。

待てー、捕まえちゃうぞー、と自分をフルスロットルにして菜々子を追いつけた。

「きゃー、お兄ちゃん、怖いー、きゃー、捕まっちゃったー」

菜々子との仲が、かなり深まった。

実際、これに悩んだ人は居たんじゃないだろうかシリーズ編（後書き）

優柔不断な性格だから、本当に、昼休みのこれは、せめて二人ぐらいにしてくれ…。

「ご飯にする？それとも、お風呂にする？それとも、寝る？編

2011年某月某日（日） 晴れ

昼間

今日は、陽介と過ごすことにした。

「じゃあ、今日はお前んちな！」

陽介が部屋に来ることになった。

自室

「へえー、結構、片付いてんじゃん」

陽介は部屋を見渡している。

「で、前フリになしに、お布団の下チエック!!」

なんと、陽介はいきなり布団の下を詮索してる。

やめる!と、陽介に言った。

「へへ、大丈夫だって!誰にもバラしやしねえし、健康的な男子なら、当たり前だつての!」

陽介は楽しそうだ…。

しばらくすると、陽介が布団の中から、なにかを発見。

「おっ、誰かの写真発見！」

陽介は自分の布団の中から、写真一枚を発見した。
わくわくしながら、陽介は写真を見ている。

「誰の写真だー！？里中か？天城か？それとも、りせちーの…」

写真は、柳 慎吾の若き日のプロマイドだ。

「えっ…と、その…」

陽介は黙り込んだ…。

帰り際に、陽介はアバヨ…、と叫んで帰っていった。

翌日 晴れ

放課後

今日は、千枝と過ごすことにした。

「じゃ…、じゃあ、今日はキミンちでいいかな…?」

千枝は、顔を赤くしている。

千枝が部屋に来ることになった。

自室

千枝はキョロキョロと部屋を見渡している。

「えっ、えっと…」

落ち着きのない千枝に、今から、お茶持ってくるから、適当にくつろいでいると言っておいた。

「うっ、うん、わかった…」

そわそわしている千枝が気になったが、とりあえず、お茶を用意するため、下に降りた。

「…」

自分が居なくなつたあと、千枝が自分の布団に視線をやつた。
なにか気になっていようだ…。

「やっぱり…、花村と同じく…、あんな本とか…、持ってたりするのかな…」

千枝が布団をかなり凝視している。

「だつ、ダメよ…。プライバシー侵害だよ…。ダメよ、わたし…。それに、あーいうのに興味がある年頃だとも思うし…」

とは言いながらも、千枝は自分が居ない間に、布団の下を詮索し始めた…。

千枝は自分の布団の下から、一枚の写真を見つけ出した。

「えっ…！？だつ、誰のしゃ、写真…。雪子…？それとも、りせちゃん…。まさか、直斗君…」

写真は、若き日の西 秀樹のプロマイドだ。

「…」

帰り際に、千枝はYMCAと呟いて帰って行った…。

翌日 曇り

放課後

今日は、雪子と過ごすことにした。

「今日は、あなたの部屋に行ってみたい…」

雪子は照れながら、そう言った。

雪子が部屋に来ることになった。

自室

雪子は、そわそわしている。

「あ…、お布団なんだね…。わたしも寝るときは、お布団…」

と言いながら、雪子は自分の布団に近づいた。

「あれっ？なにかしら…」

雪子は、なにかを見つけたようだ。
彼女は、布団の下からなにかを見つけ出した。

若き日の加 雄三のレコードが出てきた。

帰り際、雪子は空に太陽があるかぎり……と呟きながら帰っていった。
それはスター錦野だ、とツツコンでおいた。

翌日、曇り

放課後

完二が部屋に来ることになった。

自室

完二は自分の布団の下から、イエローマジックオーケストラ、略して、Y Oの『君に胸キュン』のレコードを見つけた。

帰り際、完二は、ま あてほ っく面白かったですね…、と呟いて帰っていった。

翌日 曇り

放課後

直斗が部屋に来ることになった。

直斗は自分の布団の下から、映画『ゴラ（初代）』のパンフレットを見つけた。

帰り際、直斗はヘドラは最高傑作です…、と呟いて帰っていった。

翌日 雨

放課後

りせが部屋に来ることになった。

りせは部屋を見渡している。

「あっ、お布団発見！やっぱり、アレはお布団の下に隠しているの
でしょうか？」

と、りせは自分の布団をじろじろ見つめている。
なんのことだと、言った。

「もうー、とぼけないでよー、先輩ー」

と、りせは笑ってはいる…。
しかし、りせの心の中…。

(花村先輩や、千枝先輩、雪子先輩、完二、直斗君が言ってたけど、
先輩の布団の下は見ない方がいいって…、なにを見たのかしら…)

りせは、自分の布団の近づいた。

「ねえ？先輩ー。お布団の下、調べてもいいー？」

甘えた釘宮ボイスで、りせが頼んでくる…。

やっ、やめてくれ…、と言った。

だが、りせは…。

「えっー。先輩のバカ犬、駄犬…、じゃなかった…、先輩のケチー」

りせは、更に釘宮ボイスを効かせた甘えた声で迫ってくる…。
わかった…、わかった…、と言った。

「やったー！先輩、大好きー」

と言いながら、りせは布団の下を詮索した。
すると、布団の下から、一枚の写真を発見した。

「あーっ、写真だー！誰の写真？千枝先輩？雪子先輩？それとも、直斗君のー！？いやーっ、先輩つたら…」

写真は、陽介のスナップ写真だ。

「先輩のバカ！変態！！バカ犬！駄犬！！」

りせは泣きながら、部屋から飛び出して行った…。あとで、謝
っておこう…。

雪子編2

2011年4月30日(土) 晴れ

放課後

なんとか、雪子を救い出すことに成功し、今日から登校することになった。

「お待たせ…。千枝はおそばの方だよね…」

「おー、部活前のこの一杯がたまらないのよね…。あとのくらい？」

「まだまだよ。だから、出来るまでの会話の流れは原作のゲームを参考にしとね」

「誰に言ってるんの、雪子？」

しばらくすると、2人とも、カップ麺は容赦なく食べ始めた。

「なあ、先生！一口だけ！なっ、一口だけ！」

陽介は見境なく、千枝に頼み込んでいる。

千枝は汁を飲みながら…。

「うっさいな…。じゃあ、一口だけだよ…」

と言って、千枝は陽介に緑のためきを渡した。

「ウメー、ウメー」

陽介はズルズルと食べている。

そういえば、今日は、弁当箱と間違えて、日曜大工セットを持っ
てきてしまったので、昼休みはなにも食べていない…。

雪子が食べている赤いきつねの香りが食欲を誘う…。

「ウマー、ウマー！」

陽介は、千枝の緑のためきのカップに口をつけて汁を飲んでい

…。

…。

さつきから、気になったのだが、何げにアレは間接…、ツスでは
…。

陽介、千枝の2人は気付いていないようだが…。

「…！」

雪子が赤いきつねの汁をすすりながら、こちらに気付いた。

…。

ここで、赤いきつねを渡されてしまったら…、雪子と間接ちっ…。
そう考えると、少し赤くなってしまった…。

いや、なにを取り乱している、落ち着け自分…、と自分を落ち着
かせた。

素数を数えた…。

知識が高まった。

すると、雪子はこちらの様子に気付いた…。

雪子はアタフタしながら…、自分に視線を送り…。

「あっ…、あげないからね…」

まあ、普通、現実はこうだよね！と自分に言い聞かせた。
寛容力が高まった。
根気が高まりすぎて、ブツダ級になった。
勇気が高まりすぎて、宇宙刑事級になった。

雪子編2(後書き)

このシーンは、4人とも凶太いなと思った…。

さよなら、モロキン先生編

2011年某月某日(月) 晴れ

午前

「であるからにして、人体において心臓がある胸部には……」

と、モロキンがウダウダと授業をしている。

昨日は探索に行き疲れてたので、ぼんやりと、女性の胸について考えていた……。

やはり、個人的には大きすぎず、小さすぎずだが、女性を胸で判断するのは良くないという決断に至った。

知識が高まった。

寛容力が高まった。

すると、モロキンが……。

「コラッ！ 貴様、聞いておるのか！？ 花村！？ 立て！」

後ろの席で、居眠りをしていた陽介がビクッ！となり、立ち上がった。

「うひっ！？」

涎を拭いながら、陽介が焦っている。

「やべっ、全然、聞いてなかった……」

モロキンが意地の悪い表情を浮かべている…。

「花村、この問いの答えんか！？もし、答えられなかった場合は…」
「やべえ…、どうしよう…、おい、相棒…、助けてくれ！」

と陽介に助けを求められた。

無論、さつきから余計なことを考えていたため、モロキンの問いなど解らない…。

しかし、陽介はかなり困っている…。

なので、仕方なく『おっぱい』と答えた。

「おっ、おっぱい!!」

陽介が、大きな声で叫んだ。

クラス中が、シーンとなった…。

「って、うわあ!!なんだよ、おっぱいって!?!」

無我夢中だったのか、陽介は、自分の答えた言葉をそのまま喋ってしまった。

「うっ、恨むぜ…、相棒…」

陽介は涙を流し始めた。

陽介は、モロキンからの制裁を覚悟している…。
悪いことをしてしまった…。

あと、謝っておこう…、と思つてると、モロキンが…。

「ちっ、よく解つたな…」

正解だったようだ…。

「へっ…」

陽介がへたへた…、と椅子に倒れた…。
こんな偶然もあるんだな…、と思った。

「いやー、助かったぜ、相棒！」

陽介から感謝された。
少しだけ仲が深まった。

「はい、先生…」

しばらくすると、雪子が手を挙げて立ち上がった。

「これ、セクハラです」

このあと、モロキンは校長から絞られた。

お婆ちゃんが言っていた…。シスコンキャラは最強キャラが多いと…編(前書き

品
仮面ライダーに、仮面ライダーカブトが出てきた記念作

お婆ちゃんが言っていた…。シスコンキャラは最強キャラが多いと…編

2011年某月某日（土） 雨

放課後

教室で、新しいバイト先に電話で問い合わせをした。
陽介、千枝、雪子が見ている。

「花村」。彼、どうしたの？」

「あいつ、どうやら新しいバイト始めるみたいだな」

「なんの、アルバイトなのかな？」

「なんか、児童の面倒を見るバイトらしいな」

みんなが自分を見ているが、気にせずに面接担当と話をした。

「えーっと、あなたは、子どもは好きですか？」

無論、大好きです。今いとこの妹と暮らしています、と答えた。
陽介が笑いながら…。

「そりゃあ、あいつには、菜々子ちゃんみたいな妹がいるからな」と言った。

それを聞いて、千枝、雪子もフツツ…、と笑っている。

「そうですかー」

更に、菜々子は本当に可愛いくて仕方ありません、と言った。

面接担当、陽介、千枝、雪子は笑っている。

更に、菜々子が可愛いすぎて、本当にどうしようかと悩んでいます、と言った。

陽介、千枝、雪子の顔が少し固まってきた。

更に、菜々子を想うと胸が苦しくなります、と言った。

陽介、千枝、雪子の顔が固まった。面接担当が引いてるのが、電話越しにわかる。

更に、菜々子にお兄ちゃん大好き！と言われた日、悶えすぎて三日間はまとも眠れませんでした、と言った。

陽介の顔は膠着し、千枝、雪子はシャドウみtainな顔をした。

つい思い余って、ああー！！菜々子！菜々子、好きだ！愛してる！！と叫んだ。

クラスに居る全員が固まった。

しばらく、面接担当と話した。

そして、電話を切った。

陽介、千枝、雪子を始めとするクラスに居る全員は、なにで例えれば良いか解らないような表情をしている。

とりあえず、採用されたのを伝えた。

陽介、千枝、雪子は転けて、自らの机を破壊した。

お婆ちゃんが言っていた…。シスコンキャラは最強キャラが多いと…編（後書き

シスコン最強キャラ（作者調べ） ルーシユ・ラペルージ、天

総司、リュ タロス、沖田 悟、ペル ナ4主人公

オシヤレ番長編（前書き）

今回の話は、かなり主人公のイメージを破壊しています…。どうか、わたしをテレビに突き落とすたくなくなるくらいに怒ったりしないでください…。

オシヤレ番長編

2012年1月2日(月) 吹雪

昼間

今日は、部屋に完二が来ている。
いやー、今日は寒いなー、と言った。

無論、ふんどしだけで。

さあ、(ギャグに)ツッコめ、完二。
なんで、ふんどしだけなんすか!!そりゃあ、寒いに決まってる
だろ!あんた!?!とツッコむのだ、完二...。
すると...。

「確かに、寒いツスね。結構、俺、厚着してきたんツスけどね...」
!?

(ギャグに)ツッコまない...。
暖房なしで、窓を開けっ放しにして、自分はふんどしだけでいる
のに、ツッコまない...。

「というか、実は、寒いんだぞ…。」

「そつだ、先輩…、今、暖房器具が大特価で売られてるんで、一緒に、ジュネスに見に行きませんか？」

完二と、ジュネスに行くことになった…。

無論、自分はふんどしだけで…。

ジュネス、家電コーナー

「いやー、ジュネスは暖房効いてて良いツスねー」

完二はそう言うが、ふんどしだけの自分には暖房など無意味に近い…。

何故だ…、ジュネスまでふんどしで来たのに、ツッコまないなんて、ある意味、暴力だぞ…。

「おつ、先輩！ホットカーペットツスよ！」

お前を、ホットカーペットにしてやるうか！？

しばらくすると、陽介、クマが現れた。

「うーっすー！」

「うーっすクマー！」

どうやら、手伝いを終えて、たまたま鉢合わせしたようだ…。

よし…、このファンフィクション作品にて、ナンバー1のツッコ担当である（ナンバー2、完二。ナンバー3、千枝）陽介なら、公衆の面前でふんどしだけの自分にツッコミを…。

「花村先輩、ふとっぱらクマー！」

勝手に、なに盛り上がってやんだ！貴様ら！
お前達を、太っ腹にしてやるうか！？

みんなで、フードコートに行くことになった…。
無論、ふんどしそのままで…。

フードコート…。

雪が降りしきる中、陽介達とフードコートに来た…。
冷たい雪が、我が素肌に染み渡り、冬の寒空が我が身体を凍らせる。

「おっ！里中、天城、りせに、直斗じゃん！」

「うほほーい！みんな居るクマー！！」

！？

なんと、フードコートに女性陣が居る…。
さすがに、女性陣ならツツコミを入れるだろう…。
特に、全裸ネタに反応しやすいことに定評のある千枝なら、間違
いなくツツコミを入れるだろう…。

予想

「（予想の千枝）てうわあああ！？なっ、なんで、ふんどしだけなのよー…！」

「（予想の雪子）ちょ、ちよつと！」

「（予想のりせ）せつ、先輩のエッチ！」

「（予想の直斗）なっ、なにをやっているですか！？先輩！！！」

と、なるにちがいなっ…。

「おーっす！いつものメンバーが揃ったねー」

「あら、今日はどうしたの？」

「先輩、隣来てー！あつ、完二は直斗の隣にしてあげるー」

「ちよつ、久慈川さん！！！」

誰も、ツツコまねえ！！

勢い余って倒れ、テーブルを破壊した…。

寒空の下、りせの隣に座った…。

本当に、誰も自分のふんどし姿にツツコミを入れない…。

「そつだ！今から、かき氷食べないー、冬に食べるかき氷とか美味しいよねー」

「相変わらず、バカだな…里中は…」

「でも、面白そうよねー」

「ちよつ、天城！？」

「俺も、賛成ッス！」

「クマも、賛成ー！」

ツッコミを入れないどころか、この寒空で、なんか変な真似を始めようとしている！

まずい！根気が、ブツダ級とはいえ、この寒空にふんどし姿で、かき氷はさすがに自殺行為だ！

「お前はどつする？」

と、陽介が聞いてきた。

いいかげんしろ！と、立ち上がって叫んだ。

みんな、驚いている。

なんで、ふんどしだけなんだよー！！って、ツッコめよ！何カ月、この業界に居るんだよ！！っていうか、この時期にかき氷売ってねえよ！！と叫んだ。

みんな、静まり返った…。

すると…、陽介が…。

「あつ、本当だ」

！？

「確かに、先生、ふんどしだけクマ」

「本当だ、ふんどしだけツスね…。なんか、俺の時を思い出しますね…。」

陽介、クマ、完二のノリが軽い…。

「あつ、確かに、ふんどしだ」

「うん、ふんどしよね」

「先輩、寒くない？りせが暖めたげようか？ふふっ」

「先輩、上着貸しましょうか？」

千枝、雪子、りせ、直斗の反応も薄い…。

なっ、なんだこれは…。

うわあああああ！と泣きながら、フードコートから出て行った。
無論、ふんどしそのままです…。

八十稲葉商店街…。

泣きながら、ふんどし姿のまま、商店街に来てしまった…。
ん？

だいたら屋の隣に、ベルベツトルームの扉がある…。

…。
さすがに、イゴール、マーガレットならツッコんでくれるだろう

…。

そう思い、扉を開けた。

ガチャッ…、ギイイイ…。

「おやおや…、お客人…、なんの御用で…」

「ようこそ、ベルベツトルームへ…」

ツッコまない…。

なんでもないよ！と泣きながら、ベルベツトルームから飛び出した…。

このあと、ふんどし姿で、あらゆるコミュニティメンバーの所に訪ねたが、誰もツッコミを入れてくれなかった…。

今日は、もう帰ることにした…。
無論、ふんどし姿で。

自宅

「おっ、おかえり…。今日、外寒かったろ？」

堂島が迎え入れてくれた…。

やはり、ふんどし姿の自分にツッコミを入れない…。
だが…。

「って、おい！お前、なんで、ふんどしだけだ！！」

！？

堂島がツッコんでくれた！！しかも、ノリツッコミだ！！

やったー！やったぞー！と泣きながら叫んだ。

堂島との仲がかなり深まった…。

八十稲葉警察署…。

ふんどし姿のまま、堂島から取調室に連れてこられた…。

…という初夢を見たのを、無理矢理、ジュネスのフードコートに
集めた陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマに聞かせた…。
みんな、力尽きた顔をしている…。

オシャレ番長編（後書き）

「元ネタ「ピューと吹く！ジャガーの『ツ』のつくアレを込め！」の回

完二編

2011年某月某日（火） 晴れ

放課後

今日は完二と過ごすことにした。

中華食堂の愛屋へ行くことになり、二人で商店街を歩いていると
…。

「へへっ…、ちよつとぐらい持っているんだろ…?」

「いいから、出せよ…」

近くから、なにやら物騒な声がした。

「先輩!?!」

完二と一緒に、その声の方へ向かった。

!?!

「おら、出せよ!」

なんと以前、完二と会った子ども（原作ゲームの完二コミュ参照）が、以前、千枝の時に会った恐喝グループ（原作ゲームの千枝コミュ参照）に絡まれている。

「あっ、おじちゃん!」

男の子が完二を見て、喜んだ。

「ちっ！モタモタしてるから、誰か来ちまったじゃねえか…」

「おい！あいつ、巽完二だ！」

さすがに恐喝グループが、完二を見て怯み始めた。

「おっおっ…、なにやってんだ、てめえら…」

完二は拳を鳴らしながら、恐喝グループに近づく。
だが…。

「あっ、てめえ！」

なんと、恐喝グループの一人が男の子を人質に捕った。

「うっっ！」

男の子は苦しそうにしている…。

「てめえら！そのガキ離しやがれ！！」

完二は叫んだ。

「離すわけねえだろ！」

「殴ってみろよ、巽完二…。俺たちも、このガキをタダじゃあ済ま
さねえからよ」

恐喝グループは、男の子を盾にしている。

さすがの完二も、手が出せない…。

乱暴に盾にされている男の子が苦しがっている…。

完二は、握っていた拳を開いた。

「おいおい、巽の奴、急に弱気になっちまったぜ」

「こりゃあ、いい気味だ」

恐喝グループは下卑た笑いをしている…。

「クソが…。いいから、そのガキ離しやがれ！」

完二は、必死に叫んだ。

「そんな態度でいいのか？」

「うっ…」

怒りに震えながら、完二は頭を下げた。

「すみません…。どうか、そのガキ、離してやって下さい…」

完二の頭を下げる姿を見て、恐喝グループは大声で笑い始めた。

「あははははは！！情けねえ！」

完二は歯を食い縛っている…。

自分の中で、なにかが弾けた…。

恐喝グループに、いいかげんに、その子を離せと言った。

「なんだ、てめえ？」

リーダー格の一人が近づきて、自分の襟首を握った。

「そついや、こいつ…、以前、あの変な女と一緒に舐めてかかってきたよな…」

「ちようどいいや…、憂さ晴らしに殴らせるよ…」

「そしたら、このガキを解放してやるよ…」

と、恐喝グループは自分を囲み始めた。

「先輩！」

完二が驚いている。

「てめえら！先輩は関係ねえだろ！！」

ついに完二は怒りで、また拳を握った。

だが…、やめろ、と完二に言った。

「なんでだよ！？」

恐喝グループに捕まっている男の子に危害が及ぶ、と言った。

だが、それでも、完二は納得が行かないようだ…。

「だけだよ！先輩は、先輩は…」

完二の手は、もう人を殴るためにあるんじゃない…、と言った。

「えっ？」

お前の手は裁縫するためにあるんだろ、その男の子のように、誰かを喜ばせるためにあるんだろ、と言った。

「…！」

完二は言葉を失った。

「なに言ってるんだ？こいつ…」

「いいから、やっちまおうぜ…」

バゴツ！！

恐喝グループは、ついに自分を殴り始めた。

「せつ、先輩！！」

完二が止めに入った。

だが、来るな！と叫んだ。

「先輩が、こんな目にあってるの見てられねえよ！」

完二が悔しそうに涙を流し始めた。

それでも来たら、自分が完二を殴るぞ、と言った。

そう言つと、完二は、チクシヨウ！チクシヨウ！と言いながら、悔しそうに地面に塞ぎ込んだ。

しばらくして…。恐喝グループの気が済むまで、自分を殴らせた。恐喝グループは男の子を解放して、どこかへ立ち去って行った。ボロボロになり、地面に倒れた自分に完二が近寄る。

「先輩！先輩！バカツスよ！あんた…、あんたは…、本当にバカツスよ…」

男の子は無事かと聞いた。

「ああっ！あんたのおかげだよ…、先輩！」

完二は泣いている。

感情に任せて、よくあいつらを殴らなかったな…、偉いぞ…、と完二に言った。

「先輩…、あんた…、カッコ良すぎるよ…、カッコ良すぎて、俺の涙腺崩壊しちまったよ…」

完二は泣きながら、ボロボロになった自分を抱えて病院へと向かった。

翌週 晴れ

放課後

今日は、千枝と過ごすことにした。

「じゃあ、肉食べに行こう！」

と言い、商店街に向かった。
だが…。

「こないだは、邪魔が入っちゃまったけどな…」
「今日こそ、出せよ…」

その途中で、こないだの恐喝グループを見つけた。
しかも、また、あの男の子を脅している…。

「あつ、あいつら!」

千枝が助けに飛び出そうとした、その時…。

「おつ、お前らなんか!怖くないぞ!」

!?

なんと、男の子が恐喝グループに刃向かい、リーダー格の手に噛み付いた。

「えっ?」

驚いた千枝の足が止まった。

「なんだ!このガキ!??」

恐喝グループは驚いている。

「お前達なんか、もう怖くないんだからな!」

男の子は、強気で恐喝グループを睨んでいる…。
しばらくすると、警官が現れた。

「コラー!なにをやっている!」

「やべえ！」

恐喝グループは、一目散に逃げて行った…。

男の子は、かなりの勇気を出したのか、息を切らしている。

「お前達なんかに、もう怯えてやんないからな！」

また、男の子は逃げて行く恐喝グループに叫んだ。

それを見て、千枝は、なにがなんだか解らない表情をしている。

「なっ、なにがあつた…？」

あっけらかんとした千枝の肩に手を置いて、早く肉食べに行くぞ

…、と言った。

「あっ、うん！」

また歩き出すと、男の子がこちらに気付いた。

男の子は、こないだとは違う顔をして、こちらに向かって親指を立てた。

自分も男の子に向かって、親指を立てた。

と言う初夢も見たと、ジュネスのフードコートに無理矢理に集めた陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマに話した…。

「うっ、うっ、やばいよ…、これ…、これヤバイよ…」

「ちっ、千枝…、ちよっ、ちよっと、なき、泣きすぎだって…」

「ゆっ、雪子だっ、だって…」

「チクシヨウ…、目からなんか水が出てきやがる…、ちっ、チクシヨウ…、カツコわりいよ、俺…」

千枝、雪子、完二は泣きながら大拍手をした…。

「やだっ…、なんで、あたしも泣いてるのよ…、うわあああん！
「！」

「りせちゃん…、クマも涙止まんないクマああああん！！」

りせとクマは、抱き合って泣いている。

「」

「」

陽介、直斗は無表情で固まっている…。

「バカだ…、なあ、直斗…」

「まったくです…、グスツ…」

陽介は、直斗の顔を見た。

直斗の目が、やけに赤かったのを陽介は見逃さなかった。

完二編（後書き）

完二は衝撃的でした…。あのマヨナカテレビは衝撃的でした…。初めて登場したとき、完二は野蛮そうで苦手だと思いましたが、あのマヨナカテレビ以来、かなり好感度が上がりました…。声優さんの熱演が凄かったです…。

劇場版 ペルソナ4 ～陽介VS千枝～編

2012年1月9日(月) 晴れ

昼間

今日は、菜々子、堂島がネタバレ的な理由で明日まで居ない…。
しかも、仲間たちは用事があると言い、完全に今日はひとりぼ
ちだ…。

今日の晩食は、すき焼きにすることにした。

夜

奮発して、ジユネスで高級牛肉を買ってきた。
そして、その他、必要な材料を買い漁り、かなり豪勢なすき焼き
鍋になった。
これを独り占めすると、考えるだけで、我がペルソナ『マール
』が興奮している…。

興奮しているのはペルソナの『マール』です。

コタツの上にコンロをセットし、すき焼き鍋を置いた。
さて、いただくか…。
と、卵を割り、肉に箸を付けようとした瞬間…。

ピンポン!!

誰か来たようだ…。
こんなときに…。

「いよー、相棒！」

「先生ー！あなたのクマクマよー！！」

今日は忙しいとの理由で自分の誘いをガン無視した、陽介、クマが現れた…。

「おまえ、一人じゃあ寂しいかと思ってよ…。」

と言いながら、勝手に居間に上がってきた…。

「ウホッ！すき焼きクマー！ヨースケー！本当に、すき焼きクマよー！！」

「バカ！声でけえ…。」

クマの『本当に』との言葉…。たぶん、ジュネスで買い物していたところを見られ、すき焼きだと嗅ぎつけたか…。

だが…、一人に食べるには多いし、ちようちよ、一人ですき焼きとというのも寂しいから、陽介、クマを受け入れることにした。

寛容力、オカン級の為せる業だ。

「ウホッ！マジか、相棒！」

「さっすがー、先生ー！！クマ、キュンと来たクマー！！」

2人は、とても喜んでいる…。

陽介、クマとの絆を感じた。

「すき焼きー！すき焼きー！クマーン」

陽介、クマがコタツに座った。

2人とも卵を割り、食べるスタンバイをした。

「よし、じゃあ、いただくとす…」

陽介がそう言った瞬間…。

ピンポーン！

また、誰か来たようだ…。

こんなときに…。

陽介、クマが勝手に食べないように、ペルソナ『マール』を見張りに置いて玄関に向かった…。

「ちーっす！先輩、借りていた『Gガ ダム』のDVD返しに来ました」

なんと、完二が偶然に現れた…。

こんなタイミングに…。

「あれっ！花村先輩や、クマ公も！あつ、すき焼きじゃないツスカー！！ズルイツスよ、先輩らだけ！！」

しかも、すき焼きに気付かれた…。

空気読めよ、タコが…、とボソツと言った…。

「先輩、今、さらっとなにを…」

だが、まあ、それでも肉はあるので、完二を受け入れることにした。

寛容力、オカン級の為せる業だ。

「さすが、先輩ー！！ありがとうーッス！」

完二もコタツに座った。

「ウホッ！いいお肉……」

グツグツ煮えた鍋を見て、完二は喜んでいる。

「くそ……、完二め……、空気読めつての……」

「カンジは……、公園にでも行ってればいいクマ……」

陽介、クマは完二を睨んでいる……。

とりあえず、仕切り直して、いただきます……、と言おうとした瞬間……。

ピンポーン！！

また、誰か現れた……。

陽介、クマ、完二が勝手に食べないように、ペルソナ『マーラ』を見張りに置いて、玄関に行った。

「このペルソナ……、すごく……、大きいです……」

完二は、マールラを見て驚いている。
あくまで、ペルソナ『マールラ』です。

「ヤッホー、先輩ー」

「こんばんは…」

りせと、直斗が現れた。

こんなタイミングに…。

「りせね、先輩から借りていた『鋼の錬 術士』の単行本全巻返しに来たよ」

「僕も、先輩から借りた『鋼の錬金 士』のDVDを返しに…。あれっ？花村先輩や、クマ君が居ますね…」

「あつ、すき焼きだー！」

やはり、すき焼きに気付かれた…。

まあ、この二人なら、がっついて食べないだろう…、と思い受け入れることにした。

「俺の時と…、態度ちがくねッスか…」

完二が複雑な表情をしている。

レディの前なので、ペルソナ『マールラ』を元に戻した…。

あくまで、ペルソナのマールラです。なに想像してるんですか？

「まあまあ、にぎやかになってきたじゃねえか」

と陽介が笑っている。

「それに、『あいつ』が居ないだけいいだろ…」

「『あいつ』？誰、クマか？」
「……」

陽介の顔が曇った…。
ついでに、完二の顔も曇った…。

「ああ…、あの人」ツスね…」
「ああ…、肉といえば…」

陽介が、なにかを言おうとした瞬間…。

ピンポーン！

「はっ！？」

「まさか！？」

陽介、完二の顔が鬼気迫っている。

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン
！！

怖いくらいに、呼び鈴を鳴らされている…。
恐る恐る玄関を開けた。

「おーす！偶然、ここに来ちゃったー！！あれー、みんな、どうして、集まってるのー！？あつ、あれー！！すき焼きじゃん！！私だけ、仲間ハズレなんて、ずつるーい！！」

千枝が現れた…。

しかも、凄くわざとらしい素振りをし、勝手に話を進めている。

陽介、完二、クマの顔が固まった。

「おい！誰か、里中に、すき焼きやっているのを教えた奴居るか！？」

「教えてないクマ！」

「教えてないツスよ！」

「あつ、あたしも教えてないけど……」

「僕も……」

誰も、千枝に連絡をしていない……。

「じゃあ、おかまいなくー」

しかも、勝手に上がった……。

「わああ！すごいー、すき焼きなんて、何カ月ぶりかしら……」

千枝は陽介から席を力づくで奪い去り、箸を握った。

陽介は怒った。

「里中、てめえ！勝手に現れて、何様……」

千枝は、ペルソナ『スズカゴゼン』の刃を陽介の喉もとに突き付けた……。

「調子に乗って、ごめんなさい……」

陽介は土下座した。

完二、クマ、りせ、直斗の顔が固まった……。

みんな解っているのだ……、これから起きる悲劇に……。

「じゃあ、いっただきます!」

千枝が勝手に食べ始めた…。

まだ、誰も手をつけていない肉に箸を入れようとしている…。

すると…。

バシィー!

「あっ、チエちゃん、ごめんクマー」

クマの手が、わざと千枝の箸にぶつめた。

千枝の箸が落ちた。

「ナイス!クマー!」

陽介が喜んだ。

すると…。

バギーーン!!!

!!!

クマの頭上に、スズカゴゼンのゴッドハンドが落下した。

「ひでぶっ!クマー!」

「クマー!!!」

クマが倒れた…。

陽介、完二が倒れたクマに駆け寄る。

「クマ、しっかりしろ！」

「クマ、漢だったぜ！クマー！！！」

2人はクマの手を握っている…。

「くっ…、クマは…、クマは…、みんなの役に立てたクマか…？」

「ああ、命の恩人だよ…、このクマ吉…」

「バカヤロウ！こんな…、こんなことで…！」

「さよなら…、先生…、ヨースケ、カンジ…。が…、ま…」

クマは力尽きた…。

「クマー…！！！」

陽介、完二は泣き叫んだ。

みんなの脳裏に、クマとの過ごした思い出が甦る…。

自分の脳裏にも、あの日のクマの言葉が甦った。

「へへっ、クマは幸せ者クマねー」

「私は、Lです」

「センサーは、本当に優しいクマね…」

「いつけー！ドラゴンガン ム！！」

「ねえねえ、今度、逆ナンしても良いクマかー？」

「夜神月が、キラなんじゃないかと思っています…」

クマ、再起不能。

陽介は怒りに拳を震わせた。

「さあ、とお、なあ、かあああああ…。てめえの血は何色だあ！
！」

箸を握り直しながら、千枝は…。

「赤だけど…」

と言って、肉を掴もうとした瞬間。

バシィー！

「俺のお箸が真っ赤に燃える…。勝利を掴めと轟き叫ぶ！」

なんと、完二は千枝が掴もうとした肉を横から箸で捕った。

「完二、いつけー！！そのまま、肉をキープしちまえ！！」

だが…。

「ハッ！…！」

完二の頭上には、千枝のスズカゴゼンのゴッドハンドが…。

「完二！避ける！！この物理系ダメージ技は命中率が低い！」

しかし、いつものゴッドハンドの命中とはダンチで違った。
ゴッドハンドは完二の頭上に、またもやヒットした。

「ぐあああああ……!!」
「完二iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

みんなの脳裏に、完二との思い出が甦る。
自分の脳裏にも、完二と過ごした日々が甦った…。

「先輩…、男らしさってなんなんでしょうね…」

「ガンダアアム!!!」

「俺、お袋に迷惑かけてばっかで…」

「石派!ラブラブ!天驚拳!!!!」

「おめえら、絞めんぞ!キュツ!と絞めんぞ!」

「ジャアーン」

完二、再起不能…。

陽介の目から、血の涙が流れている。

「里中!!!貴様ア、そんなに肉が食いたいかあああああああ
!?!」

とうとう、陽介がペルソナ『スサノオ』を出して、戦闘態勢に入
った。

「あーっ!もうさつきから、うつさいな、あんたら!!」

千枝も、さつきから、肉が食べれないイライラからか、とうとう
本気で臨戦態勢に入った…。

二人とも、表現出来ないような凄まじい戦闘を繰り広げている…。

ピンポン！！

呼び鈴が鳴った。

玄関には、雪子が…。

「あつ、こないだから借りてた『コードギース』のDVDを返しに…。って、なんか凄い賑やかだね…」

気にするな、と言った…。

今から、りせ、直斗とすき焼きを食べようとしているから、一緒にどうか聞いた。

「えっ、本当？嬉しい」

雪子は喜んでいる。

すき焼き鍋、コンロを持って、雪子、りせ、直斗を二階に上がらせた。

力尽きたクマヤ、完二も起こして、二階へ上がらせた。

陽介、千枝は…。

そっとしておこっ…。

自室

仕切り直した…。

「あーっ、もう完二ったら、肉ばっか食べすぎー！」

「うるせえな…」

「野菜も食べなよ…、巽君…」

「あつ…、ああ…。わーっただよ…」

「なんで、直斗の言うことは素直に聞くのよ…。まあ、仕方ないか…、完二は直斗に…」

「うっ、うるせえな！」

「あつ、完二君、赤くなったー」

「カンジ、赤くなったクマーー!!」

「ばっ…！天城先輩、クマ、からかうなよ！！せつ、先輩まで！」

こうして、二階で楽しく、雪子、完二、りせ、クマ、直斗とすき焼きを食べて過ごした…。

数時間後…。

庭

陽介と千枝は、大の字になって倒れている。

「里中…、お前…、なかなか、重いパンチしてんな…。お花畑見え
たじゃねえか…」

「花村こそ…、なかなか、やるわね…」

陽介、千枝の絆がかなり深まった…。

劇場版 ペルソナ4 ～陽介VS千枝～編（後書き）

この二人、本当に仲が良かったですよね…。

ガラスのカメンライド編

2011年某月某日（月） 雨

放課後

今日は、演劇部に顔を出すことにした…。

「えーと、今週の土曜に、全校レクリエーションで、演劇をやることになりましたー。細かいことは、ファンフィクションだと割り切ってください」

と、部長がやる気なさそうな話している。隣にいる結実は、かなり気合が入っている…。だからだと部長は話を続けている。

「やる題材は、『ベルサイユのバラ肉』で、配役はヒロインのラスカルは、小沢君に決定しました」
「やったー！」

結実がヒロインに選ばれた。彼女にやったね、と言った。部長は次々と決定した配役を読み上げていく…。そして、自分の役が読み上げられた。

「最後に…、転校生君は、道端を歩いているブタ役…」

部長にアルゼンチンバックブリーカーを決めた。勇気が高まった。

舞台稽古が始まった…。

正直、ブタ役など誰が喜んでやる物か…。

当然、やる気などなく、台詞もなかった…。

結実は、かなりヒロイン役を熱演している…。

しばらくすると、今日の稽古は終わった。

結実以外のみんなは帰って行った…。

すると…、結実がこっちを睨んだ…。

「あなた…、やる気なかったでしょう…？」

無論、と答えた。

バシィー！と結実にビンタされた。

なにをすると、キレた。

「あなた！？演劇を舐めないでちょうだい！！」

結実の目がキラリン！と光を放った。

うおっ、まぶしっ！

「演劇っていうのはね！誰か一人が腐ったみかんだと、一気に腐っちゃうセンチメンタリズムな生物なのよ！！」

物凄い気迫で、結実が怒っている…。

しかし、台詞もない、ただ歩いているブタ役だと、気合いが入らない…、伝えた。

「あなた！そんなことを言って、ブタに失礼だと思わないの！？そんなに、牛が好き！？欧米に敗北してんじゃないわよ！！サムライ

「日本の底力見せなさいよ…」

別に、それは関係ないか？と言った。
しかし、スルーされた…。

「もっと、熱くなれよ！なんで、そこで諦める！？なんで、そこで卑屈になる！？ピンチが最高のチャンスだよ！お米食べなさいよ！
！ネバーギブアップ！！」

…。

結実の気迫で、自分の中の野獣が目覚めた…。
解った！やってやる！と結実に誓った。
自分の目から炎が燃え上がった。

「よし！今から、特訓よ！ブタの気持ちで腕立て伏せしなさい！！」
今日から、結実とブタ役の特訓を始めた。

翌日（火） 晴れ

放課後

「この駄ブタ野郎！全然、ブタになりきれてないじゃない！」
部長が見てる前で、結実がおもいつきり自分を殴った。
部長が止めに入ったが…。

「部長には関係ありません！」
「あるよ…！」

俺達の邪魔をするな！と叫んだ。
勇気が高まった。

(なにこれ？新手のプレイ？)

全員、どん引いている。

翌日(水) 晴れ

放課後

「この酢豚野郎！全然、伝わんない！お前、ブタだって伝わんないよ！それじゃあ！！もっと、熱くなれよ！！！！」

結実に、また殴られた。

翌日(木)

放課後

千枝と雪子が演劇部の部室近くを歩いている。

「そーいや、彼、今度の演劇部の出し物に出るんだって！」

千枝が笑っている。

「へえ、最近、なにか熱心に頑張ってたようだったからね。ちょっと覗いて見ようか？」

雪子がそう言う。

千枝、雪子は部屋を覗いた。

「このブタ野郎！さあ、あなたはブタよ！汚らわしいブタよ！…さあ、お鳴きなさい！」

結実が自分の襟首を持って、罵っている。
わたしはブタです…、と言った。

「それじゃ、伝わらないわよ！」

と結実に蹴られた。
わたしは、ブタです！汚らわしい社会に飼われている醜い子ブタです！と叫んだ。

「ほう、偉いわー、ほら、」褒美よ…」

と言って、結実はパイナップルを渡した。

「しっ、信じてたのに！」

「あつ、雪子！！雪子！人間、誰だって人には見られたくない一面があるわよ！」

雪子が泣きながら飛び出し、それを、千枝が追っている。

なにか、大切なものを失った気がする…。

翌日（金） 晴れ

朝

くしゃみをした…。

そういえば、昨日から熱ばい。今までの疲労からだろうか…。
雪子が学校を休んでいる…。

陽介が話し掛けてきた。

「なあ、昨日、天城の奴、泣きながら外走ってたけど、なにがあったか知らないか？」

知らないと答えた。

朝のホームルーム…。

千枝が柏木に向かい、手を挙げた。

「先生…、席替えしたいんですけど…。明日まで、いや、今日中に…。」

何故か、千枝は席替えしたがっている。

そういえば、ずっと席変わらないよな…、このクラス。

昼休み

陽介と話していると…。

「そついや、明日、お前、演劇部の出し物やんだろ！見に行つてやんよ」

陽介は楽しみにしているようだ。

「なあ、里中？お前も見に行かないか？」

陽介が千枝に話を振った。

だが、千枝の目は曇っている。

「あたしに話し掛けないで…」

「えっ…！どっ、どうした…」

「ごめん…、一人にして…」

さすがに、陽介もリアクションに困っている…。

一体、千枝はどうしたのだろうか…。

放課後

演劇部

「凄い、完璧よ！」

結実が納得の行くブタの演技が出来るようになった。

結実は笑っている。

「今まで殴ったりして…、ごめんね…。あたし、つい演技になると熱が入っちゃって…。周り見えなくなっちゃうの…」

部員達全員が頷いた。

「これで、しょっちゅう…、人と問題起こしちゃったりしてさ…。
悪いとは思ってたけど、治らなくて…」

彼女はあまりの演技への熱ゆえに、どうやら、他人と距離が生じていたようだ…。

だが、そんなに熱を持って、なにかに打ち込めるなんて凄いことだと、結実と言った。

部員達も頷いた。

「そうだよ、小沢君のおかげで、みんな気合いを入れて練習出来たからね」

「うん！緊張感があったけど、凄く充実したよ」

「明日、頑張ろうな！」

部員みんなが、結実を慰めた。

「みんな…！」

結実は歓喜のあまり、泣いている。

「おいおい、泣くのは早いって！」

部員達全員で笑いあった。

明日の舞台は、みんなで力を合わせて頑張ろうと約束をした…。

当日（土） 曇り

朝

「風邪を引いたので、学校を休むことにした…。」

学校レクリエーション終了後…。

舞台を成功に収めた部員達が口を揃えて言う…。

「ブタ役…、全然、いらなかったね…。」

結実は暗い顔をしている…。

陽介、完二、りせ、直斗は舞台を見に来ていた。

「なんだよー、あいつ居ねえじゃんー」

陽介は残念そうだ。

「そっいや、里中先輩、天城先輩、どうかしたんスか…。」

川原

千枝と雪子が川を見つめている…。

「男の子って、わからないね…」

雪子が体育座りで呟いた…。

「うん…」

千枝は川に石を投げた…。

千枝と雪子の絆が深まった。

キラッ だらけの野球対決 前編

2011年某月某日（日） 晴れ

昼間

ジュネスフードコートに、自分以外の自称捜査隊のメンバーが集まった。

なぜか、陽介は野球のユニフォームを着ている。

「なんで、あんた、今日野球のユニフォームよ…。て、あれ？リリーダーは？」

千枝が、自分が居ないことにツッコんだ…。

すると…、陽介が頭を抱えて話し始めた…。

「実はな…。相棒が、2009年のワールドベースボールカップに感動してな…。自分もイローみてえに活躍したいなって…」

そう言っつて、陽介は全員分の野球のユニフォームを出した。

みんなの顔が曇った…。

「まつ、まさか…」

千枝は嫌な顔をした…。

「だから、すまないが…、今日は、みんなには野球をしてもらおう…。というか、相棒が昨日、うちの野球部に喧嘩売って、今日、グラウンドで試合する約束になった…。頼む！協力してくれ！！！」

陽介は、みんなに頭を下げた。

「……じよ、冗談じゃないよっ！……」「……」

みんなが、ダチヨウ倶楽部のように口を揃えて叫んだ。

「野球部に素人のあたしら勝てるわけないじゃん！そんなの出来るわけないじゃん！……」

と千枝が言うと、直斗がなにかに気付いた……。

「まっ、待ってください……。ツッコミ担当の花村先輩が、もう観念してると言うことは……。試合しなきゃならない、なにかがあるんじゃないですか……」

陽介が、うん！と頷いた。

「試合に負けるか、試合放棄した場合、明日の放課後、全員でマクSFのランカ・リーの衣装を着て『星間飛行』を歌ってもらっ……」
「……じよ、冗談じゃないよっ！……」「……」

千枝、直斗、完二が、ダチヨウ倶楽部のように口を揃えて叫んだ。

「嫌よ！嫌よ！絶対に嫌よ！」

「絶対に嫌ですよ！」

「男の俺もやるんツスか！？」

「無論……」

千枝と直斗、完二が激しく拒否している。

だが…。

「えっ…、別に、それ罰ゲームじゃなくない…」

りせはアイドルで慣れているせいか、全然、嫌な顔しない…。

「マク スって、なあに？」

「マク スって、なあにクマ？」

雪子とクマは、ぼんやりして居る。

千枝、完二、直斗の強い拒否で、みんな野球部と試合することになった。

八十高グラウンドの野球場…。

ここでは、もう野球部がもう肩ならしを始めている。

自分と長瀬、一条もキャッチボールをして肩ならしを始めた。

しばらくすると、ユニフォームに着替えた自称捜査隊のみんなが来た。

爽やかな笑顔で、やあ！と手を振った。

「やあ！じゃないわよ！」

千枝が自分の襟首を握った…。

「なんで、あたしらが野球やんなきゃならないのよ！」

すると、一条が…。

「里中さん…、気持ちは解るけど…、我慢してくれ…」
「ていうか、一条君達らも参加するんの!? あんたらも、嫌なら嫌って言いなさいよ!」

と千枝に言われると…、長瀬が…。

「言えたら…、言ってるさ…」

その言葉で、千枝は気付いた…。

(この二人…、なにか弱味握られてる…!)

千枝は観念した。

すると、野球部の部長と、エースが挑発に現れた。

「よう、転校生! 一条、長瀬はともかく、あのメンツで大丈夫かよ」
「?」

「ふはは…、昨日、俺らに向かって『のだまぶ』と言ったのを後悔させてやるぜ!」

と言われた。

千枝、長瀬、一条が怒った。

「くっ、よくも、こんなスポーツ漫画でよくあるシーンを…」

千枝は拳を握り締めた…。

(野球部を『のだまぶ』と読み違えただけで、素人と試合する野球部ってどうだよ…、長瀬…)

(ああ、もっとひどいこと言われたのかと思ったよ…)

一条、長瀬はボソボソと内緒話をした…。すると、千枝はカツとなり…。

「お前たち！ギャフン！と言わせてやるかね！！」

「はっ！今からでも、歌詞に振り付けをマスターしといた方がいいんじゃないか？」

「なんだと、誰が！！」

挑発に乗った千枝の肩に手を置いて、野球部部長の前に出た。

こんな安い挑発に乗るな、と言った。

勇気が高まった。

「ん？なんだ？転校生…、さっさと、振り付けマスターしとけよ」

振り付けをマスターしろだと？とつくにマスターしてるぜ！！と叫んだ。

シーン…、となった。

しばらくすると、千枝が仕切り直した。

「あつ、あんたら、なんかに負けないかね！」

「えっ…」

「早く、また挑発しなさいよ…」

「えっ、ああ…。いつ、意気がるんじゃないぞ！」

野球部部长は、千枝の仕切り直しに協力してくれた。

千枝と野球部の間に微妙な絆を感じた…。

「へっ、里中、さつさと衣装合わせしたらどうだ？楽しみにしてるぜ」

野球部エースの挑発に、千枝が顔を赤くして怒った。

「誰がするか!？」

千枝が地団駄を踏んで、怒った。

自分は、今着ているユニフォームを脱いで、下に着ている明日の罰ゲーム用の衣装を着ているのを見せた。

寛容力が高まった。

千枝、野球部部长、エースが固まった。

(なんか、さつきから、あいつのユニフォーム、モコモコしてると思ったら…)

(しかし、似合ってるな…)

(ていうか、あいつ、もしかして罰ゲームやりたいんじゃないか…)
(学校に一人は居るよな…、罰ゲームやりたがってる芸人氣質の奴…)

一条、長瀬が自分の衣装を見て、コソコソ話をした…。

なんだかんだで、試合が開始された。

ちなみに、陽介、千枝の激しい要望でユニフォームに着替え直した…。

「どつやら、攻撃側らしい。」

『一番、花村』

一番手の陽介がバットを持って、バッターボックスに着いた。

「へへっ、実はやってみたかったりするのよね！」

陽介が素振りをした。

「いいか！花村、無理しなくていいから、相手の出方を見る！」

長瀬が選手席からアドバイスした。

だが、陽介は笑いながら…。

「へっ！大丈夫だって、こうーみえても…」

スパーン！！

陽介が話している間に、一球ストライクが入った…。
かなり速かった…。

陽介、長瀬は啞然としている。

「て、人が話してる間に放るな！」

陽介が投手の野球部エースに叫んだ。

しかし、エースはガン無視して、また一球を投げた。
やはり、速い…。

陽介は空振りした。

「やべえ……」

「花村！焦るな！」

長瀬がアドバイスするも、陽介は完全にビビっている。

陽介が、自分にアイコンタクトを送っている。

（相棒助けて……）

かなり必死な目だ……。

仕方がないので、キラッ ポーズをしてやった。

「わからんわ!!」

スパーン!

陽介がツッコんでいる間、また一球ストライクが入った。

「バッターアウト！」

陽介が泣きながら、ベンチに戻った。

「やべえ！ちびるかと思ったくらいに、速えよ!!あいつの球!!」

長瀬、一条も思いの外に速かった野球部エースの球に驚いている。

千枝は頭を抱えた。

「雪子、衣装合わせ行こうか……」

「へっ……?」

と、ベンチでクマとお茶を飲んでいる雪子に話し掛けた。

「諦めんな！里中！まだ、始まったばかりだろ！」

「花村…、諦めよう…。だって、もう最初っからクライマックスじやん…。」

「まだだ！！次は、一条だ！！」

と言って、次にバッターボックスに立ったのは一条だ。

「へっ、一条…、引くなら今だぜ…。」

エースが一条に挑発した。

だが、一条は無視してバットを構えた。

そして、エースをボールを握り、思いっきり腕を振り上げた。

「やぶえ！また、ストレートか！」

ベンチで陽介が叫ぶ。

だが、長瀬はなにかに気付いた。

「違う！あれはフェイクだ！！」

「なに！？」

「よくある手だ！さっきの花村のときに、相手は全部ストレートを投げた！それゆえに、バッター側は、相手の投げてくる球に恐怖意識が芽生え、下らない球でも怯えちまう！」

と長瀬が解りやすい解説をしてくれた。

「だが、本当に恐ろしいのは、今、そのくだらない球でストライクを取られたら、バッターは疑心暗鬼になり、ピッチャーの思うツボ

だ!!」

「そつ、そんな…」

長瀬が、ワンナウツ並の解説をしてくれたが、陽介、千枝以外の自称捜査隊はまったく聞いていない。

スポツ…。

長瀬の言つとおり、エースは大げさなモーションで軽い球を投げた。

しかし、一条は…。

「よし!」

なんと冷静にバントして、球を弾いた。

エースは驚き、相手のキャッチャーは対応が遅れ、一条に一塁許した。

「貴様!」

一塁に立つ、一条をエースは睨む。

「おめえらの手の内なんて、バレバレなんだよ…」

一条が一塁に立って、エースを挑発した。

ベンチで、陽介、千枝が抱き合って喜んでいる。

「ウホオ! かつくいいー!!」

「一条君、最高!」

一条のバント成功で、ベンチが湧いた。
なんとなく、勢いが乗ってきた。

「さあ、続くバッターは誰だ!!」

陽介がベンチに振り向くと、完二が手を挙げた。

「うわぁ……」

陽介、千枝の顔が曇った。

当然、野球より裁縫好きの完二は一気に三振……。
これにより、2アウト……。

「まつ、まだまだ！まだ終わらねえ！！次は、栄光の四番のエースは誰だ!？」

陽介がベンチに振り向いた。

自分が手を挙げた。

「終わった……」

陽介が落胆した。

自分はバッターボックスに立った。
すると、相手のエースは笑った。

「おい、転校生！野球経験は!？」

無論、ゼロと答えた。

思いつきりに笑われた。

「俺らを『のだまぶ』とバカにしたのを後悔しろ!!」

そして、エースは豪速球を投げた。

かなり速い!

だが、なんとなく打てた。

カキーン!

ボールはまっすぐ場外に出て行った…。

相手チーム全員が、鼻水を流して唾然となった。

ベンチに居る仲間達も、口を開けて唾然となった。

審判が口を開いた。

「ほっ、ホームラン…」

自軍に二点追加された。

このあと、五番のクマが出たが、当然、打てず攻守交替になった。

「お前、なに者だ…」

と陽介に聞かれたので、キラッ ポーズをしてやった。

「ああ…、そうか…、ただの変態か…」

陽介は悟りを開いた。

キラッ だらけの野球対決 後編

一回裏

- ・ 自称捜査隊、2点
- ・ 八十高野球部、0点

今度は、こつちが守備に入った。
キャッチャーの陽介が厳しい顔をしている…。

「一塁には、一条…。二塁には、里中…。三塁には長瀬で、内野は一応は安心だが…」

陽介は外野を見つめた。

完二が眠そうにあくびをしている。

クマがお茶を飲んでいる。

雪子もお茶を飲んでいる。

直斗が、どうしよう…。どうしよう…。と不安そうにキョロキョロしている。

ベンチに居る、控えのりせに至っては、水着で日光浴している。

「やぶえ…。ぜってえ、外野の奴ら球取れねえよ…」

陽介は防具の越しに涙を流した。

そして、なにより、陽介が不安だったのは…。

「なんで、お前がピッチャーなんだよ!!」

マウンドに立つ自分に、陽介は泣きながらツッコんだ。
落ち着け、と論じた。

「はあ…、でも、さっきのホームランといい…、もしかしたら…、
あいつなら…」

陽介は気を取り直して、ミッドを構えた。

相手チームのバッターが、バッターボックスに立った。

まずは、1球目…。

投げた。

カキーン！！

場外ホームランを打たれた。

陽介が遠い目をしている

相手チームは、イエー！と叫んでいる。

後に陽介はこう語る。

『あの球は、素人の目から見てもダメなのが解りました。だって、
スローモーションより遅かった』

相手チームの一番手がホームに帰ってきた。

二番手も、軽く自分の球を場外に打ち上げた。

三番手も、やっぱり場外に打ち上げた。

一気に、点が追いつ返された。

「うわあああああ！！！！ガンダムだ！俺が、ガンダムだ！！あは
はははは！！！！」

陽介が泣きながら壊れた。

千枝と、長瀬が壊れた陽介を抑える。

一条が、審判にタイムを宣言した。

「花村！あんたは、花村よ！ガンダムじゃないわよ！あんたがツッコミやめたら、無法地帯になるわよ！！」

千枝が泣きながら、陽介をビンタした。

「はっ！」

陽介は元に戻った。

「うわあ、陽介がボケたクマー」

「本当ねー、めずらしいわ…、花村君がボケるなんて…」

「でも、必死すぎて笑えないクマー」

外野で座布団に座りながら、雪子、クマがお茶を飲んでいる。完二と直斗は一緒に、おっとつとの潜水艦探しを始めた。

「あいつら、なにし来たんだよ…。なんで、俺だけ必死だよ…、チクショウ…、キラッ やりたくねえんだろうが、チクショウ…。今回、里中、一条、長瀬しか味方いねえよ…」

陽介は外野を見ながら、泣き始めた。
すると、長瀬が自分に近づいてきた。

「すまんが、お前は俺と代われ…。点もだが、これ以上は花村が持たない…」

と、長瀬がピッチャー交代を提案したが断った。

「ちょっと！維持張らないですよ！今回ばかりは、花村が可哀想よ！」

千枝がそう言う。

そうじゃない、違う、間違っているぞ！声のトーンを低くして笑って答えた。

完璧な戦術プランがあると言い、陽介、千枝、一条、長瀬を元の守備に戻した。

そして、タイムの終了を告げた。

バッターボックスには、野球部部长がバッターを握って立った。

「ハハハ！なんなら、コールドありで、罰ゲームはお前と花村、里中、一条、長瀬だけのルールにしてやるぜ！」

と笑いながら、野球部部长は言った。

「えっ、マジッスか！？」

「ほっ、本当ですか！？」

野球部部长の挑発を、外野の完一と直斗が嬉しそうに受け取った。

「バカ！てめえら、普通に喜ぶな！」

陽介が必死にツッコミんだ。

野球部部长の挑発に望むところだと答えた。

「望むなあ！」

必死な陽介の代わりに、自分に千枝がツッコんだ。
本当に仲が良い二人だ。

「俺が、ガンダムだ…、俺が、ガンダムだ…」

また陽介が壊れ始めた。

しかし、その必要はないと野球部部長の提案を断った。

「なんだと？」

自分は笑いながら、教えてやる…、戦場を支配のは戦力ではなく
戦術…、戦術と戦略の違いを教えてやると、野球部部長に言った。

「？」

野球部部長は、なに言ってるの？みたいなリアクションをした。
そして、自分はボールを握り振りかぶった。

「へへっ！」

野球部部長は笑った。

「ダメだ！やっぱり、ヘツピリ腰だ！！！」

陽介が不安げな顔をした。
だが…。

「イザナギ！と、自分は叫んだ！」

ガシャーン！

自分が持っていた球を、頭上に出現させた我がペルソナ、イザナギに渡した。

イザナギはボールを握り締め、物凄い勢いで腕と足を振り上げ、球を投げた。

ズバゴーーーーーン！！！！

イザナギが投げた球は、バッターを擦り抜けるどころか、陽介の頬をかすめ、後ろの壁を破壊した。

ポロっ…、と壁を破壊した球がコロコロと陽介の足元に転がった。みんな、啞然としている。

泡を吹いている野球部部长を横に、陽介がメットを取り立ち上がった。

「どっから、ツッコめばいいんだ！！バカヤロウ！！！！」

かなり悲痛な叫びだった。

当然、相手チームは審判に猛抗議をした。

「今の反則だ！！」

「ていうか、今のなんだ！！」

「明らかに、違う人投げてたぞ！！」

陽介、千枝、一条、長瀬は、なにも言えなくなっている。

「おい！転校生！今のはノーカンだ！！明らかに、ルール違反だ！」
と野球部部長が言ってきたが、あれはもう一人の自分、困難に立ち向かうための人格の鎧、ペルソナ『イザナギ』だ、と答えた。

「んなこと聞いてんじゃねえ！！」

野球のルールブックには、もう一人の自分が球を投げてはいけな
いとどのルールは書かれていないと答えた。

「やつ、でもよ！あれは、ルール違反の領域だろ」

納得の行かない野球部部長の前に、水着で日光浴中のりせが現れた。

「なに、この人？違う人が球投げたくらいで、ぎゃーぎゃー騒いじ
やつて…、みつともない…」

ルール、ルールってそんなに大切かと？野球部部長に言った。
野球部部長は困っている。

「これから、先の人生の困難もルール違反だから、ルール違反だからで逃げて行くのね…、この人たち…。確かに、掟を盾にした虚しい現実の社会じゃ許されるかもしれないけど、ルール無用の無法地帯なテレビの中じゃ通用しないよ…」

ああ…、そうだな、とりせに言った。

「だよなー、先輩…」

野球部部長が言葉を失っている…。

「へっ…、坊や達は、安全で楽しい毎日を過ごしな…。言っとくけど、そんなんじゃないわ…。」

と、りせが黒い表情をして自分に抱きつきながら、野球部部長を罵る。

野球部部長が泣きそうだ…。

「ハイ！ハイ！そこから振っというて泣くのかよ、ボーイはハートがガラスだなあ！haha！」

と完二が黒い顔で笑いながら、野球部部長を罵った。

「泣いて済むなら、警察は要りませんよ…。」

直斗も加わった。

なんか、野球部部長が可哀想になってきた…。

「あなた達、やめなさいよ…！」

「そうクマ…！」

雪子とクマが、野球部部長の前に立った。

「あつ、天城さん…、よくわからない着ぐるみ君…。」

野球部部長が、雪子とクマを感謝の眼差しで見つめている。

「これは、社会とかテレビの中じゃなく、立派なスポーツなんだから、ちゃんとルール守らなきゃダメだよ！」

「そうクマよ！ルール守らないで試合なんかしたら、野球を一生懸命にやっている方々みんなに悪いクマ！」

雪子とクマがそう言うのと、りせ、完二、直斗は反省した。

「う、ごめんなさい…、野球部部长さん…」

「すんません…」

「すみません…、出すぎた真似をして…」

りせ、完二、直斗が野球部部长に頭を下げて謝った。

「あつ、いいよ！気にしてないから！こちらも、挑発ばかりして」
「めんね！」

野球部部长が、かなり良い人に見えてきた…。

「天城さん、クマ君、ありがとう！」

泣きながら、野球部部长は雪子、クマに感謝した。

「気にしなくていいわ…」

「そうクマ…」

雪子、クマが満面の笑みを浮かべている。
すると…。

「でも…、ルールブックに、ペルソナ使ってダメとは書かれてないから、なんのルール違反じゃないわ…」

「そうクマ…。ルール違反じゃないクマ…」

二人とも、黒い笑顔で野球部部长にペルソナの使用を認めさせようとしている…。

野球部部长の顔が固まった…。

「ねえ、だから、ルールを守って、スポーツマンシップに則って頑張らなさいよ…」

「そうクマ…、スポーツマンシップ…、クマ…」

雪子、クマが野球部部长を追い詰めた。

「うっ、うん…」

野球部部长は、ペルソナの使用を認めたりせ、完二、直斗が唾然としている…。

「すみません！本当に、すみません！」

「本当にごめんなさい！！ごめんなさい！！！」

あつちで、陽介、千枝が相手チームに凄い必死に頭を下げている…。
こうして、ペルソナの使用が認められた…。

当然、そのあと、相手はイザナギの球など打てるはずなく、攻守交替。

二回表

・自称捜査隊、2点

- ・八十高野球部、3点

いくらペルソナの使用が認められたとはいえ、相手の守備は強く、素人多数のこっちでは点を獲られなく、あっという間に、3アウト。

二回裏

イザナギの活躍で、この回は完封。

三回表

陽介、一条、千枝の必死の攻撃で、なんとか同点。

- ・自称捜査隊、3点
- ・八十高野球部、3点

三回裏

略。

四回表裏

どちらも点数に変化なし。

五、六、七、八回、略。

そして、九回表。

カキーン！

陽介渾身のヒットで、三塁に居た長瀬がホームイン。

とうとう点を抜き返したが、完二、自分が相手のダブルプレーを食らい、最終回に。

最終回の九回裏

- ・ 自称捜査隊、4点
- ・ 八十高野球部、3点

ベンチから野球部部长が、物凄く祈っている…。

「ここで、点を取れば、延長か逆転勝利だ！！」

と野球部部长が叫んでいる。

マウンドに立つ自分は息を切らし始めた…。

どうやら、いくらなんでも、イザナギが疲労してきたらしい…。

2アウトは獲れたが、疲労から威力が弱まってきたのと、自分は球がストリートしか投げれないため、相手に読まれ打たれまくり、内野の一条、千枝、長瀬の必死のフォローで点は獲られていないものの満塁だ…。

バッターボックスには、本命の野球部エースがスタンバイしている。

マズイ…、ここで打たれでもしたら、一気に形勢逆転…。

いくらペルソナがあるとはいえ、外野のみんなには期待は出来ないし、内野のみんなも疲労してきた…。

マズイ…、なんとしてでも…、ここは守らねば！

バッ！

残った力を絞り、疲労のイザナギが投げた。

しかし…。

キン！

エースのバットにかすった。

球はファール。

「やつ、やべえ！さすがのイザナギも疲労がピークだ…、球の威力が俺でも打てそうな感じになってきた…」

キャッチャーの陽介が焦る。

もう一球、イザナギは投げた。

キン！

また、ファールだ。

これで、あと1ストライクで勝ちだ…。

しかし、エースは余裕の表情を浮かべている…。

もしかすると、わざと…。

以下、エースの心の中…。

(へっ、散々、コケにされてきたが…、こんな球、ホームランどころか、地球一周ぐらいさせられるぜ…。だが、今までの屈辱を一括で返してやるため、わざとこんな状況にしてやった…)

野球部エースが、かなりバットに力を込めている…。

(へっ、転校生…。奇跡の逆転満塁ホームランを食らって、泣きながら、踊りやがれ!!)

イザナギは、もう限界だ…。
どうする…。

「嘘…、ここまで来て…、逆転負けするの…」

千枝が自分を悲痛に見つめる。

一条、長瀬も複雑な表情だ。

「チクシヨウ…、確かに、最悪だが…、それでも相棒なら…、きっと…」

陽介は祈った。

外野の完二、クマもさすがに空気を読んで、力みだっている。

雪子、直斗、りせは門限なので仕方なく帰った。

どうする…、この状況で…。

追い詰められた自分に、なにかが走った。

!?

そうだ…！

審判にタイムを言い、ピッチャー交替を告げた。

「なにっ!？」

陽介が驚く。

すると、相手チームは爆笑した。

「ははは!この場に来て、ピッチャーびびっちまったか!！」

バッターボックスのエースが、自分に向かって叫んだ。

「貴様!逃げるのか!？」

「相棒!代わるにしても選手はいねえし、俺らももう疲労困憊だ!」

陽介が叫んだ。

だが…、なにを勘違いしていると言った。

「いや、だって、お前選手交替って…」

すると、陽介がなにかに気付いた…。

「まさか…」

ペルソナを、イザナギからジャアクフロストにチェンジした。

試合再開

ジャアクフロストにより、投げた球を火で燃やした。そうだ、燃えている球を打つのは不可能だと思った。だが、考えが浅かった。投げた球の勢い自体がシヨボかったので、普通に打たれた…。

フェンスに球はぶつかり、外野に転がったがキャッチ出来ず、相手は全員ホームイン。

無論、燃えている球など、外野が拾えるわけなく…。

「ゲームセット!!」

奇跡の逆転負けした…。

野球部が、物凄い勢いで泣き叫んで喜んでいる…。

野球部部长とエースが、泣き叫んで抱き合っている…。

「キャプテン！」

「うわあああ！弱すぎて、弱小野球部と言われ、やさぐれて、まともな野球の練習しなくなり、みんなサボりまくってたけど、勝ったよ！悪魔のような奴らに勝ったよ、うわあああ！！！」

この野球部は弱小で、あまり練習していなかったらしい…。
どおりで、モロキンから入部を勧められなかったわけだ…。

陽介、千枝、一条、長瀬がヘタヘタと地面に伏せた…。

「ペルソナまで使ったのに、敗北って…。」

陽介は茫然としている。

そんな陽介に向けて、キラツ ポーズをしてやった。

「うるせえよ！！！」

陽介は、とうとう泣いてしまった。

翌日 朝

ランカ・リーの衣装を着て、陽介、千枝、一条、長瀬が登校してきた…。

なかなか、似合っている。

どうやら、放課後の罰ゲームを受ける覚悟は出来たらしい…。

「ちくしょう…」

泣いている陽介の元に、野球部部长が現れた。

「わかった、やるから…」

観念した陽介がそう言つと、野球部部长が…。

「いや、いいよ…。やらなくて…」

「へっ?」

なんと、罰ゲームをなしにしてくれた。

「君たちには、むしろ、感謝しているよ…。今まで、練習をまともにやらなかった部員達が、昨日の勝利で自信をつけてね。なんだか前より、部員達のやる気と絆が強くなつてね…。今まで、練習しなかったのが嘘みたいだよ…。だから、みんなを目覚めさせてくれたお礼に、この罰ゲームはなしにさせてよ…」

「うっ、うっ…、野球部部长…」

ランカの衣装で、陽介、千枝、一条、長瀬は泣きながら、野球部部长に感謝した。

野球部部长の表情が、昨日とは別人のように輝いている。

こうして、罰ゲームなく、平和に終わった…。

午前

陽介、千枝、自分はランカの衣装のまま授業を受けた…。
着替えを持ってきていなかったのだ…。
周りから、ひそひそ声がした…。

陽介編3

2011年某月某日（月）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れてしていると、陽介がギターを携えて、自分の目の前に現れた。

「よっ、相棒」

陽介はギターを抱えて、音を鳴らし始めた。
そして…。

「なあ、相棒？バンドやらね？」

笑顔で、嫌だと答えた。

完

2011年某月某日（火）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れてみると、陽介がダウンタウンのDVDを携えて、自分の目の前に現れた。

「よっ、相棒」

陽介は蝶ネクタイをしている。
そして…。

「なあ、相棒？俺と、お笑い目指さないか？」

笑顔で、嫌だと答えた。

完

2011年某月某日（水）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れてみると、陽介が黒い服を着て、自分の目の前に現れた。

「よっ、相棒」

陽介は手裏剣を抱えている。
そして…。

「なあ、相棒？忍者にならないか？」

笑顔で、嫌だと答えた。

完

2011年某月某日（木）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れていると、陽介がガム
パイロツトスーツを着て、自分の目の前に現れた。
そして…。

「なあ、相棒？ 闘わないか？」

笑顔で、嫌だと答えた。

完

2011年某月某日（金）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れていると、陽介がつなぎを着
て、自分の目の前に現れた。
すると、陽介はつなぎのファスナーを下ろした。

「やらな…」

笑顔で、バカヤロウと答えた。

完

2011年某月某日（土）

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れてみると、小さな箱を持った陽介が自分の目の前に現れた。

「よっ…、相棒…」

陽介は持っていた小さな箱を開けた。
小さな箱には、大きなダイヤが付いているリングがある。

「バイトして貯めて、買ったんだよ…」

陽介は顔を赤くしている。

そして…。

「なあ、相棒…、そろそろ、結婚しないか…」

笑顔で、うん…、と答えた。

完

「なんだよ、このオチは……」

陽介が頭を抱えた…。

自分も、今のはどうかと思うと話した…。

「無理にボケなくていいと思うよ……」

千枝が優しく花村をフォローした…。

『ペるそなっ!?!』 前編

2011年某月某日(土)

晴れ

放課後、教室

うう…、と負のオーラを全開して、自分は机にうなだれた…。
1人でボソボソ…、うわごとを呟く…。

「今朝から、あの調子だよね…」

千枝がそういうと、陽介、雪子は頷いた。
すると、陽介が自分に近づいた。

「よっ!相棒!どうした?元気ねえな?メシでも…」

すまないが、一人にしてくれ…、と言った。
陽介は引き下がり、千枝、雪子の元に戻った。

「駄目だ…、なんか凄い落ち込んでやがる…」
「どうしたのかしら…?」

雪子が心配そうに、自分を見ている。

「こっぴなったら…、あたしが…」

今後は、千枝が自分に近づいた。

「おーっす！どったの？そうだ、これから、肉たべに…」

ごめん、今、一人になりたいんだ…、と言った。

千枝が、陽介、雪子の元に戻った。

「だっ…、駄目だ…、なんか、凄い負の念が…」

千枝がそう言った。

雪子は手を挙げ、じゃあ、次は私が行くと言い、自分に近づいた。

「あら？どうしたの？元気ないけ…」

なにか言おうとした雪子に、アメちゃんを渡した。

雪子は、陽介、千枝の元に戻った…。

「アメちゃん、もらった…。しかも、なんの面白みもない、チュッパチャップスのコーラ味…」

と言って、雪子はアメちゃんを口に入れた…。

「こっぴなったら…」

陽介は、完二、りせ、直斗、準レギュラーの長瀬、一条を呼んだ。で、自分が激しく落ち込んでいると話した。すると、完二が…。

「へっ！任してください！」

と、完二が自分に近づいた。

「うーっす！先輩、どうかしま…」

完二に、チロルチョコの中にコーヒー味のキャラメルが入っているのを渡した。

「ありがとうございます…」

完二は礼を言って引き下がった。

「あの…」

完二はみんなに申し訳なさそうな顔をした。

いいから…、それ溶けないうちに食べる…、と陽介が言った。次に、りせが手を挙げた。

「じゃあ、次、あたしー」

そして、りせは自分に近づいた。

「先輩ー。きゃっ、どうしたの…、なんだか、元気なっ…」

りせに図書券千円分を渡した。

「あっ、ありがとうございます…」

りせは引き下がった。

陽介は、それで参考書でも買え…、とりせに言った。渋々、今後は、直斗が自分に近づいた。

「先輩…、なにやら、元気なっ…」

直斗にキャベツを渡した。

「ありがとうございます…」

直斗は引き下がった。

陽介は、お前んち今日はキャベツロールだな…、と言った。
複雑な顔で、一条、長瀬が自分に近づいた。

「おい、どうした？今日は…」

二人に、PSPソフト『ガダムVSガンム』を渡した。

「えっ、いいのかよ…！」

「マジかよ！これ、欲しかったんだよ…！」

一条、長瀬は大喜びで引き下がった。

陽介は、あとで俺に貸せ！と叫んだ。

直斗は、なんで僕だけ…、と呟いた。

りせは図書券の使い道を考えている…。

完二は、口をモゴモゴして黙っている。

雪子はアメちゃんを舐め終えた。

千枝は、あとから話し掛ければ良かった…、と後悔している。

「ダメだ！全然、元気ねえよ！しかも、ネタなのかマジなのか解らないもん渡しやがる…！」

と陽介が叫んだ。

すると、とうとう、痺れを切らした女性陣が…。

「ああっ！もうイライラするー!!」

「さすがに、ちょっと、イラッとしてきたわ…」

「なんか、今日の先輩嫌い！」

「なんで、僕だけキャベツ…」

と、千枝、雪子、りせ、直斗が自分に責め寄る。

「うわあ！バカ！よせよ！そんな乱暴に…」

陽介が女性陣を止めたが、千枝が自分の肩をわしづかんで、無理矢理顔を上げさせた。

「もういいかげんに、元気だし…」

大粒の涙を流している自分の顔を見て、女性陣の勢いが止まった。

「……ごめんなさい……」

女性陣は引き下がった。

「あんな大泣きされたら…、かなわんわ…」

「なんですたい、この罪悪感…」

「ホンマに、もうやってられへんわ…」

「なんで、僕だけキャベツ…」

千枝、雪子、りせ、直斗は方言メチャクチャに喋っている。
すると、陽介が…。

「お前らが、あんな乱暴に責め寄るからだろうが！デリケートなんだよ！男つてのは！」

「そうツスよ…、花村先輩と同意見ツス…。さすがに、さっきのは俺でも泣くと思います…」

と完二が言う。

一条、長瀬はゲームをして楽しんでいる。

陽介、完二に言われ、千枝、雪子、りせ、直斗は反省している…。

「じゃあ、どうすれば…、彼、元気出してくれるのよ」

千枝が陽介に聞いた。

すると、陽介は…。

「とりあえず…、男つてのはデリケートだが単純だ…。相棒は普段クール気取りだが、所詮は男…。結局は、女の子に弱いもんだ…。だから、なんか、男の子が喜ぶようなことをしろ…。色仕掛けだの、ナデナデだの、モフモフだの…。もちろん、規制に引っ掛からないのをやれ…。せいぜい、ジャンプのT.O.L.O.V.Eるくらいのを…」

と陽介の言葉を聞くと、千枝が…。

「うわぁ…、引くわ…」

だが…。

「わかった！やってみる！」

「うん！先輩を元気づけるためだもの！」

なんと、雪子、りせが陽介の意見に同意した。

千枝は驚いた。

「えっ！ちよつと、あんたら!？」

直斗はキャベツを見つめている…。

「あんたら、ナデナデとか、モフモフ…、T O L O V Eるとか、なんだか知ってんの!？」

千枝は激しく拒否反応を示している。

「でも、このまま、彼をほっとけないわ!」

「そつよ!先輩、可哀想よ!！」

雪子、りせの勢いに千枝は圧倒された…。

「わっ、わかった…。ただし、T O L O V Eるレベルまではやんな
いかなね…」

こうして、女性陣は落ち込んでいる自分のために、結束した。
直斗は、キャベツの葉をちぎり食べている…。

仕切り直しして、千枝が自分の目の前に現れた。

「さあ、一番手は、一番乗り気でない里中…。どつ来る…」

陽介が実況を始めた。

完二、一条、長瀬が見守っている。

すると、千枝は…。

「コラッ！いつまで寝てるの！？ガッコー、遅刻しちゃうぞっ！」

と明るい口調で自分に話し掛けた。

完二、一条、長瀬が驚いた。

「なっ、里中先輩なにを！？」

「あっ、あれは、お隣さんの幼なじみキャラだ！？」

「おっ、お隣さんの幼なじみキャラ！？知っているのか！？花村！」

と、一条に聞かれ、陽介は解説を始めた。

…『お隣さんの幼なじみキャラ』とは…！？

「お隣さんの家に住む幼稚園、小学、中学などが一緒の幼なじみの女の子の設定である！！」

この設定は、一般からマイナー作品まで多く使われ、大人気の探偵漫画、学園物で使われるなど、応用範囲は様々で、あざとさや、いやらしさが薄く、普通に一般の方でも受け入れられることから、もっともポピュラーなヒロイン設定とも言われる！！」

(四目内書房刊『花村陽介、勝利の方程式』より)

さらに、陽介は解説をする。

「へへっ…、やるな…。里中…。自らの男勝りかつ、ボーイッシュな魅力を最大に生かした正統派で相棒に迫るとは…。へへっ…、さ

「さすがの俺も感服や…」

「なんか、この人、始まりやがった…」

完二が陽介に引いている。

さらに、千枝は…。

「もういつまで寝てんのー！！もう…、そんなにだらしないんじゃないじゃあ、あの約束…、守ってやらないんだからね…」

と言った。

「あの約束!?!」

一条が叫んだ。

陽介は笑った。

「まさか、幼なじみキャラの伝家の宝刀とも言える…、約束を用いるとは…。里中…、ヤツは化け物か…」

陽介は腕を組んだ…。

一条は、ムムツ…、となった。

完二、長瀬が置いてきぼりを食らっている。

「あの約束…。そう、幼稚園の頃…、まだあどけない頃…。里中は、奴と約束したんや…」

「なんの約束だ？」

「『しょーらい、おとなになったら、およめたんになったげるっ！』とな…」

陽介のその言葉に一条が鼻血を出した。

「ぐあつ、ヤバイ！それはヤバイ！！」

「しかも、そんな昔の約束を、まだ覚えておる…、里中…。つまり、里中は奴を想って、今まで他の男になびかなかったとの証明にもなっている…。かなり一途な乙女ってことや！」

「ぐああ、やべえ！この設定！！もう俺の心臓やべえ！！！」

陽介、一条のテーションが上がってきた。

完二、長瀬はPSPで『ソダムVSガンダ』を始めた。
しかし、自分はまったく反応しなかった。

「くっ…、よく耐えられるな…、相棒…」

「俺なら、もう三日は悶々してられるぜ…」

陽介、一条の眉がしかめた。
すると…。

「あらら…、千枝ちゃんったら…、押し掛け女房ね…」

！？

雪子が着崩れ、肩が露出した着物を着て現れた。

「なに！？」

陽介、一条が目を見開いて驚いた。

「誰が、押し掛け女房ですって！」

千枝が雪子に怒っている…。

「あらあら…、ダメよ…。そんな乱暴に起こしちゃあ…」

雪子が近づき、色っぽく自分の耳に唇を近づけた…。

「そろそろ、起きなさい…、ねえ…」

と雪子は自分の耳に囁いた。

「ちよっ、ちよっ、おっ、義姉さん!!」

千枝がそう叫んだ。

すると、陽介が叫んだ。

「まつ、まさか!?!こんな手を使うとは!」

「なっ、なんだ!?!」

一条は鼻血を拭いている。

陽介は唇を噛んだ。

「天城は…、ちっ、血の繋がらない義理の姉さんに出た…」

「!?!」

なんか長くなったので、次回に続く。

『ペるそなっ!?!』 後編(前書き)

今回は、今まで書いていた中で、かなり力をいれ、かなり楽しかったが、それゆえに一番、キャラクターを崩壊させてしまいました…。本当に、寛容力、オカン級な方だけお進み下さい…。

『ぺるそなっ!?!』 後編

ドキドキ恋愛ラブコメディ!

『ぺるそなっ! 4 〽見つけ出すよ…、大事ななくした物を…』

主人公：なぜか、激しく落ち込み元気がない。特技、料理、手品、釣り、変なものを食べてみることに、落ち着くこと、そっとしておくこと。

千枝：元気いっぱいな主人公の隣に住む幼なじみの女の子。幼稚園の頃にした主人公のお嫁さんになってあげるといふ約束を、未だに守っている純粋一途な少女（注意：原作ゲームの設定ではありません）

雪子：主人公の父親の再婚相手の連れ子の姉妹で、主人公と一緒に暮らす義理の姉。容姿端麗で和服が似合い、成績優秀で、年下である主人公や千枝を子ども扱いしてからかっている。だが、時折、少女らしい隙のある部分を覗かせる。あと、どこか抜けていて、下着などが露出することがある（注意：あくまで原作ゲームの設定ではありません）

りせ：雪子と同じく、父親の再婚相手の連れ子で、主人公の義理の妹。年下で、明るく人なっつくく、主人公にデレデレしている。ドジで、姉の雪子や、主人公によく助けられている。理想の男性は、主人公（注意：原作ゲームの設定なわけがありません…）

直斗：主人公と同級生の控えめな女の子。いつも図書室で過ごし

ており、気弱でモジモジしている。遠くから、主人公を見守り、いつも主人公と一緒に千枝、雪子、りせに嫉妬している（注意：原作ゲームの設定ではない…）

花村陽介…主人公の悪友。何故か、いろんなギャルゲーパターンに詳しい。

一条…リアクション担当。さつきから、鼻血の量が一リットルは出ている。

巽完二、長瀬…ガ ダムのゲームをしている。

以下、本編再開…。

「間違いない…、天城は年上の義理のお姉さんをやっている…!？」

陽介が固唾を飲んだ。

一条が鼻血を拭いている。

「相棒の親父さんの再婚相手の連れ子…、それで、相棒と暮らしている…。つまり、血の繋がらない年上のお姉さん…」

「なんて、設定だ!! やぶえよ! 鼻血いくら出しても、足りなくなるよ!!」

「海外出張の多い父親と義理の母…。なので、炊事、洗濯、掃除と、学校に通いながらも、天城が主人公の母親代わりをしている…。だから、どこか、主人公に対して母性本能がくすぐられ、あんな色っぽい寝起き業が出来る…」

「血の繋がらない姉って設定だけで、1週間は白米でも暮らしてい

けそうな勢いなのに、あんなエッチな真似されたら、もう白米がいくらあっても足りねえよ!!」

一条が、かなり興奮している。

「うわっ…、長瀬先輩…、F91使うんすか…、渋いなあ…」

完二、長瀬は多少盛り上がっている。

そして、優しく自分に抱きついて目を覚まさせようとしている雪子に、千枝が…。

「もーっ！義姉さんったら、いいかげんにしてよ!!」

「あらあら…、千枝ちゃんったら、嫉妬してるかしら…」

「ちっ、違っ！違っわよ！こっ、こんな奴、別に、なんとも思っていないんだからねっ！」

千枝が顔を赤くして怒った。

陽介が驚いた。

「つつ、ツンデレ！里中！普通なら寒くもなりかねぬ、簡単なよう
で難しい荒技…、ツンデレをなんの無理もなく自然にこなすとは…、
やりおるわ…」

「幼なじみ設定を、さらに生かしツンデレ…。里中千枝…！進化す
る天才とは彼女のことか!？」

なんか、だんだんリアクション担当の一条もおかしくなってきた。
それでも、自分はまったく反応しなかった。

ちなみに、まだ雪子が自分に抱きついてる。

「くそ！ダメか!？ていうか、あいつ何げに美味しい目にあってるね

っ!？」

陽介が悔しがっていると…。
すると、今度はりせが現れた。

「お兄ちゃん!おっはようー!!」

!？」

陽介、一条が圧巻している。

「まさか!？血の繋がらない姉と来たからに…、りせは…!？」

いきなり、現れたりせは、雪子が自分に抱きついているのを見る
と…。

「あーっ!？またお姉ちゃんばかり、ズルいー!!また、お兄ち
ゃん独り占めしてるー!!」

と言って、りせも自分に抱きついた。

「ぐあっ!!」

一条が血を吐いた。

陽介が顔を強ばらせた。

「ちっ、血の繋がらない妹設定だと!？」

「なに!父親の再婚という設定を更に掘り上げた義理の姉妹…。二
段の構え!二重の衝撃、二重の極みということか!」

陽介、一条は汗を拭った。

「しつかりした天城姉に比べ、無邪気で天真爛漫なりせ妹…。まったく正反対の姉妹と暮らす主人公…」

「ぐっ、やべえ！やべえよ！血が足りねえよ！！」

一条が、輸血を受け始めた。

「うわー、お兄ちゃんのお布団、あつたかい！」

「コラコラ…、りせったら、ダメよ…。起こして上げなきゃあ…」

「えーい！お兄ちゃん、起きろー！！」

「ちよつと、あんたたち、やめなさいよ！！」

自分に抱きついていている雪子、りせに対して、千枝が顔を真っ赤にして叫んでいる。

「っ…」

千枝は悔しそつに震えている。

「悔しかろう！さぞかし、悔しかろう！！」

「血が繋がらない姉妹とはいえ、天城、りせは家族！ただの幼なじみで他人の里中さんには入り込む余地がない！！」

陽介、一条が叫んでいる。

かなりヒートアップしている。

すると…、さっきから、キャベツばかり見つめている直斗が立ち上がった。

「いいかげんにしてくださいー！！」

！？

直斗が叫んだ。

これには、千枝、雪子、りせが驚いた。

ヒートアップした空気が一気に冷却した。

陽介、一条は干上がった…。

「なっ、直斗…」

「まっ、まさか…、ここまで来て現実回歸か…」

一気に場が静まり返った。

すると…、完二も立ち上がった。

「はいはい…、直斗の言う通り…、ここで仕舞いにしましょうよ…、先輩方…。いくらなんでも、これは、バカらしいツスよ…」

「どうやら、この異様な空気が沈静化したかに思えた…。
だが…。

「かつ、彼が、嫌がつてるでしょう！みつ、見て分からないの!？」

!？

直斗がそう叫んだ。

しかも、かなり女らしい声で…。

「なっ、直斗？」

完二が目を開いて驚いている。
すると…、千枝が…。

「あなた…、確か、同じクラスで、いつも図書室で本を読んでいる

白鐘さん…？どうして、ここに！？」

なにやら、またギャルゲー展開が再開された…。
すると、陽介、一条がまたヒートアップした。

「なっ、なに！？直斗は、クラスメイトで、いつも影から主人公を見守っている内気な女の子だと！？」

「地味で目立たないが、実は、ずっと前から主人公に思いを馳せているという…、あの立ち回りか！！」

「なっ、直斗…」

二人は凄く喜んでいる。

完二はポカーンとしている。

「なに…、この人…。あなた関係ないでしょ？」

りせが立ち上がって、直斗に迫った。

「そっよ…。なによ、あたし達の邪魔しないで…」

雪子も立ち上がって、直斗に迫る。

「うっ…、うっ…」

二人に迫られ、直斗は口をモジモジさせている。

「急展開だ！！まさかの地味な直斗の思い切った行動により、天城、りせの姉妹の火に油が注がれた！！うおおおお！！天才しかいないのか、ここには！？」

「くそっ…、また鼻血が…」

「直斗…」

陽介が叫び、一条は鼻血を流す。
完二は地味に喜んでいる。

「彼はね！あたしとこうしている方が嬉しいのよ…。そうよ…。そうだわ！！彼はあたしと一緒にだと幸せなのよ！」

雪子がドスを効かせて、直斗に迫る。

「お兄ちゃんは渡さない！！お兄ちゃんはあたしの物なんだから！誰にも渡さない！！お姉ちゃんにも、あなたにも！！！」

りせもドスを効かせて叫んだ。

直斗は完全に勢いを失った…。

「あなた、なんなのよ！？いきなり、あたし達の間水に水を差して！！！」

「そうよ！あなた、お兄ちゃんのなんなのよ！？」

雪子、りせに迫られた直斗は…。

「わっ、私は彼のこと…、私は…、彼を…、あっ、愛してるの！！！」

！？

直斗が声を大きくして叫んだ。

すると、全員が驚いた。

「なんだとおおおおおお！？追い詰められたが故に、ここで愛の告白だと！！なんだ！この神展開はあああああああ！！！」

「ぐあつ、やべえ！血が！流血する血が出ねえ！！」
「ぐっ…、あつ…」

陽介、一条は、この展開にヒートアップ。
完二は気絶して倒れた。

「なんですって！」

「ちよつと！？あなた、自分がなにを言っているか、わかってんでしょうね！？」

「しっ、白鐘さん…」

雪子、りせが顔を曇らせる。

千枝は驚きで呆然としている。

「私、ずっと…、ずっと！好きだったの！彼のこと、ずっと、ずっと好きだったの！！」

直斗が顔を赤くし、泣きながら叫んだ。

「ふざけるんじゃないわよ！！」

雪子が直斗の頬をぶった。

バチン！

頬をぶたれた直斗は赤くなった頬を押さえ、雪子を睨んだ。

「なによ…、その目は…」

雪子は直斗を睨み返す。

「あたしの方が！あんななんかより、ずっと、ずっと、ずーっと、

彼のことを愛しているわ!!」

!?

なんと、ここで雪子も告白をした。

「うおおおお!!直斗の告白をきっかけに一気に黒いドラマが展開されてきた!井上脚本か、これはあああああ!!チクショウ!祭りじゃあ!祭りじゃあ!!」

陽介が、かなり興奮している。

一条が興奮しすぎて、ゼーハー!ゼーハー!と過呼吸になっている。

「お姉ちゃんのバカ!!」

今度は、りせが前に出た。

「お兄ちゃんは、あたしのだって…、お兄ちゃんは…、ずっとあたしと居るんだって…。そうよ!お兄ちゃんは、ずっと、あたしの物なんだから!!」

りせが叫んだ。

「りせ…、子どもは下がってなさい…」

雪子が冷たい目で、りせを睨む。

「うるさい!あたしは誰より、お兄ちゃんを愛しているんだから!」

「黙りなさい!この泥棒猫!!」

雪子は、りせの頬も叩いた。

「くっ、お姉ちゃんなんか、お兄ちゃんは渡さない！誰にも渡さない！！」

りせは赤くなった頬に触れ、雪子を睨む。

「くっ！」

すると、陽介は唇を噛んだ…。

そして、さつきから黙り込んでいる千枝を見つめた。

「幼なじみの里中が、さつきから、この昼ドラ展開を黙って見ていやがる！どうした！幼稚園からの約束を守り続けてきたんじゃないのか！？脇目も見ずに、ずっとあいつを想い続けてきたんじゃないのか！？お前のことを好きだと言って近づいてきた奴も居たけど、それでも、お前はあいつを想い続けて、ずっとあいつばかり見てきたんだろ！？なのに、この程度のことでするなんて…、お前のあいつに対する想いは…、その程度なのか！！答える、里中ああ！！」

陽介は松岡修造ばりに熱く叫んだ。

「待て！花村！」

すると、一条が叫ぶ。

なにかに気付いたようだ。

「どうした！一条！？」

「見てみる…」

一条は、千枝に指をさした。

千枝は泣いている!?

「なに!?!」

陽介が沈黙した。

千枝は、ただ黙々と止まることのない涙をひたすらに、ひた向きに抑えようと努めている…。

「見てみる…。あの姿…。一番、誰よりも彼を想い続けてきたはずの彼女が、ただ泣くしか出来ない…」

一条が急に解説を始めた。

「しっかり者の義理の姉、雪子…。天真爛漫で無垢なりせ…。勇氣

を振りしぼって、ちゃんと自分の想いを打ち明けた直斗……。彼女らの誰にしても、彼にふさわしい女性だ……」

「まつ、まさか……。里中の奴……」

「ああ、彼女は……。自分はもう彼を諦めるしかない……。悟ったんだよ……」

「なに!?!」

陽介は驚いた。

「バカな……。そんな……。幼なじみなんだぞ!里中は!?!なのに……。なぜ……。諦める必要が……。はっ!?!」

陽介はなにかに気付いた。

「そう、幼なじみだからだ……。幼なじみ故に、彼の幸せを考えた結果が、身を退くことなんだよ……」

一条は涙を流した。

陽介は黙り込んだ。

「そつ、そんな……。そんな昔から想っていた男の子を諦めるだなんて……。そんな……」

陽介は泣き崩れた。

一条は、倒れこんだ陽介の肩を叩いた。

「こつ……。これが、彼女の決断なんだ……。認めてやれ……」

すると、泣いている千枝に、りせが気付いた。

「なによ…？つてなに！？あなた、泣いてるの？はっ、まさか…、
あなたもお兄ちゃんに気があるわけ…」

陽介が立ち上がった。

「やっ、やめろよ！そつとしてやれ！里中をそつとしてやれ！」

そんな陽介を、一条は泣きながら抑えた。

「幼なじみつてだけで、彼に擦り寄ってくんじやないわよ…」

雪子は泣いている千枝に迫った。

「っ…」

千枝は、ただひたすら泣いている。

「てめえら！それでも、人間か！？里中は、お前たちなら、彼を幸
せに出ると思つて諦めたんだぞ！だから、泣くしか出来なくなつて
いるんだぞ…！」

陽介が一条の身体を投げ飛ばして、千枝の目の前に立った。

「里中ああ…！」

「！…？」

陽介が千枝の肩を掴んで叫んだ。

「里中！いいのかよ！こんな結末で！こんな、自分が不幸になる結
末で！！まだ、お前だけ、あいつに気持ち伝えてねえじゃんかよ！」

「まだ、あいつ、なにも答えちゃいねえじゃんかよ！あいつが本当に好きなのは、天城でもなく、りせでも、直斗でもない！お前もしんないだぞ…！」

「はっ、花村…」

千枝は目を赤くして、陽介を見つめた。

「お前、ずっとあいつだけ見てたじゃねえかよ…。ずっと、ずっとあいつだけ見てきたじゃねえか…。毎日、早起きして、あいつを起こしによ…」

陽介は思い余って泣き始めた。

「頼むよ…。里中…。自信持てよ…。あいつだって、あの約束…。破っちゃいけないかもしんないだろ…」

陽介は泣き崩れた。

「じゃねえと…。俺…。お前のこと…。諦めらんねえよ…」

！？

なんと、陽介まで、この展開に入り込み始めた。

一条は驚いている。

「はっ、花村！まさか、ここに来て！？この役だと！」

「一体、花村は…。どうしたんだ！？」

さつきから黙っていたが、いつの間にか見入ってしまったている長瀬が一条に聞いた。

「花村は…、いつも、彼の友人であると同時に…、実は、里中さんと同じく、幼稚園からの幼なじみ…」

「まさか…」

「ああ、3人はいつも一緒に仲良し3人組だった…。でも、時間が経つにつれ、3人は自分たちは異性なんだということに気付いてしま…う…」

一条は固唾を飲んだ。

「そして、ある日、里中さんは彼のことが好きなのを、花村に相談した…」

「昔からの親友であるゆえにか…」

「だが、花村は里中さんのことが好きだった…。里中さんのことを気がないフリして、ずっと、いつも一緒にただの友達のまま居た…。いや、居たかった…。だが、里中さんの相談を受けてしまい、自分の好きな人の好きな人が自分の大親友ってことを知ってしまったんだよ…」

「なんて…、なんて…、残酷な運命だ…」

長瀬も、とうとう泣き始めた。

「だから…、花村は自分の気持ちを押し殺し、昔からの親友を裏切りたくなかったのと、自分の愛する里中さんの純粋な愛のため…、ずっと、影から里中さんを支え続け、励まし続けてきた…」

「くっ、花村！辛かったろう！ずっと、辛かったろうに…！」

長瀬の涙が溢れ出して止まらなくなっている。

「だが、彼を諦めようとしている彼女の姿を見て、とうとう、花村は思わず自分の本音を漏らした…」

「ああ…、自分の気持ちを押し殺してまで、里中を支え続けたんだから…。あんな弱気な里中の姿に耐えられなくなっただらう…」

一条、長瀬はさつきから服がびしょびしょになるくらいに涙を流している。

「頼むよ…。諦めんなよ…、好きなんだろ…、ずっと、ずっと、前から…、好きなんだろ…」

陽介は地面に伏せて泣いている。
すると、千枝は…。

「あつ、あたし…、バカだね…」

…！！

千枝が、地面に伏せて泣いている陽介の前に膝を着いた。

「こんな…、こんな近くで…、あたしのことを想ってくれる花村の気持ち考えないで…、ずっと…、自分のことしか考えてなかったよ…」

「さつ、里中…」

陽介は顔を上げた。

千枝は、陽介の涙を拭った。

「本当はね…、あたし…、彼からウザがられてるって、とっくに気付いてた…。彼…、ずっとあたしのことなんか目になかった…。それでも、あたし…、彼を好きでいたかった…。約束したのもあるけど、ずっと…、ずっと…、無理して、自分に嘘をついて、ただ彼を好きでいる自分に酔っていたかった…」

千枝は上を見上げた。

「でも…、やっとわかった…！花村は…、こんなダメなあたしの相談を嫌な顔しないで真剣聞いてくれて、あたしが泣いたときは、ただそばで黙って居て慰めてくれた…。こんなダメなあたしをずっと見てくれて、支え続けてくれた花村が、あたしにとって本当に大切な人なんだって…。やっと、気づいた！」

「さっ、里中…」

凄いくらいに陽介は泣いて、千枝の顔を見ている。
千枝は涙を堪えている。

「でも、もう遅いよね…。今、こんなことになってから、自分の気持ちに気付くなんて…。都合良すぎるよね…。ははは…、尻軽女だよ…。彼との約束、守れなさそうだし…」

「そんなことねえよ！！」

陽介は涙を拭いて、立ち上がった。
千枝は驚いた。

「そんなことない…。お前が好きだ…！尻軽でも、自分に都合良くて…、約束の一つも守れなくて、自分のことしか考えていないお前でも…、俺はお前が好きだ…！好きだ！誰よりも愛してる…！」

陽介は大声で叫んだ。

千枝はとうとう堪えていた涙を流した。

「はっ、花村！」

陽介、千枝は抱き合った。

「ごめんね…、ずっと…、ずっと…、あなたの気持ちに気付かなくて…」

千枝は陽介の腕の中で、ただひたすらに泣いている。

「いいんだ！いいんだ！」

陽介も泣いている。

「うっ、あたし、独占欲強いんだからね…！浮気なんかしたら、許さないかねえ！！」

「するかよ…、ぜってえ、しねえ！約束…、約束する…」

「あたしも約束する…。世界で一番好きなのは、絶対に…、花村だけだって…」

「里中…」

「この約束だけは、絶対に守るから…」

パチパチ！パチパチ！

！？

「あっ、相棒！」

陽介、千枝は自分の方を見て驚いた。

思わず、自分は滝のような涙を流して拍手をした。

良かった…、良かった…、二人とも良かったな…、と陽介に言った。

「あつ、相棒…。相棒!!」

陽介は、今度は自分に抱きついて泣いた。

お前は本当に一番の大親友だと、泣きながら告げた。

「おつ、おめでとう…。千枝…。やっと、自分に素直になれたんだね…」

「お似合いだよ！花村先輩に、千枝先輩！」

「おめでとございます…。先輩方…」

先程から、険悪ムードだった、雪子、りせ、直斗だったが、今は大粒の涙を流して拍手をし、二人を歓迎している。

「ありがとう…。みんな…。ありがとう…」

千枝、雪子、りせ、直斗は抱き合って泣き合っている。

「へっ…。一条…。ゲームやりすぎて、なんだか、目が痛いぜ…」

と言って、長瀬は涙を見せないようにして、教室から出て行った。

「へっ、素直じゃない奴…」

一条は笑った。

完二は、まだ気絶している…。

こうして、落ち込んでいる自分を慰めるために始まったギャルゲ―展開は、まさかの感動のフィナーレで幕を閉じた…。

夜

自宅

「お兄ちゃん、ただいまー！」

菜々子が帰ってきた。

リュックを降ろして、菜々子は自分に駆け寄る。

「お兄ちゃん！あのね、遠足楽しかったよ！」

自分は、菜々子に怪我はなかったか、蛇に噛まれなかったか、蜂に刺されなかったか、クラス友達にイジメられなかったかと聞いた。

「ううん、全然、とっても楽しかったよ！」

—安心した。

今日、菜々子は学校の遠足で山登りに行ってきたのだ…。だから、今日は、菜々子が無事に帰ってくるかが気になって、今朝から、自分はあるな調子だったのだ。

「お兄ちゃん、大好き…」

と菜々子に言われた…。

今日、三度の涙を流した。

次の登校日が、やけに気まずい空気だったのは言うまでもない。

陽介総集編（前書き）

今回のお話は、パソコンを使用して書きました…。便利ですね…。
パソコン…。

陽介総集編

2011年5月15日(水) 曇り/雨

夜

「お前、ぶつちゃけ、里中と天城。どっちがタイプだ？大丈夫だつて、誰にもバラさねえからよ…、へへ」

陽介は電話で千枝と雪子、どっちが好みかと聞いてきた。なんて、マせているんだ…。とりあえず、陽介と答えた。

「えっ…、ちよっ…」

陽介は動揺している。

「…」

電話の向こうの陽介は、急に喋らなくなった。沈黙が続く…。しばらくすると…。

「あっ…、あのさ…、気持ちはいんだけど…。俺、その…、お前がそう思っていたなんて…、思ってたなくて…、だな…」

神妙な喋り方の陽介の声が震えている…。

「その…、ごめんな…」

別にいい…、と答えた。

2011年某月某日 雨

「なあ、相棒…。この際だから、聞こうと思うけどよ…。里中、天城、りせ、直斗のうち、誰がタイプだ？誰にも、バラさねからよ…」

と、陽介に聞かれた…。

誰と答えようか…。

・陽介と答える。

以前、微妙な空気になったからやめておこう。

・完二と答える。

一番、無難な答えだろう。

完二と答えた。

「えっ!?!」

陽介は、ひどく驚いている。

「そっ…、そうか…」

陽介は落ち込んでいる…。

2011年某月某日（水） 晴れ

昼間

今日は、陽介と過ごすことにした。

「じゃあ、今日はお前んちな！」

陽介が部屋に来ることになった。

自室

「へえー、結構、片付いてんじゃん」

陽介は部屋を見渡している。

「で、前フリになしに、お布団の下チエック!!」

なんと、陽介はいきなり布団の下を詮索してる。
やめろ!と言った。

陽介は楽しそうだ…。

しばらくすると、陽介が布団の中からなにかを発見。

「おっ、誰かの写真発見！」

陽介は自分の布団の中から、写真一枚を発見した。

わくわくしながら、陽介は写真を見ている。

「誰の写真だー！？里中か？天城か？それとも、りせちーの……」

写真は、陽介のスナップ写真だ。

「!?!」

陽介がかなり驚いている。

「ばっ…、バカヤロウ…」

何故か、陽介は照れている…。

2011年某月某日(土)

放課後

教室で机からカバンに教科書を入れてみると、小さな箱を持った陽介が自分の目の前に現れた。

「よっ…、相棒…」

陽介は持っていた小さな箱を開けた。

小さな箱には、大きなダイヤが付いているリングがある。

「バイトして貯めて、買ったんだよ…」

陽介は顔を赤くしている。

そして…。

「なあ、相棒…、そろそろ、結婚しないか…」

笑顔で、うん…、と答えた。

完

…という夢を見たのを、無理矢理、ジュネスのフードコートに集めた陽介、千枝、雪子、りせ、直斗、クマに聞かせた…。

みんな、力尽きた顔をした。

完二だけ、何故か、顔を赤くしている…。

この作品は、一切コピーをしません。

千枝総集編

2011年某月某日（火） 晴れ

今日は、川原で千枝の特訓に付き合うことにした。
一通り、特訓し終わった後、中華料理店愛屋で食事をする
ことにした。

「うんまー！」

千枝は幸せそうに、特製肉丼を食べている。

2人共食事を終えたので、会計を済ませることにした。

「あっ、ヤバッ……」

なにやら、千枝はポケットを探りながら焦っている……。

「しまったぁー、川原で財布を落としちゃったみたい……。どうしよう……」

千枝はすごく焦っている……。

ここは立て替えてやると、千枝に言った。

「えっ、いいの！？ごめん、マジ感謝ー！」

千枝は、照れながら喜んでいる。

少しだけ、千枝との絆が深まった気がした。

「本当に、キミって優しいんだね…」

と、千枝は感謝の眼差しを自分にした…。

翌日、晴れ

屋上で、千枝と一緒に弁当を食べることにした。

「うはー！今日は、どんなお弁当を持ってきたのー！楽しみー」

千枝は張り切っている。

昨日はトンカツ弁当。

そのことを、千枝に伝えた。

「えー！？マジで、トンカツー！」

千枝は嬉しそうだ。

本当に、肉が好きなんだと思った。

何故、こんなにも肉が好きなのかを聞いた。

「うん！肉は大好きよ！でも…、今は、肉よりも好きな人が…。あつ、なんでもない！なんでもないから！！」

そう千枝が顔を赤くして答えた。

千枝の目から、ひたむきな愛情を感じた…。

翌日の昼休み、曇り

階段を歩いていると…。

目の前に千枝が現れた。

「おーす…、今日、暇かな…？」

千枝から誘われた。

何故か、ドキドキした様子だ…。

今日は、千枝と過ごすことにした。

「じゃ…、じゃあ、今日はキミンちでいいかな…？」

千枝は、顔を赤くしている。

千枝が部屋に来ることになった。

自室

千枝はキョロキョロと部屋を見渡している。

「えっ、えっど…」

落ち着きのない千枝に、今からお茶持ってくるから、適当にくつろいでいると言っておいた。

「うっ、うん、わかった…」

そわそわしている千枝が気になったが、とりあえず、お茶を用意するため下に降りた。

「……」

自分が居なくなったあと、千枝が自分の布団に視線をやった。なにか気になっていようだ……。

「やっぱり……、ちょっと、出すぎた真似しているのかな……」

千枝が布団をかなり凝視している。

「だっ、ダメ……、ダメよ、わたし……。なに考えているの……」

とは言いながら、千枝は自分を落ち着かせようとしていると……。

「ん？」

千枝は自分の布団の近くから、一枚の写真を見つけ出した。

「えっ……！？だっ、誰のしゃ、写真……。雪子……？それとも、りせちゃん……。まさか、直斗君……」

写真は、夏祭りでの千枝の浴衣写真だ…。

「…！」

千枝は驚いている…。

お茶を持って自室に戻ると…。

！？

千枝が自分に抱きついてきた…。

ガチャーン！！と、お茶が床に落ちた。

千枝は顔を赤くして、自分の腕に抱かれながら…。

「じゅめんね…、ずっと…、ずっと…、キミの気持ちに気付かなくて…」

千枝は自分の腕の中で、ただひたすらに泣いている。

「その…、あたし、独占欲強いんだからね…！浮気なんかしたら、許さないかんね…！」

千枝を抱きしめながら、うん…、と答えた。

パチパチ！パチパチ！

！？

「おめでとう！！相棒…！」

なんと、陽介がいつの間にか滝のような涙を流しながら拍手をして現れた。

「良かった…、良かった…、二人とも良かったな…！」

と陽介が言った。

陽介は本当に一番の大親友だ…、と泣きながら告げた。

「おっ、おめでとう…、千枝…。やっと、自分に素直になれたんだね…！」

「お似合いだよ！先輩に、千枝先輩！」

「おめでとうございます…、先輩方…！」

同じくいつのまにか部屋に雪子、りせ、直斗が大粒の涙を流して拍手をしながら現れた。

「ありがとう…、みんな…、ありがとう…！」

千枝が雪子に抱きついて、二人して泣き合っている。

「へっ…、一条…。サッカーやりすぎて、なんだか、目が痛いぜ…」

と言って、長瀬は涙を見せないようにして自室から出て行った。

「へっ、素直じゃない奴…」

一条は笑った。

完

と言う夢も見たと、ジユネスのフードコートに無理矢理に集めた陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマに話した…。

「うっ、うっ、やばいよ…、これ…、これヤバイよ…」

「千枝。あんた、泣きすぎよ」

話を聞いた千枝は泣いているが、それ以外は冷めた顔をしている…。

「なんで、俺らだけ、はぶられてんの…?」

「そうクマよ…」

完二、クマは苦い顔をしている。

りせ、直斗は無表情で固まっている…。

「なによ…、この話…。なんかイラっと来るね…、直斗…」

「まったくです…、グスツ…」

りせは、直斗の顔を見た。

直斗の目が、やけに赤かったのをりせは見逃さなかった。

すると、陽介がテーブルを叩いて立ち上がった。

「うおおおおおおおおい!!いいかげんにしろ!!」

もの凄い勢いで、陽介が怒っている。

すると、雪子、完二、りせ、クマも立ち上がって自分を責めた。

「そうよ!そうよ!」

「そうツスよ!!先輩のしょうもない夢の話聞いても、しょうもないんツスよ!!」

「なんで、りせと先輩がゴールインする夢じゃないのよ……！」
「なんで、クマの出番割愛クマか!？」

と、一気呵成にみんなが責めて来ると、陽介が…。

「もう我慢ならねえ!！」

陽介はすざましい形相で、自分を睨む。

「おお!花村先輩、いったれ!いったれ!！」

完二に煽られながら、陽介は叫んだ。

「俺と里中、どっちが本当に好きなんだよ!……!……!」

みんな、沈黙した。

りせ編

2011年某月某日（土） 曇り

放課後の一学年、教室前。

「花村先輩のお願いでも…、こればかりは無理だよ…」

たまたま、一年の教室を通り掛かると、陽介がりせの前で必死に頭を下げている。

なにかを頼み込んでるようだ。

「なあ、頼む！りせ！後生だから！」

なにやら、凄い必死な陽介だ。

なので、二人の前に出てみた。

「あつ、先輩」

「あつ、相棒！」

すると、陽介が自分に近づいてきた。

「なあ、相棒！お前から、りせに頼んでくれないか？」

と、陽介が必死に自分にしがみついている…。

わかった、と頷いた。

そして、りせに頼むから、陽介の願い通りに背中に赤いろうそくを垂らして、汚い言葉を浴びせてやってくれないか、と言った。

「違うわ！」

久しぶりに、陽介にまともなツツコミを食らった。

「それだったら、天城に頼んでるわ！！なんちゃってー、へへー」

と自分のボケに、陽介が寒いボケを重ねた。

「うわっ…」

自分とりせが引いた。
すると…。

「ちょっと…、あなた達…」

委員会の仕事で提示板のプリントの貼り替えをやっていた雪子が、
たまたま、さっきの言葉を聞いて陽介に近づいてきた…。

バチン…！

バチン…！

陽介はビンタを食らった。

何故か、自分もビンタを食らった…。

雪子はスタスタ…、と提示板の仕事に戻った…。

「…」

陽介は黙っている。

何故、自分もビンタされなきゃならないんだと考えた…。

知識が高まった。

寛容力が高まった。

しばらく、沈黙が走る…。

「あつ！あのね、先輩…、花村先輩から頼まれたのはね…」

話を切り替えしてくれたりせとの間に絆を感じた…。

「その…、明日…、ジュネスの屋上で、女の子向けのショーイベントがあるんだって…。でも…」

りせの顔が曇った。

「そのショーイベントの役者さんが今日のリハーサルで怪我しちゃって、急遽、中止になっちゃったんだって…。それで、その明日のショーの代わりに、あたしにコンサートをしてくれないか…、だって…」

どうやら、陽介の頼みとは、今、アイドル休業中のりせに再びコンサートをしてもらいたいとのことらしい…。

だから、りせは嫌な顔をしていたのか…。

ちなみに、このりせのアイドル休業中については、原作ゲームを参照して下さい。

「なあ、頼む！もう、宣伝のチラシが出回っちゃったから、ショー中止の知らせは当日になる…。だから…、明日、ジュネスに来たお客さん達はガツカリすると思うしよ…。それに、やっぱり、こんな頼めて、中止になったショーよりイベントを盛り上がらせてくれるのは、りせしか居ないしよ…！」

陽介は、かなり必死に頭を下げています。

確かに、イベント中止はジュネス的に大ピンチだろ…。これは、確かに必死なのも頷ける…。

「うっ…、で、でも…」

りせは陽介の事情を理解しているようだが、やはり、ゲームのネタバレ的な理由で、安易にうん…と頷けないようだ…。

「なあ、本当に頼む！オヤジも、今必死になってフォローしてんだよ…！」

「ちよっ！花村先輩！そこまでしなくても…！」

とうとう、陽介は膝を着いて、頭を下げ頼み始めた。

今回ばかりは、下手にボケれないくらいに、陽介が必死だ…。

「本当に、待つてよ…、花村先輩…」

しかし、りせの気持ちも解らなくないし、彼女の気持ちを考えればやれとも言えない…。

ヤバイ…、ボケれない上に下手な決断が出来ない…。

すると…。

「やっぱ…、アイドルマイスターって最高だよな！」

「ああ！昨日も、徹夜でアイドルマイスターやってたよ！」

帰宅途中のオタク系の男子二人組がそんなことを言って、この場を通り過ぎた。

アイドルマイスターとは、今流行りのアイドル育成ゲームのことだ…。

チン！

頭に電球のランプが出た。

そうだ！

とあるアイデアが、頭に浮かんだ。

「どうした？相棒！！」

すぐに、携帯電話を取り出し、千枝、雪子、直斗をここに呼んだ。
しばらくすると…。

「どつたの？リーダー」

「どうかしましたか？先輩」

千枝、直斗は来たが、さっきのアレのせいか、雪子だけ来なかった…。

そして、二人にこう言った。

お前たちには、明日、アイドルをやってもらおう…、と言って、普段から持ち歩いているアイドル衣装を渡した。

「帰ろうか、直斗君」

「はい…、今日は付き合いますよ…、里中先輩…」

普通に無視され、二人が帰って行った。
渡した衣装は投げ返された。

陽介、りせが呆然としている。

「相棒…、まさか…、りせの代わりにあの二人をアイドルにさせて、明日のイベント出させよう…」

うん！と頷いた。

「無理に決まってるだろ！！バカチン！」

陽介は泣きながら叫んだ。

りせは自分ももっていた衣装を捨てた…。

「これ…、十万はくだらない衣装だよ…。しかも、二着も…。どうして、先輩…、普段から持ち歩いてんの…」

いつものメンバーの女性陣を、アイドルに仕上げて出すつもりだったが失敗してしまった…。

「ああー！どうすんだよ！」

陽介のテンパりに拍車がかかる。

同時に、りせも複雑な顔を浮かべる…。

こうなれば、背に腹は変えられない…。

今度は、完二をここに呼び出した。

しばらくすると…、完二が来た。

「ちーっす…、先輩どうかしたんスか？」

陽介が嫌な顔をした。

「まさか…、相棒…」

そのまさかだ…。

そして、完二にこう言った。

お前には、明日、アイドルをやってもらおう…、と言って、普段から持ち歩いているアイドル衣装を渡した。

「さよなら、先輩」

普通に無視され、完二が帰って行った。

渡した衣装は投げ返された。

ダメだったか…、と呟いた。

「たりめえだろ！」

陽介は泣き叫んだ。

ガシィー！

さすがに、切羽詰まっていたため陽介は自分の襟首を掴んだ。
りせは驚いている。

「相棒！マジで、いいかげんにしろ！」

「やめてよ！花村先輩！！」

りせが陽介を抑えようとしている。

「りせは下がってる！」

「先輩は悪くない！先輩は、先輩は先輩なりに花村先輩のこと心配して、あんなことを人に頼んでたんだから！！それに変なことにごだわって、花村先輩の頼みを聞かないでいた、あたしのせいなんだから！！」

陽介に襟首を握られている自分は、ごめん…、弱冠ふざけてやってた…、と言いたかったが言わないことにした…。

陽介は自分の襟首を離れた。

「だけだよ…、りせ…、お前…」

「やっぱり、あたしやる…！」

「えっ！？」

！？

「花村先輩、明日のイベント、あたしがやるよー！！」

なんと、りせはイベントを受けた。

陽介は驚いた。

「おい！さつきから、頼み込んでてなんだけど、いいのか！？本当に！！」

りせは頷いた。

「うん！花村先輩の頼みだし…、なにより…、あたしのせいで先輩と花村先輩が喧嘩するの嫌だから…」

その言葉に、陽介は涙を流した。

「うっ、りせ…」

良かったな…、と陽介の肩を叩いた。

「あつ、ありがとう…、相棒…。さっきは悪かったよ…」

と陽介は自分に謝った。

こちらこそ、ふざけててごめん…、と言いたかったが、空気が空
気なんて言わないことにした…。

りせは顔を赤くして、こちらを見つめた。

「さつき、千枝先輩や直斗や完二を呼んでまで、あんなふざけた真
似したのは、あたしにくだらないうちにこだわるな…、って教えた
かったのと、先輩がりせのステージを楽しみにしてたからなんだよ
ね…」

いや、それは…、ちがっ…。

普通にふざけてたのに、過大評価に受け取られてしまった…。

「本当に、先輩って凄いや…」

りせから恋する乙女の目で見られている…。

いや、マジで、さっきのは、マジでふざけてただけだから…、と
言った。

「もうー、先輩ったら、照れちゃってー。かわいいー！」

「へっ、お前も照れたりすんだな…。なんか、改めて見直したぜ…、

相棒……！」

自分を見つめる陽介、リセから伝わる純粹な尊敬の念から、胸が罪悪感で締め付けられる……。

これからは、気を付けようと思った……。

ちなみに、明日のイベントは雨天により普通に中止になった……。

りせ編（後書き）

はい、りせは反則だと思いました。くぎゅですよ…、くぎゅ…。初めて、主人公の前に登場時の低めのテーションでの声の感じも好きです。あと、恋人ルートのCOMMUNMAXでの台詞には本気で撃沈しました…。あの演出反則です…。

知らないという罪と知りすぎる罪編

2011年某月某日（木） 曇り

夜

家庭教師のアルバイトで、中島秀に勉強を教えることにした。秀の家で相対性理論や、物理学、心理学を事細かに教えた。伝達力が高まった。

「すっ、すごい…、さすが先生だね…」

秀は驚いている。

これぐらいロスじゃあ日常茶飯事だと言った。すると…。

「じゃあ…、先生…。あのさ…」

秀がなにかを聞いたそうにしている。なんでも聞いてみると言った。寛容力が高まった。

「あの…、本当にくだらな質問だけどさ…」

秀はモジモジしている。すると…。

「ヨーグルトの原材料ってなに？」

なんだろう…？

ヨーグルトの原材料って、なんだ…。

「あれ、先生も知らないの？」

マズイ！さつきから、尊敬されてたのに、ヨーグルトの原材料を知らないなんて言えるわけがない…。

ヘイ！ボーイ！知ってるに決まってるんだろがメイン！ユーのくだらない質問にビツクリしただけだYO！と答えた。

「なんで、中途半端なラッパ喋り方なの…？」

マズイ…。

なんだ、ヨーグルトの原材料って…。

！？

頭に電球が浮かんだ。

ちよっとトイレ借りるぞ…、と言って、秀の部屋から出た。
そして、トイレ…。

陽介に携帯で電話をした。

「よっ！どうした？相棒」

陽介にヨーグルトの原材料を聞いた…。

「えっ！？」

陽介の反応がおかしい…。

まさか、知らないのかと言った…。

「知ってるでござるよ！知らないわけないでござる！相棒殿の質問がくだらなすぎて、困惑しただけでござる…ニンニン…！」

なんだ、その中途半端な忍者喋りは…。

解らなそうなので黙って電話を切った…。

こうなれば、千枝だ…。

千枝に電話した。

「ヨーグルトの原材料！？」

千枝の反応が変だ…。

「しっ、知ってるわよ！知ってるけど…、あんたなんかにおっ、教えてあげないんだからね！べっ、別に知らないから、教えてあげないんじゃないくて…、あんたなんか…、おっ…。」

これは絶対に知らない反応だと思い、電話を切った…。

雪子に電話した。

「ヨーグルトってなに？」

質問を質問で返されたので電話を切った。
完二に電話をした。

「!？」

完二は驚いている。

「先輩…、そんなこと聞いてどうするんですか…？」

何故か、完二は怒っている…。

「先輩…、その…、見損ないました…」

電話を切られた。

意味が解らないが…、もしかしたら、知ってはいけないなにかで作られてるのではないだろうか…。
りせに電話した。

「よっ、ヨーグルトの原材料!？」

りせは驚いている。

そして、しばらく沈黙した…。

「せつ、先輩…、先輩のエッチ!!変態!!もう知らない!!」

電話を切られた…。

また怒られた…。

しかも、なにかセクハラだったらしいが…。

ヨーグルトの原材料とは、相手の怒りを買うセクハラな物なのか

…。

まさか、知らない方がいいのか…。

しかし、大切な教え子の質問に答えないわけには行かない…。

直斗に電話した。

「はい…、どうしました？」

直斗にヨーグルトの原材料について聞いた。

「えっ、牛乳ですよ」

！？

直斗は普通に答えた。

牛乳だったとは！？

直斗に礼を言い電話を切った。

よし、これで秀に教えられる…。

だが…。

脳裏に、完二、りせの言葉が浮かぶ…。

何故、二人はあんなに怒っていたのか…。

原材料は牛乳だった…。

しかし、何故、二人の怒りを買ってしまったのだろうか…。

もしかしたら、ヨーグルトの原材料には、牛乳だけではないなにかがあるのだろうか…。

ヨーグルトについて、まとめた。

・牛乳が原材料である。色からして間違いはないだろう。

・完二の怒りを買ったことから、ヨーグルトの原材料にはなにがある。

・りせの反応からセクハラ的な意味合いがあるらしい…。

なんだ！？わけが解らない…。

もしかしたら、陽介、千枝、雪子が知らないのも当然ななにかがあるのか…。

しかし、直斗は知っていた…。

まさか、直斗が平然と牛乳と答えたのは、直斗が探偵…、つまりは警察と係わっているからか…！？

もしかしてと思い、堂島に電話してみた。

「おっ、どうした？」

ヨーグルトの原材料について聞いた。

「えっ、牛乳だろ？」

！？

やっぱり！？

ヨーグルトの原材料は警察…、いや、犯罪に関わる物だ！
念のため、安達にも電話してみた。

「やあ、珍しいね…。どうしたんだい」

ヨーグルトの原材料を聞いてみた。

「えっ！？」

安達は驚いている。

すると…。

「キミさ…。冗談も程々にしないと怒るよ…」

！？

電話を切られた…。

安達が怒っていた…。

バカな…。

何故、警察関係者の直斗、刑事の堂島はあっさり答えたのに、下っぱ刑事の安達には答えられなかったのだ！？

なんだ！？一体、どういうことなんだ！！

謎が謎を呼んでいる…。

その頃…。

完二とりせが電話している。

「俺…、先輩にヨーグルトの原材料を聞かれて解らなかったから…、ついカツとなっちまった…」

「あたしも…、解らなかつたから、つい先輩罵っちゃった…。あとで調べたら原材料は牛乳だったのにな…」

「明日、謝りに行こうぜ」

「うん」

一方、その頃の警察署内。

安達は堂島に近づいた。

「堂島さん、ヨーグルトの原材料ってなんすか？」

「牛乳だ…。あいつにも聞かれたな…。最近の若者は、こんなこと知らんのか…」

自分は秀の部屋に戻った…。

「先生…、トイレ長かったね…」

年頃だからと答えた。

すると…。

「先生…、ヨーグルトの原材料について調べただけ…」

!?

なに、秀が禁断のヨーグルトの原材料について調べただと!?

「原材料は牛乳だっ…」

子供はそんなこと知らなくていいんだ!と叫んだ…。

「…えっ」

秀は固まった。

しばらく沈黙が続いた。

「…っ…、ごめんなさい…」

何故か、秀に謝られた…。

知らないという罪と知りすぎる罪編（後書き）

元ネタ「魁！クロマティ高校」のヨーグルトの原材料が解らなかつた話

雪子編3

20XX年某月某日（金） 雨

夜

眠りのない娯楽の街、八十稲葉街…。

その一角にあるホストクラブ…、『ジュネス』…。

この街一番のホストクラブであり、遠方から、この地を訪ねる女性も少なくはない。

だが…、時代による変革か、八十稲葉に『マヨナカ』という新たなホストクラブが建った…。

これにより、ホストクラブ『ジュネス』は勢いを失い閉店寸前であつた…。

「チクシヨウ！なんとか、ならねえのかよ！」

ジュネスの店の中で、ナンバー1ホスト、花村陽介がグラスを投げ捨て叫ぶ。

荒れ狂う花村を、ナンバー2ホストである自分は、黙って見つめているしかなかった…。

そして、不安げにマネージャーである里中千枝は自分達を見つめる…。

「くそっ…」

リボンシトロンを飲んだくれながら、花村は泣いた。

「ここで、俺たちは終わりなのかよ…」

「花村…」

地面に伏せる花村を里中千枝が慰める…。
すると…。

「あらあら…、まるで吹き溜まりね…」

!?

玄関から、一人の女性の声が聞こえた…。

「誰よ!あんだ!!!」

里中が叫んだ。

すると、女性は優しく微笑みながら、札束がいつぱいに詰まった
スーツケースを花村の目の前に投げた。

!?

花村は札束を数えた…。

「これ…、全部、モノホンの金じゃねえか!?!」

花村、里中が驚いている。

そして、女性は扇で自分の唇を隠した。

「いいこと…。あたしは今、そのお金で、このホストクラブを買い
取った…。つまりは、この店のオーナー…。そして、たった今から、
このホストクラブ『ジュネス』は…、見えないところも勝負仕様!
ハートもギョツ!となる、あたし専用のホストクラブ…、『天城屋』
として生まれ変わるのよ!!!」

と、女性が叫んだ。

花村、里中が唾然となった。

自分は…、あんなに者だと聞いた…。

女性は笑った…。

「天城…、雪子…。今日から、あなた達には、あたしの王子様をや
つてもらおう…」

天城雪子…。

彼女が崩壊したホストクラブ『ジュネス』…、いや、『天城屋』
で、この荒んだ街、八十稲葉に新たな革命を起こすのを…、この時
の自分はまだ気付いていなかった…。

という脚本の演劇を文化祭でやらないかと、クラスのホームルー

ムで手を挙げて意見した。

「Jのあと、雪子にビンタされた。

里中千枝探検隊 前編

2011年某月某日（水） 曇り

夜

病院の清掃のアルバイトをしていると、小夜子に呼び出され病室の一室に連れて行かれた。

「また今日も…？」

小夜子が怪しげな視線を自分に送っている…。

「じゃあ、今日もいろいろ教えてあげようかしら…？」

と小夜子が自分の前に現れた。
そして…。

翌日、晴れ

放課後

じゃあ…、と陽介、千枝、雪子に手を振って教室から出た。

「
…
」

自分が居なくなつた教室で、陽介、千枝、雪子がコソコソと話を始めた。

「最近、相棒の様子がおかしいよな……」

「だよな……」

「どうかしたのかしら……」

三人が話していると、教室に完二が現れた……。

「ん？どうした、完二……」

すると、完二が虚ろな表情で……。

「実は……先輩方に話があつて……」

「なんだ？」

「そつ……、その……」

陽介に聞かれると、完二がモジモジとしはじめた……。

「なんだよ!?!」

すると、完二は強引に陽介の手を引っ張り、一階の階段の影に連れて行かれた。

千枝、雪子は首を傾げた。

「なに!!!本当か!完二!?!」

陽介が驚いた。

すると……。

「声がでかいッスよ！」

「ああ、わりい…。にしても、マジかよ…。相棒が夜の病院のバイトで、歳上のお姉さんと影でなんかやってるって!？」

「そうなんスよ…。昨日、先輩と同じバイトしてる奴から(強引に口を割らせて)聞いた話なんスけど…」

「どうやら、自分が病院のアルバイトで小夜子と会っていることについて話しているらしい…。」

「そのお姉さんから誘われて、誰も居ない病室につて…。やぶえよ!なんだよ、そのエッチなマンガみたいな話!!」

「ですから…。さつき、里中先輩や天城先輩の前で言えなかったんスよ…」

と陽介、完二がヒソヒソ話している。

だが…。

!?

陽介、完二は殺気を感じた。

「今の本当なの…?」

ゴトゴト…。!!

「!?!」

陽介、完二が振り返ると…。

怒りのオーラを放っている千枝、雪子、りせ三人の姿があった…。

「おせー…!」

「うわああああ！」

陽介は直ぐ様に逃げ出そうとしたが、千枝にフライングレッグラリアットを首に食らい倒れた。

完二も逃げ出そうとしたが、雪子、りせから首にクロスボンバー（二人で同時にラリアットをして、相手の首を挟む荒技）を食らいダウンした。

「ひいい…、命だけは！お命だけは！！！」

陽介は三人に怯えた…。

千枝は陽介に顔を近付けた。

「さっきの話…、詳しく聞かせなさい…！」

陽介、完二は一部始終の内容を話した。

すると、千枝、雪子、りせから激しい怒りのオーラが放たれた。

「ゆっ、許せない！あたしのような可愛くて、足技の天才で、運動神経抜群の天才美少女格闘家が居るってのに！」

「千枝、それただの自信過剰。それにしても、確かに許せない！」
「っ！？」

雪子の言葉に、千枝がビクッ！となった。

「先輩には…。先輩には、あたしが居るってのに…。なんで、他の女なんかに！」

りせがわら人形を取り出した。

「うわっ！なにやってんの！？それはダメ！」

千枝がりせを抑えた。

雪子が拳を握った。

「こっぴなったら、みんなで現場を押さえるのよ！」

と言い、今夜、自分のバイト先の病院に全員集まることになった
…。

無論、陽介、完二、直斗も…。

夜

アルバイト先の病院前…。

「みんな、来たわね…」

陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマが集合した。

「なんで、俺たちも…」

「諦めましょう…」

「なんか楽しそうクマー！」

直斗がオドオドしている。

「あつ、あの…、仮に先輩がそうだとしても、これはプライバシー
侵害じゃあ…」

直斗がそう言つと…。

「そつ、そつだよ！里中に、天城、りせ！」

「そうツスよ！さすがに、先輩だって隠しておきたいことぐらいあるツスよ！」

三人の言葉に、千枝は勢いを失った。

「ぐっ…、確かに、やりすぎかも…」

すると、りせが立ち上がった。

「なによ！みんなのリーダーである先輩が知らない女とみんなに内緒で密会してるのを許せるわけ！？」

「そつよー！」

雪子も立ち上がった。

「だつ、だけだよ！」

「男には、黙っておきたいことの二つや三つ…、あるもんツスよ！」

陽介、完二が2人を抑えた。

すると、弱気になった千枝が…。

「ねえ…、雪子、りせちゃん…。やっぱり、やりすぎだよ…。一応、リーダーだって男の子だし…、なんか隠し事ぐらいしたくなるわよ…。それをコソコソと探るなんて…、年頃の女の子のやることじゃないよ…」

そう言つと…。
雪子が…。

「たとえば、年頃の女の子らしくなくても、あたしは彼の隠し事を知りたい!！」

と叫んだ。

すると、リセも…。

「そうよ!どんな先輩でも受け止めてあげなきゃ!それが、本当の女の優しさでしょう!？」

と叫んだ。

(なに良い事言つたみたいなおーラを出して、ダメなことを正当化してんの!?)

千枝、直斗が心の中で叫んだ。
すると…。

「へへっ…、こりゃ、一本取られたぜ…」

「カッコいいぜ…、カッコ良すぎるぜ…、アネゴ達…」

「ユキちゃん、リセちゃん、カッコいいクマー!！」

陽介、完二、クマが涙を流している。

(うわー、なに取り込まれてんだ、このバカー)

千枝、直斗が叫んだ。

「よし！あいつの隠し事暴こうぜ！りせ！」

「うし！協力しまっせ！天城のアネゴ！」

「クマも！クマも！」

陽介、完二、クマが雪子、りせの協力に意志を固めた。

こうして、自分の秘密を暴く義兄弟の契りの盃が交わされた。

「今回、ツッコミ頑張ろうね…、直斗君…」

「不慣れですが、頑張りましょう…」

千枝、直斗も義兄弟の契りを交わした。

しばらくすると…。

「あっ！来た！」

病院の前に、自分がカバンを持って現れた。

里中千枝探検隊 後編

前回までのあらすじ。

自分が、なにか病院で怪しいことしてるとの噂から、雪子、りせを中心にした捜索が始まった。

果たして、彼女等は真実に辿り着けるのか!?

果たして、自分は夜の病院で、なにをやっているのか!?

『マヨナカテレビスペシャル緊急特番!リーダーの謎を追え!神秘の夜の病院の謎とは!?!里中千枝探検隊!!!』

千枝が立ち上がった。

「なんで!あたしがタイトルになってんの!?!」

すると、雪子が…。

「語呂がいいから…」

自分は鼻歌を歌いながら、病院の更衣室へ向かった…。

もー、泣かないでー、今ー、あなたを探してるー、人がいるから

ー、とゼータガ ダムの主題歌を歌った。

「今、相棒はゼータガ ダムの主題歌を歌いながら、更衣室へ向かったな…」

「そツスね…」

「そツスねクマ…」

自分の背後を、陽介、完二、クマが追跡している…。

さすがに、男子更衣室を女子が覗くわけには行かないので、この辺りは男子が任されている…。

すると…。

「しかし…、なぜ、相棒はゼータ ガンダムの主題歌を鼻歌している…」

と陽介が疑問に思うと…。

「確か、ゼータガンダムって…、女性キャラが多いツスよね…」

「そうクマねー、地球圏離脱の話は最高クマー」

と完二、クマが言うと…。

!?

陽介隊員の頭になにかが走った。

「ゼータガンダム 女性が多い 女性 やましいこと…。まさか、相棒は!?!」

と陽介が叫んだ。

すると…。

「いや…、それは考えすぎッス…」

「それは考えすぎだクマ…。」

完二隊員、クマ隊員と一緒にツッコんだ…。

「だよね！」

陽介隊員が笑顔で頷いた。

そんなこんなしてる内に、自分は着替え終わり仕事に向かった。

「着替えるの早っ！」

「なに、ボヤボヤしてんスカ!？」

と陽介に、完二が言った。

「はふえ？」

「早く、先輩のロッカーを調べるんツスよ！」

「そうクマ!？」

!？

完二隊員の言葉に、陽介隊員が驚愕した！

「いや、待て！それはやりすぎじゃね!！」

陽介隊員が完二隊員を止めた。

「俺たちは先輩が、俺たちに隠し事してないか、確かめに来たんスよ!なのに、こんなことでイモを引くんスカ!！」

と完二隊員が叫んだ。
すると…。

「よし！行くっぜ！」

一瞬で、陽介隊員は説得された。

男子更衣室に、陽介、完二、クマが忍び込んだ。
そして、自分のロッカーを三人は勝手に開けた。

「間違いねえ…、これは、さっき相棒が持ってたカバンだ！」

陽介が自分のカバンを取り出した…。
完二、クマが頷くと、勝手に自分のカバンを開けた。
すると…。

「これは！？」

陽介隊員は、なにかを発見した！？

一体、それはなんなのか！？

CM後、陽介隊員が発見したものが明らかに！？

『ペルソナ4 ドラマCD Vol.1』

・2009年6月の何日かに発売。

陽介が驚いた。

「うわっ！すげえ！CMだ！ファンフィクションだから、まったくメリツトないのに宣伝した！！」

「んなこといいから、早く、カバンの中身を教えてくださいよ！」

完二が叫んだ。

「ああ…、そうだな…」

陽介が自分のカバンから取り出した物を、みんなに見せた。
ただのノートだ…。

陽介はパラパラと開いた。
予定表や、買い物などのメモぐらいしか書かれていない…。

「ただのメモ帳じゃねえか…」

すると…、クマがなにかに気付いた。

「あっ！ヨースケ！さっきのページ、なにか長文が書かれてあるクマ！」

とクマに言われたページを陽介が開いた。

「いいか、読むぞ……」

陽介、完二、クマが息を飲んだ……。

陽介はメモ帳に書かれてある文章を読んだ。

ポエム

『菜々子』

作、自分

なんで、こんなに可愛いのかよー

菜々子という名の宝物ー

好きと言われりゃあ、悶えて夜も眠れないー

マジで眠れなかったー

こないだ、菜々子をイジメるな……と近所のガキ大将をガンバライド（仮面ラダーのカードゲーム）と遊 王カードのレアカードを配って買収してやったー

菜々子に、お兄ちゃん太った？と言われた日、悲しすぎて1週間

はなにも食べなかつたー

こないだ、菜々子に手品したら喜ばれたので、ミスターマック、マギー 司に弟子入りしたー

気付いたら、スプーンだけではなく、日本刀を力をだけで折れるようになつたー

陽介、完二、クマが黙つた…。

もう一文、なにか書かれてあつたので陽介が読んだ…。

日記

タイトル『陽介について思うこと』

「なつ!?!」

陽介が驚いた。

陽介は急に緊張し始めた…。

「すつ、すまねえ…。完二…。なんか緊張するから、代わりに読んでくれ!」

と言われ、日記を完二が代わりに読むことにした。

「じゃあ…。読みますよ…。」

陽介はドキドキしている…。
完二は日記を読んだ。

「なにも書かれてません…」
「なら、タイトルなんか書くな！…！」

陽介は叫んだ。

このページ以降、まったくの白紙だった…。

「ろくなこと書かれてないな…」

「そうツスね…」

「そうクマね…」

みんな、ポエムをなかったことにしている…。

「ん？これ、なにクマか？」

すると、クマが自分のカバンからなにかを見つけた。
クマはなにかの本をカバンから取り出した。

「こっ、これは！？」

陽介、完二、クマは驚愕した！！

一方…。

自分は数時間くらい、病院内の窓を拭いていた。

キミはー、誰とキスをするー、あたしー、それともー、あの娘ー、とマク スFの主題歌を鼻歌していた。

そんな自分を影から、雪子、りせが見つめている…。

「雪子先輩…、先輩は今、普通に仕事してるわね…」

「そうね…」

家政婦より、鋭い目つきのりせと雪子は自分を見つめている…。
すると…。

自分の手が急に止まった…。

「あれ!?!」

「先輩の手が止まった!?!」

雪子、りせが困惑した。

そして…。

そこに居るのは解っている…、誰だ…、と廊下の壁に向かって言った。

!?!

「ウソツ!気付かれたの!?!」

「どうしよう!?!?雪子先輩!?!」

雪子、りせは自分に気配を気付かれたので焦っている。

自分は窓を拭くのを止め、雪子、りせが潜んでいる廊下に歩み寄った…。

(やばいよ！雪子先輩！)

りせが、かなり焦っている…。

！？

すると、雪子の頭になにかが走った。
そして…、雪子は…。

「ゼロ…！黒の騎士団一番隊隊長、紅月カレン…、ただ今到着しました…！」

と雪子は、なにかの声真似をした…。

りせは、うおーい！なに言ってるんだー、あんたー！！と声にならない声で叫んだ。

すると…、自分は…。

なんだ、ただの黒の騎士団か…、と言って窓拭きに戻った。

「えっ、嘘…」

雪子、りせが驚きながら、一安心した。

…。

って、なんでブリタニアに支配されてもない日本に黒の騎士団が居るんだよ！！と叫びながら、自分は雑巾を投げ、また雪子、りせが隠れている壁に迫った。

「ダメだった！」

「当たり前だよ！！！」

雪子、りせは抱き合って、震え上がった。

自分が徐々に雪子、りせが隠れている壁に近づくと…。

「なにやってるの？キミ…。病院では静かにしなさい…」

！？

さっきの声で、小夜子が自分の背後から現れた。

「はっ！」

「まさか…！？」

雪子、りせが驚いた。

すると、自分は首を小夜子に向け、歩みを止めて、また窓際まで戻った。

雪子、りせはなんとかやり過ごした…。

「なに騒いでたの？」

と小夜子に聞かれたので、なんか黒の騎士団が居たから…、と答えた。

「なにそれ…？」

小夜子は困惑した。
すると…。

「フフツ…、そくだ…。また今日も知りたいの？」

と色っぽい声で、小夜子が自分に近づいた。

ああ…、ちようど、今日のノルマも終わったところだから頼む…、と小夜子に頭を下げた。

「えっ!？」

「嘘!？」

雪子、りせは驚愕した…。

「じゃあ、来なさい…。ちようど、この部屋が空いているから…」

と小夜子は手招きして、自分を空きの病室へ誘った。

ホイホイ…、自分は小夜子につられた…。

「嘘でしょ……」

「そっ、そんなあ…、先輩が…、あんな女に…」

雪子、りせは涙目になった…。

一方…。

陽介、完二、クマは、千枝、直斗に合流した。

そして、陽介は自分のカバンから取り出した一冊の本を、千枝と直斗に見せた。

「なに、この本…」

千枝が陽介の手から、本を取った。

そして、本を開くと…。

「えっ！？これって…」

千枝、直斗は驚愕した！！

そして、自分と小夜子が入った空きの病室前に、雪子、りせが張り込んでいる…。

「じゃあ、はじめるわよ…」

小夜子がそう言った…。

！？

雪子、りせの顔が真っ赤になった…。

「はっ、はじめるって…？」

「雪子先輩！どうしよう…！」

二人が焦っている…。

「フフツ…、本当に熱心ね…」

と小夜子が笑う…。

そして、とりあえず、早くしてくれ…、と自分が言った…。

！？

雪子とりせのなにかが、破裂した。

「ちょっと！あんたたち、なにやってんのよ!?!」

「先輩のバカあああ!?!」

！？

雪子とりせが空きの病室のドアを乱暴に開けた！
すると…。

「へっ…」

…。

「あら…」

「あれ…」

雪子、りせの目の前には、ベッドを机代わりにしてノートを広げた自分の姿と、医療関係の資料を自分の目の前に広げて解説をしている小夜子の姿が…。

陽介が自分のカバンから見つけた本は、人体のマッサージについて詳しく書かれた本であった。

マッサージの本には、千枝の脚は筋肉痛になりやすいので、このふくらはぎを重点的にマッサージするべき…、と自分の字でメモが書かれてあった。

千枝はそれを見て…。

「まつ、まさか…、リーダーは…」

陽介が頷いた。

「ああ…、そういや…、最近…。相棒はよく探索後…、みんなにどつか身体の調子が悪くないか？つて1人ずつに聞いてたよな…」

「確かに…。俺、こないだ肩が凝ると言ったら、先輩、肩のマッサージをしてくれたツス…」

完二が肩を回しながら言った…。

すると、直斗も…。

「そういえば、今日の放課後…、先輩が僕の教室に来て、シークア―サードリンクをくれました…。最近、僕の顔色が悪いからって…」

すると…、千枝も…。

「あたしも…、最近、脚の筋が痛いって…、リーダーに言ったな…」

クマが…。

「もしかして、センサーは、みんなのことを気にして、病院でアル

バイトしながら、健康管理やマッサージとかをナースさんに教わっていたんじゃないクマか…」

その言葉に、みんなが頷いた。

「ってわけよ…。アルバイトなんか終わったら、すぐ帰ればいいのに、あたしの休憩時間になるまで待ってたりして、すぐに友達のマッサージや健康管理について聞いてきたりして…」

と小夜子が、雪子、りせに今までの事情を話した…。
雪子、りせは呆然とした。

「しかも、私の休憩時間を削って悪いからとか言って、1日のアルバイト代の一部を私に渡したりするのよね…。いつもいらなんて言って、返しているけど…」

「そうだったんだ…」

「なのに、あたしたちは先輩を疑って…」

雪子、りせは小夜子から事情を聞いて納得したと同時に、自分を探ったことについて反省してくれたようだ…。

「ごめんなさい…、疑ったりして…」

「ごめんね…、先輩…」

いや気にするな…、と雪子、りせに言った。
寛容力が高まった。

すると…、小夜子は…。

「まったく、あなたたちが羨ましいわ…」

と雪子、りせに言った。

「えっ？」

「だって、こんなにカッコいい男の子から心配されてるんだもの…。あなた達が羨ましいわ…」

と小夜子に言われ、雪子、りせの顔が赤くなった。

「フフツ…、あたしみたいな悪い女に捕られないよう…、今のうちに、しっかり捕まえておきなさいよ…」

と小夜子が笑いながら言った。

「ちが！違います！勘違いしないでください！」

雪子が顔を赤くして、小夜子に言い訳をした。

「じゃあ、先輩ー！捕まえたげる！」

りせが自分に抱きついた。

「あっ！！りっ、りせちゃん！！なっ、なにしてるの！？」

と雪子が顔を赤くして、自分の身体から、りせを離そうとしている。

「コラコラ…、病院では静かにしなさい…、フフツ」

そんな光景を笑いながら、小夜子は見つめている。

一方、誤解がとけた陽介達は病院を後にした。

「にしても、悪いことしちゃったな…」
「だねー」

陽介、千枝が反省している。

「でも…、やっぱり、先輩…。いや、俺らのリーダーってすげえと
思ったツスよ」
「そうですね」

「そうクマー！センサーは凄いクマー！」

完二、直斗、クマがはしゃいでいる。

「よし！今から、みんなで俺んちで飯食うか！」

と陽介が言った。

みんな楽しそうに笑いながら、ジュネスに向かった。
こうして、何事もなく物事は綺麗に終わった…。

しかし…。

陽介、完二、クマは気付いていなかった…。

あのメモ帳にあったタイトル『陽介について』のページが…、炙り出しで書かれていたのを…。

直斗編

2012年1月8日(日) 雪

昼間

今日は、冬祭りで神社に出店などが出ているので、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマ、直斗と行くことになった。

出店を見ながら歩いている途中、陽介が完二、クマ、自分呼び集めた。

男子トイレ前…。

「お前達…、覚えてるか…？夏祭りでの惨めな思い……」

と陽介がクマを睨んで言った。

完二が苦い顔をした…。

「ああ…、覚えてるツス…。ていうか、なんか俺らって苦い思い出が多くないスか…」

「夏祭りについては、原作ゲーム参照クマー」

「てめえ、クマ吉…。なに言ってるんだよ…。夏祭りに関しては、完全にてめえのせいだろ…！」

陽介は泣きながら、クマの襟首を握った。

「うわー！ヨースケ、なにも泣くことないクマー」

「泣きたくもなるわー！大切な何かを失った林間学校に、貴様にだまされた夏祭り、違う意味でドキドキした修学旅行に、恥辱と屈辱が夢のコラボレーションした文化祭！そして、なにより、男祭りに

過ごしたクリスマスイブ！なんもいいことねえじゃねえかよー！」

完二はうつむきながら…。

「まあ、いいじゃねえツスか…、花村先輩…。どうせ、俺らなんか…」

完二も泣き始めた。

「うわー！カンジも泣くなクマー！！」

クマはあたふたしている…。
すると、陽介がこっちに首を向けた…。

「んっ！待てよ…、クリスマスイブ…。確か、お前だけ居なかったよな…」

と陽介が言った…。
ギクツ！となった。
すると、完二も…。

「あー、そういえば…、花村先輩とクマはクリスマスイブ一緒だったすけど…、先輩だけ携帯が繋がらなくて呼べなかったんツスよね…」
「確かに、そうクマねー」

みんなが一線に自分を見つめている…。

自分の脳裏に思い出される、あのクリスマスイブ…、をどう過ごしたかは読者の想像と判断力に任せるとして…。

とりあえず、今はどうするんだと話を切り替えた…。

伝達力が高まった。

「」

みんなから疑惑の目で見られている…。

夏祭りと違い今回は、ちゃんと2人組ずつで分けられるな…、と言った。

「おー！そっだよー！」

「そうツスね！」

「うほほーいクマー!!」

ああ、こいつら単純で良かった…。本当に良かった…。

ていうか、それで陽介は自分達を集めたのだろっ…、と言った。

「ああ！そっだよ！今回はちゃんと分けられるから、抜け駆けなしだぞ！クマ吉！」

「わっ、わかったクマよ…。」

よし、なんとか自分の話から切り抜けた…。

しかし…、陽介、完二、クマの心の中…。

(あいつ…、ぜってえ、なんか隠してる…。ぜってえ、クリスマスイブになんかあったぞ…)

(花村先輩とクマと食べたケーキ…、なんかしょっぱかった…)

(先生の部屋…、なんか最近、いい匂いするクマ…)

みんなの腹の内に気付かないまま、組み合わせについてどうするか聞いた。

フェアにしたいから、くじとかで決めたいが…、と言っと…。

「ところが、ギッチョン！」

！？

陽介が修学旅行で使った番号のふられた割りばしをポケットから出した…。

「こんなこともあるのかと…、持って来てたんだよねー、ナハハ！」

「花村先輩…、あんた…、まだ持ってたんすか…」

「なんか、泣けてきたクマ…」

無駄に準備万端な陽介の姿に溝が深かまった…。

そんなにしたいのか…。

ちなみに、割りばしをどう使ったかは原作ゲーム参照…。

「一番が里中、二番が天城、三番がりせ、四番が直斗…。引いた割りばしに書かれた番号の人とペアだぞ。ちなみに、やり直しや交換はなしだぞ…」

と言い、陽介が割りばしをシャッフルし握った。

「おっ、おし…！」

完二は赤くなりながら、陽介の手からくじを引く。

クマはハシャギながら引いた。

自分も引いた…。

陽介は残ったくじの番号を見た。

自分のくじには『四番』と書かれている…。

直斗とペアだ…。

「うがー！！里中とかよ！！新年からついてねえ！！」

陽介は叫ぶ…。

陽介、千枝がペアのようだ。

「俺…、天城先輩とツス…」

完二は顔を赤くしている…。

完二、雪子ペア…。

「クマは、りせちゃんとクマー！！」

クマは喜んでいる…。

クマとりせのペア。

みんなに自分のくじを見せた。

「おー、クールなカップリングだなー。いいねー」

「絵になる組み合わせクマねー」

「…」

陽介、クマは笑っているが、完二は苦い顔をしている…。

とりあえず、この組み合わせで冬祭りを過ごすことになった。

女性陣と合流し、以上の内容を告げ別れることにした。

「あたしが花村とか…。はあ…、新年からついてない…」

「んだと、てめえ！！同じこと言つなよ！！」

陽介、千枝は揉めている…。

「完二君…と、ね…」

「よっ、よろしくお願いしまっス…」

完二、雪子はぎこちない…。

「えーっ、りせ、先輩とが良かったー」

「クマがいるクマよー！」

りせは嫌がっている。

無理もない…。

「あっ…、その先輩…、行きましようか…」

直斗は緊張気味だ…。

こっちまで緊張してしまう…。

みんなの方を見た…。

「はあ…、とりあえず我慢してあげるから、ビフテキ串買ってきて
「相変わらず、肉、肉づるせえな…」

陽介、千枝は口喧嘩しながらも歩き始めた。

「しょうがない…、行くっ…、クマ…」

「クマー…！」

りせ、クマペアも歩き始めた。

「…」

「…」

完二、雪子のペアは何故か自分と直斗を見つめている…。

「どうかしたんでしょうか？天城先輩に異君…」

なんか、雪子、完二の目からプレッシャーを感じたので直斗の手を引っ張って、この場を去った…。

直斗と出店を見て回った…。

「…」

会話がまったくない…。

…。
適当に、りんご飴を2人分買ってきた。

「あつ、ありがとうございます…」

…。

まったく、会話が進まない…。

…。

冬休みをどう過ごしているかを聞いた…。

「いえ、特には…」

…。

「せつ、先輩の方は…？」

いえ、特には…、と答えた…。

沈黙が続いた…。

すると、直斗が…。

「あつ、おみくじがありますね」

と言った。

ああ…、そうだなと言った。

少しは話が広がるかと思ひ、直斗とおみくじを引くことにした…。

「じゃあ、僕から…」

直斗はおみくじを引いた。

『小吉』だ…。

…。

「あつ、小吉ですね…。先輩…」

そうだね…、と答えた。

…。

会話が広がらない…。

話が広がらない小吉なので、まったく話が広がらない…。

自分も引くことにした…。

この気まずさから逃れるために、話のネタになるような『凶』か『大凶』、『大吉』が出ればいいが…。

引いたくじを広げた。

くじにはこう書かれている…。

にじく故何つな……。
……？

『ゼータガンダム』

ゼータガンダムだよ!!
と叫んだ。

なんで、吉や凶じゃなくて、ゼータガンダムなんだよ!!
なに!?!自己破滅型とでも言いたいのか!!!

というか、くじにゼータガンダムってなに!?!関係ないだろ!

ゼータガンダム全話に、くじなんか出たか!!出でないだろ!!

あっ、出たかも…。

いや、そういうことじゃねえよ!!!

と、叫びまくった。

「先輩…!落ち着いてください!!」

!?

直斗に体を揺らされて、正気に戻った。

すっ、すまない…、と直斗に謝った。

「なっ、なにかの間違いですよ…。もう一度、引いてみましょうよ…、プフッ」

多少、直斗が半笑い気味なのが気になったが、もう一度、引くことにした…。

確かに、あれはなにかの間違いであろう…。

引いたくじを広げた。

くじにはこう書かれている…。

ゼー
にじくたま、故何つな……。
タガンダムなんだよ!!

『ゼー
タガンダム』

と、また叫んだ。

なんで、またゼータガンダムだよ!!

しょうもないギャグを二回もやるなあ!!

せめて、逆襲のシヤアか、ターンエーにしろ!と叫んだ。

「せつ、先輩!!」

はっ!?

直斗に体を揺らされて、正気に戻った。

「たっ、確かに、プフッ!こっ…、くじに…、プフッ!ぜつ、ゼータガンダムとは…、プハッ!おかしいです…、プハッハハ!」

おかしいなら笑えよ…、と直斗に言った。

とりあえず、落ち着いた直斗はおみくじを見つめた。

「さすがに、僕が引いたら小吉が出たのに、まったくなんの関係のないゼータガンダムという文字が出るのは…、おかしいですね…。とりあえず、もう一度、僕が引いてみます…」

直斗は確認のため、またおみくじを引いた。

すると…、『中吉』が出た…。

どう見ても、普通の中吉だ…。

「どうやら…、なにかの手違いですね…」

どんな手違いだよ…、と思った。

しかし…、直斗が引いたら普通のくじが出た…。しかも、結果もさっきとは違っている…。

確かに、なにかの手違いかもしれない…。

また、引いてみた。
引いたくじを広げた。
くじにはこう書かれている……。

『ターンエーガンダム』

い い …… ? …… …… ……

か…。
げ…。
ん…。
に…。
し…。

ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！…！！
！と叫んだ。

なんで、またガンダムになってんだよ！
ていうか、確かに、どうせならと言ったが、なんでターンエーガ
ンダムなんだよ！！

意味わかんねえよ！！
ヒゲなんか生えてねえよ！！と叫んだ。

「プフツ！ハハハハハ！！」

！？

直斗が豪快に笑い出した。
かなり笑っている…。

「すつ、すみません…、すみません…、先輩…！ハハハ！！」

ここに来て、初の直斗の笑顔だ…。
ひとしきりに笑い終わった直斗が自分を見つめた。

「あなた…、本当に不思議な方だ…。こんなこと…、ありえません
よ…」

と直斗から言われた…。

誉められてるのかなんなのか解らないが、会話が弾むようになったので良しとした。

「先輩…！あの出店…、ゆで卵売ってますよ」

直斗が楽しそうに、ゆで卵を売っている出店に指をさした。
なんで、冬祭りの出店にゆで卵だ…、と笑いながら直斗と出店に向かった…。

一方、その頃…。

「おーら、花村ー！あのジャックフロスト人形取れー」

「ちよっ！今、集中してんだから黙れ！」

陽介、千枝は楽しそうに射撃をしている。

「あーっ、クマー！なんで、あたしのプロマイドじゃなくて、若き日の柳 慎吾のプロマイド買うのよー！」

「アバヨ！クマー」

りせ、クマも楽しそうだ。

みんな楽しそうにしているようだ…。

が…、なぜか、ざわついている2人組が居た…。

「
…」

完二、雪子ペアである…。

何故か、この2人は会話が弾まないでいる…。

完二は直斗が気になっているようで、雪子もなにかが気になっているようだ…。

「おっ、おみくじ引こうか!? かつ、完二君!」
「あっ、おおーッス…!」

2人は空気を変えようと、さつき自分達が引いたおみくじをやるうとしている…。

雪子、完二がおみくじを引いた。

「あっ…、天城先輩はなんでしたか…?」
「はい…」

雪子は自分の引いた『凶』と書かれたくじを完二に見せた…。

「うわっ…」

完二はリアクションに困っている…。

「かつ、完二君は…」

完二は雪子にくじを渡した。

「うわっ…」

『凶』と書かれている…。

雪子は自分のくじに書かれた文章を読んだ。

「数秒後くらいに、あなたは大切な何かを失います…。とにかく、冷静な判断をしてください」

完二も自分のくじに書かれた文章を読んだ。

「数秒後くらいに、あなたは現実を知ります…。とにかく、冷静に受け止める努力をしてください」

2人共、沈黙した…。
すると、完二が…。

「あっ！」

「どうしたの？」

「先輩と、直斗だ！」

ゆで卵屋に居る自分と直斗を見つけた。

「あっ、ちょっと、あの2人と合流しようか！完二君！」

「そつ、そーツスね！あの2人、無口だから会話弾んでなさそうですし！」

さつきほどからの気まずさを払拭するために、雪子、完二は自分達に駆け寄った。
すると…。

自分は『キミが好きだ』と直斗に言った。

!?

雪子、完二の顔が固まった。
直斗も…。

「僕もです」

と答えた。

雪子、完二は固まった。

さらに、自分は『ほどよく柔らかいから好きだな』と言った。

「柔らかいって!?!?ほどよく柔らかいってなに!?!?完二君!?!」

「落ち着いてください!天城先輩!?!」

雪子は完二の襟首を握った。

「僕の場合は…、『熱してすぐさましたあと』が程よくて好きです
…」

と直斗が言った。

完二が泣きながら、雪子の両肩を握った。

「天城先輩!熱して醒ますってなんツスカ!?!熱くしといて、醒ますってなんスカ!?!醒めるもんなんですか!?!人って醒めちゃうもんなんですか!?!」

「おつ、落ち着いて！完二君！なんか訳がわかるようで、訳がわからないから！！というか、なんか訳が解らないのに、なんか嫌な言い方だから！！」

二人はかなり暴走している。

そして…。

とりあえず、自分は本当にキミが好きだと言った。

直斗も頷いた。

！？

「しっ、信じてたのに！！」

「あつ、天城先輩！！待ってください！！！！一人にしないで！俺、泣いちゃうから、一人にしないで！！」

雪子、完二は泣きながら冬祭り会場から出て行った。

そして…。

「いやー、美味しいですね…、ゆで卵…」

直斗が塩をかけながら、ゆで卵を食べている。

自分は程よく半熟になっている黄身に塩をかけた。

「鍋に水と一緒に卵を入れ、火を点け、鍋が沸騰してから、そのまま七分ぐらい放置したあと、すぐに卵を氷などで冷ますと程よい半熟になりますよ。つまり、熱してすぐ冷ますのが、美味しいゆで卵の条件ですね」

なるほど…、と頷いた。

やはり、ゆで卵は白身より『黄身』が好きだと思いつながら食べた。

数時間後…。

陽介と千枝、リセとクマと合流した。

千枝はジャックフロスト人形を抱えて、ビフテキ串を食べている。

「いやー、花村と一緒にだったけど、なんだかんだで楽しかったー」

「一言余計だよ…。ていうか、今日オメー、どんだけ肉食った!？」

クマが柳 慎吾の若き日のプロマイドを嬉しそうに見ている。

「なんで…、そんなに嬉しそうなのよ…」

「うほほーい！アバヨ、クマー!！」

どうやら、みんな、なんだかんだで楽しく過ごせたようだ。
すると、直斗が…。

「先輩…、今日は本当に楽しかったです…」

と顔を赤くして言った。

「また…、その…、ゆで卵、一緒に食べましょうね…」

ああ…、と頷いた。

「あれ？完二に天城は？」

「本当だ、雪子居ないねー」

陽介、千枝が完二、雪子が居ないことに気付いた。
そう言えば、どこに行ったのだろう…。

川原

冬の川原を見つめながら、雪子が体育座りで塞ぎ込んでいる…。

「男の子ってわからないね…」

と雪子が呟いた…。

それを聞きながら、完二は川原に石を投げた。

「女の人もわからないツスよ…」

雪子と完二の絆が深まった。

直斗編（後書き）

今回の話は、順番的に前に掲載されてある『里中千枝探検隊』より時間的に前で書きました…。投稿しようとした時、順番を逆にした方が良くないかな…、との判断から、今の順番になりました…。ですが、読み返してみると『直斗編』のゼータガンダムネタがくだいなー、と思いました…。しかし、投稿してから順番修正するのもしかなー、と思い…。そのままにします…。すいません…。あと、全体的にガンダムネタがくどくてすみません…。

とりあえず、人に迷惑かけなきゃあいいと思うよ編（前書き）

直斗は街並みな言い方ですが、途中まで　　だったとは気付きました
んでした…。いや、本当に…。しかし、設定資料に書かれてました
が、ウエスト回りで気付いた人も居たとか…。すごいなあ…。

とりあえず、人に迷惑かけなきゃあいいと思うよ編

2011年某月某日(日) 雨

ジュネスフードコート。

テントの下で、陽介、完二、クマが集まった…。みんな、顔がどんよりしている…。

「雨やまねえな…」

「ああ…、やまないツスね…」

「みんなは病んでるのに、雨はやまないクマね…」

クマが上手いことを言っているのに、みんなどんよりしている…。1週間以上も雨だったので無理もない…。すると…、陽介が自分に顔を向けた。

「そついや、相棒…。今日はどうすんだよ？マヨナカテレビには誰も映らないから探索する必要もないし…。ていうか、今日に限って女性陣は全員休みかよ…」

陽介がため息をついた。

実は言っと、寂しいからみんなを集めた…、告げた。

「それが理由かい…」

陽介のツツコミも切れが悪い…。

「にしても…、野郎だらけだと…、こんなにもむさ苦しいんですね…」

完二はボソツと言った。

「あー、完二…、言っちゃった…。俺が我慢してたこと…、言っちゃったー」

「すみません…」

「普通に謝んなよ…」

…。

どうにも会話が弾まない上、なんか重苦しい空気だ…。
なんとかして、会話を弾ませよう…。

それに、今日は女性陣が居ないので、気兼ねなくいろんな話題が切り出せる…。

「ん…、センサー、どうしたクマか…」

クマが自分を見つめた。

みんなに…、好きなアイドルマスターのキャラクターは誰だと聞いた。

いつもは女性陣が居るから聞けなかったが、今なら聞ける…。

「伊織かな…」

「千早クマー」

陽介、クマが答えた。

だが、完二は…。

「アイドルマスターってなんスか…」

…。
会話が終了した…。

「いや、アイドルマスターってなんスか!?マジで!?!」

完二が必死だが終わった会話に、もう始まりなどない…。
仕方なく、また違う話題に切り替えた…。
みんなに、好きなガンダム作品はなんだと聞いた。
少しだけ、みんなの表情が明るくなった。

「おおーっ!やっぱり、ファーストだろ!」

「クマも、クマもー!ファーストクマー!」

と陽介、クマがはしゃいだ。
だが…。

「いや、男は黙ってGガンダムでしょう…」

と完二が言った。

陽介、クマの表情が固まった。

「なに言ってるんだよ…。あんなのガンダムじゃねえよ…」

「そうクマー。ドラゴンの形したガンダムとかありえないクマー!」

だが…。

「なに言ってるんスか!?Gガンほど、男のロマンが詰まった作品はないッスよ!」

完二がヒートアップした。なにか、思い入れがあるのだろうか…。

「ガンダムがプロレスてのがナンセンスなんだよ！」

「逆襲のシャアでも、プロレスやってたじゃないスか!!」

「あれは、あれでいいんだよ!! 大体、ノーベルガンダム、マーメイドガンダムとかなんなんだよ!! あれは失笑もんだろ！」

「言ったな!! あんた、言ったな!!」

「やめるクマー!! 2人とも、喧嘩やめれ!!」

陽介と完二が揉め始めた。

二人に落ち着けと言った。

「っ…、わったよ!!」

「すみません…」

陽介、完二が黙った。

自分は、やっぱりターンエーが一番だろ、と言った。

勇気が高まった。

寛容力が高まった。

伝達力が高まった。

「一番ねえよ!!」

と陽介、完二が叫んだ。

その言葉にカチン!と来た。

てめえら、ヒゲガンダム舐めんな!!と、2人の襟首を握って叫んだ。

「センサー! やめれ!!」

クマが自分を抑えた…。

「
…」

場は落ち着いたが、気まずい空気が、更に気まずくなった。
どうしよう…。

…。
とりあえず、また話題を切り替えることにした…。
今日のプ キュア見たか？と聞いた。

「見るわけねえよ…、何歳だよ…、俺ら…」
「そうッスよ…」

「さすがにそれはないクマ…」

みんな否定的な意見を出した。

ドン！とテーブルを叩いた。

みんな、ビツクリしている。

お前ら、いいかげんしろ！と叫んだ。

「えっ！いきなり、スイッチ入るなよ！」

「ちよつと、先輩…！どうかしたんスか！」

「今日のセンサー、怖いクマー！」

どうかしてるのは、お前らだ！！

さつきから、梅雨のせいかなんだか知らないが、アイマスは知らない…、ファースト以外は認めないだの、Gガンは素晴らしいだの、ヒゲは認めないだの…、プ キュアを見てないだの…、お前達は何故わかりあえない！と論じた。

「いや、待てよ…、相棒…」

「だって、DATEやってらんないじゃんもない！
そりゃあ、人によつての好き嫌いはあるだろう…。」

「だが、それで他人の好みや趣味を否定するのは良くない！他人の好みや趣味を受け入れて認めてこそ、真のオタクではないのか！？」と論じた。

「いや、意味わかんないから…」

「ていうか、俺ら、別にオタクじゃねえッスよ…」

陽介、完二はまだ否定的だ…。
だが…。

「センサーの言うとおりだクマ！」

！？

クマが目を輝かせて叫んだ。

「クマ…、お前！？」

「ヨースケもカンジも、最近、梅雨続きで憂鬱になってるとはいえ、他人を否定するのは良くないクマ！！」

「いや…、だから、俺らは…、そんなつもりじゃなくな…」

陽介は引き気味だが…。

「しかし…、先輩やクマの言うとおりかもしれないッスね…」

「完二！？お前、空気に流されてねえか！？」

完二も自分の意見に同意した。

「いや、花村先輩…。他人の認められない部分を否定するってのは…、裏を返せば自分を否定するってことに繋がりませんか…?」
「…!?!?」

陽介がなにかに気付いた…。

「他人を否定することは…、自分を否定するか…」

「そうツスよ…。先輩の言ってること、なんだかわかる気がするツス…」

「そうクマ!みんな、素直になるクマよ!」

みんな、なにかに気付き始めたようだ…。

そして、自分は立ち上がった。

他人の趣味を認めることは、自分を認めることに繋がる!よし!みんな、今から、正しいオタク知識をレクチャーしてやる!と言って、みんなをとある場所へ連れていく事にした…。

ちょうどよく、外は晴れてきた…。

3日後 晴れ

放課後。

千枝が背伸びをしている。

「いやー、最近は天気が良くていいねー」

「だけど、彼と花村君…、こないだから学校に来てないね…」

と雪子が自分と陽介の席を見て言った。
千枝が顔をしかめた。

「たっ、確かに…。完二君も来てないらしいし…。クマ君もジユネ
スで見ないし…」

自分たちが居なくなったのを、みんな心配しているようだ…。
なので、千枝、雪子、りせ、直斗がジユネフードコートに集ま
った。

「男共が消えたのは、なんでかしらね…」

千枝が首を傾げる。

「男の子達全員、警察に捕まったとか？」

「雪子…。さらっと、怖いこと言わないですよ…」

すると、りせが顔を強ばらせた…。

「まさか…。先輩達！変な女達に騙されたりして…!!」

！？

みんなが静まり返った。

千枝が苦笑いをした…。

「いつ、いや…。まっ、まさか…。あいつらバカだけど…。さっ、
さすがに…」

「いや、里中先輩…。案外、否定できませんよ…。都会辺りでの『
つつもたせ』はよくあります…」

と直斗が俯いて言った。

「つ、つつもたせ!？」

「嘘!？」

千枝、りせが驚いた。

雪子が立ち上がったって驚いた。

「つつもたせつて、あの運動会とか、マラソン大会でやる…、あのつつもたせ!？なんで、あれで学校来なくなるわけ!？」

「それ、バトンリレーだから!!確かに、筒持たせてるけど、それバトンリレーだから!!」

雪子は、何故か、運動会を思い浮べている。つつもたせ を知らないらしい…。

女性が男の人を色仕掛けで騙し、あとで仲間の怖そうな男を使って、騙した相手を脅すことである。

「じゃあ…、先輩達…、まさか…」

りせが不安げになっている…。

直斗は立ち上がった…。

「とにかく、警察に行った方が…」

すると…。

「やあ、レディのみなさん…、お揃いで…」

!?

千枝、雪子、りせ、直斗がその声に振り向いた。

「この声は、クマくん!? ちょっと、今までなにやってたのよ!？」

と千枝が叫んだ。

だが…。

「くっ、くくく…」

「ふひっ、ふひっ…」

「くくく…、クマ…」

振り向くと、素肌に袖のないジャンパーを着たサングラスの陽介に、リュックを背負い『百式』と書かれたシャツに眼鏡をかけ、手にはカメラを持った完二に、何故か、女子高生の制服を着たクマの姿があった。

「…」 「本当に、なにやってたの!？」 「…」

千枝、雪子、りせ、直斗が満場一致で叫んだ。

すると、陽介がサングラスを外して千枝に近寄った。

「いやー、なんでもないでござるよ…、里中氏」

「里中氏!?! ござる!?!」

千枝が驚いている。

完二が、持っているカメラでりせを撮り始めた。

「ちよっ! 完二、なにやってんの!?!」

「久慈川氏! 動かないでくれでござる…! 今、久慈川氏のプロマイ

ドはプレミアがついてて、中野で高く売れるでござるよ…」
「えっ！？なに言ってるの！？完一！中野！？」

雪子がクマの着ている制服をペタペタ触っている。

「これ、どこの高校の制服？」

「アッシュフォード学園高等部の女子の制服クマよ」

「どっ…？」

直斗が唾然となっている…。

「なっ、なにがあった…。見ないうちになにが…」

すると…。

くくく…、と笑いながら、自分が直斗の後ろに現れた。

「その声は先輩！！」

直斗が振り向くと、左頬にマジックで十字傷が書かれ、赤い着物を着て刀を携えている自分の姿があった。

「て、うわあああ！！抜刀齋！！」

直斗が驚いていた。

どうしたでござる…、直斗殿？と聞いた。

「どうしたでござる…、じゃないわよ！？」

千枝が自分に迫った。

「せつ、先輩…、カツ」いい…」

りせ、直斗は顔を赤くして着物の侍姿の自分を見つめている…。
雪子は自分を見つめて、なにかを考えている…。

「あいつら、なにがあったのよ!？」

千枝は、ガン ム〇〇のネーナのフィギュアを眺めている陽介と、カメラを磨いている完二に、ポーズを決めているクマに指をさした。
秋 原と中野に連れていっただけでござると、千枝に話した。

「それだけで!？」

うん、それだけでござると答えた。
環境は人を変えるからね、と言った。

「変わりすぎだろうが!！」

千枝が叫ぶ。

だが、陽介、完二、クマが凄いイキイキしてるじゃないかと答えた。
た。

「いや…、しかし…、これは…」

すると、陽介が…。

「おつ、長!来ていたでござるか!？」

と自分に駆け寄った。

すると、完二やクマも駆け寄った。

「長！今日のる 剣のコスプレ似合ってるでござるね！」
「センサー！次は、志久雄さんに挑戦するクマー！！！」

千枝、雪子、りせ、直斗が啞然となっている。

よし！今から、このオタク文化を広めるため、今から八十稲葉市を巡回するぞ！！と叫んだ。

「了解！！！」

「どこまで着いてきますよ！長！」

「イエス！ユア・マジエスティ、クマ！」

陽介、完二、クマが手を挙げて応じた。

そして、自分、陽介、完二、クマが雄叫びを挙げて市内巡回した
…。

「…」
「…」
「…」
「…」

千枝、雪子、りせ、直斗は固まっている。

そして、自分たちは市内を徘徊した…。

「なに…、あれ…」

「きもっ…！」

市内の女子高生から、指をさされて笑われた…。
というか、いろんな人々から指をさされて笑われた…。

「ママー！」

「見ちゃダメよ…！」

「なんじゃ、アレは!?!」

「ウホ…」

「なにあれー!?!」

いろんな方々から嫌な視線を受け取った…。

「…」

「…」

「…」

陽介、完二、クマの顔色が変わった…。

そして…。

「なにやってんだろ…、俺たち…」

「クマ…」

みんなが満場一致で言った…。

翌日 晴れ

昼休み

陽介、千枝、完二、りせ、直斗が屋上でたむろしている。
正気に戻った、陽介、完二が制服着て背伸びをした…。

「まったく…、元に戻れて良かったぜ…」

「まったくツスよ…、にしても、結構、楽しかったツスけどね…」
「認めたくないが…、ああ、確かに…」

そう陽介、完二が言っていると…。

「お前ら…!」

千枝が叫んだ。

「なんだよ!ビックリさせんな!」

「勘弁してくださいよ!里中先輩!」

すると…、千枝が顔を二人から反らして…。

「心配したんだからね…」

!!!

千枝の言葉に、陽介、完二がハッ…、となった。

すると、直斗も…。

「まったくですよ…。誰かに騙されたりしてたんじゃないかと…、
本当に心配してたんですからね…」

と顔を赤くして言った。

すると、陽介、完二が…。

「あつ…、そつ、その…、心配させて悪かったよ…。里中…」
「すまなかつたよ…、直斗…」

と二人に頭を下げた。

「わかればいいのよ…」

「そうですね…」

と千枝、直斗が言つと…。

「あつ、千枝先輩に、直斗、顔が真っ赤になつてるー!!」

と、りせが2人をからかった。

「ちつ、違うー!!花村達なんかを、誰が心配するか!!」

「そ、そうですね!」

「あつ、花村先輩や完二も顔赤くなつてるー!!」

「うおい!りせ、赤くなつてねえよ、バカ!!」

「ちよつ!違うかな!マジ違うかな!」

と、屋上で彼らは甘酸っぱく騒いでいた…。

一方、その頃…。

教室でいつも通りに制服を着て弁当を食べていると…。

!?

雪子が着物を着て、自分の目の前に現れた…。

「…」

…。

なにか用か？と聞いた。

「えっ、えっと…、その…。ううん！なんでもないから！！」

そう…、と言った。

…。

「…」

雪子に着替えたら？と言った。

「えっ…！うっ、うん…」

妙な空気が流れた…。

とりあえず、人に迷惑かけなきゃあいいと思うよ編（後書き）

元ネタ「銀魂、トッシー編」

シャドウ出現場所に立て札を立てておけ！！番長出現注意と！！編（ネタバレキ

今回の話はネタバレが含まれていますので、『ガソリンスタンドの店員』と言われてピン！と来なかった場合は今回の話を飛ばしてください。

シャドウ出現場所に立て札を立てておけ！！番長出現注意と！！編（ネタバレキ

2011年4月11日（月） 曇り

午後

八十稲葉に到着してすぐ、堂島の車に乗り、ガソリンスタンドに降りた。

堂島と菜々子が車から離れると、ガソリンスタンドの店員が自分に近づいてきた。

他愛のない話をした…。

「ここバイト募集中だから、考えてみてよ」

ガソリンスタンドの店員が自分に握手を求めた。

…。

右手を差し出し、ガソリンスタンドの店員と握手をした。

！？

身体になにか衝撃を感じた。

「おっと、仕事…、仕事…」

ガソリンスタンドの店員が自分から離れると、急に気分が悪くなってきた…。

どうしたのだ…。

「菜々子が自分に近づいた。」

「どうしたの？車酔い？」
「ふふ…」

異変を感じている自分を見て、ガソリンスタンドの店員は静かに笑っている…。
そして…。

「!？」

ガソリンスタンドの店員は右手に違和感を感じた…。
そして、ガソリンスタンドの店員は自らの右手を見た。

ガムがついていた。

(あのガキイイイー!!!)

ガソリンスタンドの店員は、自分がつけたガムを握り締め、影から自分を睨んだ。

2011年7月某日(月) 雨

放課後

傘を差して商店街を歩いてると、ガソリンスタンドにあのときの店員が居た。

「いやあ…、久しぶりだね…」

何故か、ちよつと怒っている。

軽く頭を下げて去ろうとすると…。

「待ちなよ…。ねえ…、ここ、また人手不足になったんだよね…。だから、またバイト募集してるから…、考えてみてよ…」

といいガソリンスタンドの店員が自分に右手を差し出した。

…。

右手を差し出し、ガソリンスタンドの店員と握手をした。

!?!?

右手に違和感を感じた。

「じゃあね…」

ガソリンスタンドの店員が自分から離れた…。

ぐっ…、なんてことだ…。

自分の右手を見つめると、手には画ビヨウが刺さっている…。

さっきのガソリンスタンドの店員にやられた…。

「ふふ…」

ガソリンスタンドの店員がしてやったりな顔をして、影から自分を見ていると…。

「!?!」

ガソリンスタンドの店員は右手に違和感を感じた。

そして、ガソリンスタンドの店員は自らの右手を見た…。

ウニが刺さっている。

（あのガキイイイー!!! 『セクシーコマンド外伝すごいよ！マサルさん』と同じ真似しやがって！っていうか、なんでウニ持ち歩いてんだよ!?!）

ガソリンスタンドの店員はすざましい形相で、影から自分を睨んだ。

2011年10月某日(月) 雨

放課後

傘を差して商店街を歩いてると、またあのガソリンスタンドの店員が目の前に現れた。

「いやあ…、久しぶりだね…。本当に、久しぶりだね…」

何故か、額の血管をピクピクさせながら、自分を睨んでいる…。自分、これから菜々子と紅茶タイムするから帰ります…、と言った。

「待てよ…。いや、待ちなよ…。ねえ…。ここ、またまた人手不足になったんだよね…。だから、またまたバイト募集してるから…。またまた考えてみてよ…」

こないだも、バイト募集中とか言ってる、全然、募集してなかったじゃないですか…。からかうのもいい加減にしてください…。と言った。

「今度ばかりは本当だから！！ねっ、ねえ、考えてみてよ！！」

と凄く必死なガソリンスタンドの店員が自分に右手を差し出した。
…。

仕方なく右手を差し出し、ガソリンスタンドの店員と握手をした。

!?

右手に違和感を感じた。

「じゃあね…」

ガソリンスタンドの店員が自分から離れた…。

ぐっ…、なんてことだ…。

自分の右手を見つめると、手には果物の王様、ドリアンが刺さっている…。

おっ、重い…。

さっきのガソリンスタンドの店員の仕業か…。

「ふふ…」

ガソリンスタンドの店員がしてやったりな顔をして、影から自分を見ていると…。

「!?!」

ガソリンスタンドの店員は右手に違和感を感じた。

そして、ガソリンスタンドの店員は自らの右手を見た…。

今日の朝、築地に運ばれたばかりのカジキマグロが突き刺さっている。

(あのガキイイイー!!!嫌がらせとかいうレベルじゃねえええー!というか、さっきの握手の際にどうやって突き刺した!?すげえけど、むかつく!むかつくけど、すげえ!!!)

流血する右手を握りながら、ガソリンスタンドの店員が自分を見つめた。

!?

目があった瞬間、自分はガソリンスタンドの店員にバカ…と言いついて残して帰宅した。

「どちくしょう!」

ガソリンスタンドの店員は泣きながら、カジキマグロを投げ捨てた。

カジキマグロは、このあと、ガソリンスタンドの店員が美味しく
頂きました。

以下、ネタバレあり

バッドエンディング、ノーマルエンディング以外のエンディング
の存在を知らない方、知ってるけどまだ見てない方は、ここから先
は進まないことをオススメします…。

2012年3月20日(月) 雨

昼間

なんと、ガソリンスタンドの店員はすべての元凶である『イザナミ』であった!?

「まさか…、ここまで辿り着くとはね…」

そうか、初めて会ったときに感じた異変とは、こいつの仕業だったのか!?

今までの経緯（原作ゲーム参照）を考えると怒りが湧いた。お前だけは許さない!とイザナミに叫んだ。

「こつちだつて、許さねえよ!」

!?

イザナミがスゴい形相でキレた。

「握手の際に、ガムつけるわ!ウニ刺すわ!挙げ句の果て、カジキマグロを右手に刺すわ!てめえ、マジ許さねえかな!」

…。

なんとなく、イザナミの右膝を蹴った。

勇気が高まった。

「ぐあ!」

イザナミは倒けた。

「てめえ…、マジ許さねえかな!ぜつてえ、許さねえかな!」

イザナミは涙目で、自分を睨んでいる…。

…。

明日は、都会に帰らなければならないので…、今日はもう帰ることにした…。

シャドウ出現場所に立て札を立てておけ！！番長出現注意と！！編（ネタバレキ

今ファンフィクション作品が先月でPV数200000アクセス突破になりました。評価、コメントのメッセージを送ってくれた方々、閲覧してくれた読者の方々、本当にありがとうございます。今後とも、よろしくお願い致します。

思春期番長編

2011年某月某日（土） 晴れ

夜

自室の前に、菜々子が現れた。

「お兄ちゃんー」

菜々子が自分の部屋のドアを開けた…。
すると…。

「えっ！？お兄ちゃん、なにやってるの！？」

菜々子は大きく目を見開いてビックリした。

！？

自分は心臓が停まるかと思ったくらいに衝撃を受けた…。
今…、自分は一人部屋に籠もってビデオを見ながら…。

「お父さん！お父さん！お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃん！？」

なんとということだ…。

菜々子に見られてしまった…。

自分が部屋に籠もって、一人でビデオを見ながら…、バイクの修理をしているのを…。

しばらくすると、部屋に堂島が来た…。

そして、二人でソファーに座った…。

「ハハハ…、そうだよな…。お前ぐらいの年頃なら…、そりゃあ…、
してしまうよな…」

堂島は苦い顔をして笑っている…。

「ん…、菜々子にはまだ早いよな…。こついう話は…」

堂島は自分の部屋にあるバイクと、整備について詳しく解説して
いるマニュアルビデオを見ながら呟く。

「なあ…、他にも隠してるのか…」

うん、と首を縦に振り、布団の下から『ゼファー750』の整備
マニュアルを取り出し、堂島に渡した…。

堂島がマニュアルを開いた…。

「おい…、こりゃあ…、随分、マニアックだな…」

堂島は顔を赤くした。

そして…。

「ハハハ…。こんなこと、菜々子には言えないがな…。そついや、
俺もな…、お前ぐらいの年頃に…、その…」

堂島は照れている。

自分と同じようにバイクをいじってたのか？と聞いた。

「おいおい！ストリートに言うなよ！！」

堂島は照れながら笑った。

「ハハハ…、なんだかんだ言っても、お前も男の子だしな…。これくらい…、やって当たり前なのかもな…」

堂島は優しげに自分に語り掛けている…。

堂島との仲が少しだけ深まった…。

「ただし、ほどほどにな」

うん、と頷いた。

すると、菜々子が部屋に現れた。

「お兄ちゃん…、さっきはごめんなさい…」

どうやら、さっき、勝手に部屋のドアを開けたことに対して謝りに来たようだ…。

全然、気にしてない…、と言った。

寛容力が高まった。

「へへっ、お兄ちゃん！一緒にプリン食べよう」

と菜々子に手を引く張られた。

「あっ、おい！手を洗ってから食べよ！」

堂島が焦りながら言う。

はいー、と返事した。

そして、自分と菜々子は下に降りて行った…。

「ふー」

堂島は自分の部屋のソファーにもたれ、バイクを見つめた…。

（どろちゃって、バイクを二階まで持って来たんだ…）

思春期番長編（後書き）

元ネタ「こっつええ感じ 思春期」

フタリの記憶編（前書き）

今回の話は、いつものことですが解る人にしか解りません…。

フタリの記憶編

2011年某月某日（金） 晴れ

放課後

男子トイレで手を洗った。

コスモスー、コスモスー、飛び出してゆくー、無限と空の彼方ー、と鼻歌を歌った…。

…。
自分は周囲を見渡した…。

誰も居ないようだ…。

…。
なんか、レーションが上がってきた。

なので、もっと自分をさらけ出して鼻歌を歌うことにした。

コスモスー、コスモスー、もう止まれないー、イメージを塗り替えてー、ゆらりー、ふわりー、と声を大きくして歌った。

花の…、と歌おうとした瞬間…。

ガチャツ…！

「さつきから、誰だよ！！大声でアイマスの曲を歌ってんのはっ！廊下に響いてんだよ！！言っとくが、雪歩と伊織は俺の…」

陽介が大声で叫びながら入ってきた…。

「よっ…、め…」

陽介と目が合った…。

自分をフルスロットルにして歌っているところを、陽介に見られた…。

「あつ…、相棒…」

…。

沈黙の空気が流れる。

陽介と目が逸らせなかった…。
すると…、陽介は…。

「目と目が遭う瞬間…、好きだと気づいた…」

!?

なんと、陽介は歌い始めた…。

これは千早の曲『目と目と遭う瞬間』だ！

「あなたは今、どんな気持ちで居るの…。」

戻れない二人だとわかっているけど…、少しだけこのまま瞳逸らさないで…、と自分も歌った…。

…。

陽介との絆がかなり深まった…。

このあと、トイレで5時間ぐらい陽介と見つめ遭った…。

超級霸王編

2011年某月某日(金) 曇り

放課後

テレビの中。

今日は、探索に行くことになった。

「むっ…」

「むむっ…、クマ！」

テレビの中では完二とクマが向かい合っている…。

みんなは、二人を黙って見ている。

そして、自分は右手側に完二、左手側にクマとなるよう間に立ち、右手に赤い旗、左手に白い旗を持ち…、はじめい！！と叫んだ。

！！

「セツタブ！！エックスー！！！」

完二は腕をクロスし足を一步出し叫んだ。

自分は右手の赤い旗を挙げ、完二、ファーストアタックライドポイント50000点と叫んだ。

クマは、くっ…と唸った。

(カンジ、なかなかやるクマね！！)

すると、クマは両手を広げ…。

「アマゾン！！！」

と叫んだ。

自分は左手の白い旗を挙げ、クマ、アタックライドポイント1点と叫んだ。

！！

しかし、クマは口元を歪ませる。

(くく…、これはフェイククマ…)

すると、クマは…。

「怪人十面鬼！！！」

と叫びながら、床に座りストレッチを始めた。

！！

完二は焦った。

(クマ！！まさか、こんなコンボを！！)

クマは笑った。

自分は左手の白い旗を挙げ、クマ、アタックライドポイント60000点と叫んだ。

すると…。

(はは…、クマ吉…、そのコンボ…。確かに脅威ではあるが…、早まったな！！！！)

完二は指を軽く曲げ膝も曲げた。

クマは驚いた。

（まさか、カンジ！ここで、あの技をやるクマか！！しかし、まだ『ブラック・RX・バイオ・ロボで南光太郎がいつぱい』をやるのにルール上、『クライシス帝国全否定』か『マグロ泥棒もゴルゴムの仕業』をしなければならぬクマ！！つまり、あれはただのフェイク…）

！！！！

クマはなにかに気づいた。

（しまった！さっき、カンジがした『セッrap！エックスー！』はすべてを無効化し、ルールの一部を改善するクマ！！くっ！！）

クマは頭を抱えた。

そして、完二は…。

「ブラック・RX・バイオ・ロボで南光太郎がいつぱい！」

と叫びながら屈伸運動をした。

自分は右手の赤い旗を挙げ、完二、ファイナルフォームアタックライドポイント5点と叫んだ。

！？

完二、クマは驚いた。

「なんでですか！！」

完二は自分に抗議をした。

そして、自分はブラックサタンと一文字書かれたカードを完二に渡した。

これを見て、完二は頭を抱えた。

「しまった…、エックスとブラックに接点はなかった！…くっ！負けた！！」

と言つて、床に塞ぎ込んだ。

悔しそうに、完二は床を殴った。

クマは高笑いをした。

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」

この光景を見て、陽介、千枝、雪子、りせ、直斗は呆然としている…。

「ふうー、疲れたぜ…」

「いい汗かいたクマ…」

と完二、クマが汗を拭う。

すると…、完二、クマが自分に首を向けた…。

「あの…、先輩…」

「あの…、センサー…」

二人がなにか聞いたそうにしている…。
なんだ？と言った。

「これ…、なんツスか…」
「クマも聞きたいクマ…」

と完二、クマが言った。

陽介が倒れた。

そう聞かれ、考える…と言いつつ残して探索に向かった…。

實際なんだろ…、これ…。

超級霸王編（後書き）

元ネタ「仮面ライダーカードバトル ガンバライド」、
「ごっつええ感じ 青年事業団」

雨降って地固まる編

2011年某月某日(月) 晴れ

朝

「里中……」

陽介が千枝の前に立った。

「なに……朝から……」

「こないだ、俺、お前にCD貸したよな……。五枚組のコンピレーションアルバム……。昨日、部屋片付けたら、一枚だけなくなってる思い出したんだよ……」

陽介の言葉に、千枝の顔が固まった。

「やばっ……」

千枝は顔を陽介から反らした。

「やばっ……、ってなんだよ!?まさか、おまつ……、なくしたの!?!」
「あっ、明日、ちゃんと返すから!!!ハハハ……」

と千枝は笑って誤魔化した……。

翌日の朝 (火) 雨

朝

千枝が陽介に頭を下げた。

「ごめん…。なくしちゃった…」

「どうやら、千枝は陽介から借りたCDを無くしてしまったらしい…。」

「ふざけんなよ！てめっ！マジで無くしたのかよ！」

「ごめん、見つからなかった…」

「ちゃんと探せ！ああ…。つたくよ…。アレ、くそ高かったんだぞ！限定版で、ん万円したんだぞ！」

陽介に、まあまあ…。と言ったが、とてもじゃないが収まりがつかないようだ…。

「なによ…。！花村だって！あたしの『聖龍伝説』壊して、まだ弁償してないくせに…！」

とうとう千枝まで怒り出した…。

「それとこれは関係ねえだろ…！」

「なに、自分のことないがしろにしてんのよ！最低…！」

かなり険悪になっている…。

どうも、自分が入り込む余地が無い…。

そっとしてお…。

陽介、千枝の仲が険悪になってから数日後の某月某日 雨

昼休み

廊下を歩いていると…。

…!?

りせが目の前に現れた。

「先輩」

どうかしたのか？と聞くと…。

「実はね、昨日、ジュネスに行ったら、ジュネスの近くにあるファミレスを通ったら、そこで千枝先輩がバイトしてたよ」

！

なんと、千枝がファミレスでバイトをしているそうだ。

「ねえねえ！今日、一緒に千枝先輩を見に行こうよ！」

と誘われたので、今日の放課後、千枝のバイト先にりせと行くことにした。

放課後

ジュネス近くのファミレスの一席に、りせと座った。

…。

「ラッシャセ…、って!?!うわっ!」

…。

どこで見たような顔のウェ이터さんが席に来た…。

確か、ガソリンスタンドあたりで見たような…。

りせが自分の顔を見た

「先輩の知ってる人？」

すると…、ウェ이터さんが…。

「確か、4月あたりにガソリンスタンドで逢ったよね…」

やはり、ガソリンスタンドの店員さんのようだ…。

ガソリンスタンド以外にも、バイトしてるなんて大変ですね…、
と言った。

「いつ、いやあ…、気にしないで…」

ガソリンスタンドの店員は、なぜか焦っている…。

りせはメニュー表を広げた。

「先輩、なに頼む?あたし、パフェ」

とりあえず、「コーヒーと言って、ガソリンスタンドの店員に言っ
た。」

「どっ、どっも…」

なぜか、凄い気まずそうにガソリンスタンドの店員は去って行った。

「なんか、凄い挙動不審だったね…、さっきの人…。先輩見たら、凄い挙動不審になったよね…」

なにか自分に挙動不審になるようなことでもしたのかな…、と自分は言った。

しばらく、店内を見渡したが千枝の姿は見えない。

「いないねー」

すると…。

「お待たせしましたー！パフェにコーヒーで…、うわっ！」

！？

ウェイトレス姿の千枝が、パフェとコーヒーを持って現れた。

「あっ、千枝先輩ー！」

「ちよっ！リーダーに、りせちゃん！どうして」

千枝は顔を赤くしながら、テーブルにパフェとコーヒーを置いた。千枝がアルバイトしているらしいから、せつかくなんで見に来たと言った。

すると…。

「ハハハ！そういうことなら、早く言ってよ！ビックリするじゃないー」

「ごめんなさいー、キャハ！」

千枝とりせは笑っている。

「それにしても、どうして、千枝先輩はアルバイトなんかしてるの？それに、花村先輩が居るからジュネスでアルバイトすればいいのに……」

とりせが聞くと、千枝は苦笑いをした。

「あつ…、ハハハ…、実は…、今、ちょっと…、お金が欲しくてね…。それに、ジュネスは…」
「えっ…？」

千枝の様子が妙だ…。
どうやら、なにかお金で困っているようだ…。
すると…。

「そうだ！リーダー！コーヒーだけじゃ足りないでしょう！オススメがあるんだけど！」

空気を変えようとしているのか、千枝が明るい口調で自分に目を向けた。

「じゃーん！フライドポテトぞよ！よし、今なら、特別に大盛りにしたげる！盛るぜー！盛るぜー！超、盛るぜえー！」

と千枝は握り拳で勧めてきた。

ああ…、じゃあ、それをもらおうか…、と言った。

「あは！まいどありー！」

と千枝は笑って、厨房の方に向かった。

…。

自分はコーヒーに入れるシュガースティックを手を取った。
りせが千枝の後ろ姿を見た…。

「なんか、千枝先輩…。お金に困ってるのかしら…」

ああ…。と頷きながらテーブルにある分のシュガースティック、
ミルクを全部コーヒーに入れた。

「本当に、どうしたのかしら…。千枝先輩…」

りせは自分にツツコミを入れてくれなかった。

…。

飲んだ…。

ぶはっ！！と吐いた。

「ぎゃっははははは！！」

！？

物凄く大きな声で話している客が居る。

周りの客が迷惑そうにしている…。

「マジかよ！おめえ、バカでえー」

「ギャハハハ！」

柄の悪い若い男二人が、大声で騒いで耳障りだ…。

「なにあれ…、うつさいな…」

と、りせはその席を睨んでいると…。

「あつ、あれ！」

「うそ！あれ、りせちーだ！」

迷惑な男性客二人が、りせに気付いた。

そういえば、りせは休業中とはいえアイドルだ…。

「あつ！やば…」

すると、柄の悪い二人の男がこちらに迫ってきた…。

「うそー、マジでりせちーじゃん！」

「本当に、ここに来てたんだー！！」

柄の悪い男二人は、りせを囲うようにした。

「マジ、りせちーだ！マジ、ばねええ！」

「すげえ！！なんで、休業したの！？」

「ねっ！今から、俺らとどっか行かない？ねえ、ねえ！」

柄の悪い二人組は、りせにお構い無しに迫る。

「人違いです…」

「またまたー、嘘ついちゃって！」

「やべー！写メ撮らして！」

りせは近づいてきた柄の悪い二人を見ないようにして、パフェを食べている。

自分も見ないフリをして、コーヒーを飲んだ。

うん、かなり甘い…。

すると…。

「お前、どけ！」

ドン！

なんと、自分がコーヒーを飲んでいる途中、いきなり柄の悪い二人組から席を追い出された。

バシャツ！とコーヒーが頭からかかった。

「せつ、先輩！！」

りせが自分を心配して立ち上がる。

「あんたら、先輩になにすんのよ！」

りせは柄の悪い二人組を睨んだ。

だが…、柄の悪い二人組の一人がりせの腕を乱暴に掴んだ。

「あんなのいいから…、俺らと一緒に遊ぼうぜ…」

「いや！離してよ！」

これはかなり最悪な状況だ…。

周囲の客たちは、自分たちを見ないふりをしている…。
すると…。

「ちょっと！あんたたち、なにやってんのよ！！」

千枝が、自分とりせの元に駆け寄ってきた。

「あつ、千枝先輩！」

千枝が柄の悪い二人組の目の前に立った。
そして、足を鳴らした。

「なんだ、お前？」

「ああん？」

と言い、柄の悪い二人組がりせから手を離し、千枝に迫った。
りせは自分に駆け寄った。

「大丈夫、先輩！？」

千枝は靴を鳴らしながら、柄の悪い二人組に…。

「ふん…。あんたらみたいな迷惑な客は…、顔面靴あとだらけの刑
よ！」

と言って、足を上げようとした瞬間…。

「やめないか！？里中君！」

！？

千枝の動きが止まった。
ファミレスの店長が現れた。

「あつ、て、店長！？」

「店で騒ぎを起こさないでくれ！」

「そつだ！そつだ！」

店長は千枝を止めた。

なぜか、ガソリンスタンドの店員も…。

「だって、店長！こいつら、あたしの友達に…」

千枝がそつ言つと…。

「そんなこといいから、早くお客様に謝りたまえ！！」

！！

なんと、店長は柄の悪い二人組がしたことを見ないフリをして、千枝に謝罪させようとしている。

「ちょっと！なにそれ！？千枝先輩は悪くないのに！」

りせは怒りで立ち上がった。

「でも、店長！？さっきから、こいつら迷惑行為ばっかしてて…、それに…」

千枝は反論するが…。

「いいから…、早く謝罪しなさい！クビにするよ！！」

！！

千枝はビクッ！となった。

「っ……」

千枝は歯を食い縛った。

クビと言われた瞬間……、千枝はうつむいた。

……。

この様子から、やはり千枝は……、どうしても金が必要ななにかがあるらしい……。

「そうだよ……、なんか知らねえけど、水差しやがって、この女……」
「早く、謝れよ！は、や、く……！」

柄の悪い二人組が拍車を掛ける……。

「そうだよ……、早く、謝れよ……」
「うるさいったら、ありゃしない……」

周囲の客がコソコソと話をしている。

「ちょっと……、なんなのよ……、これ」

りせが涙目になって、周囲を見つめた。

いつの間にか、千枝が悪者のような空気になっている……。

「っ……」

千枝は泣きそうになっている。

「泣いて済まされることじゃねえよ、ハハハ！」
「ったく、気分わりーよ！」

柄の悪い二人組がそう言った。

「早く、謝りたまえ！里中君！」

店長が千枝を責めた。

そして、周囲の客のざわめき…。

これらの空気が一重に千枝を襲う。
そして…。

！！

コーヒーを頭から被った自分が立ち上がった…。

「えっ、先輩…？」

「…、リーダー…？」

千枝、りせが自分を見つめる…。

自分は柄の悪い二人組の目の前に近づく。

「なんだ？こいつ…！」

「ああん！？」

柄の悪い二人が構えた。

だが…。

…。

自分は素通りした…。

「えっ!?!」

「…!?!」

千枝、りせは驚いた。

…。

自分はこの場から離れた…。

「…嘘、先輩…」

りせは、立ち去っていく自分の背中を見てショックで腰を落としました。

「…」

千枝もショックを受けている。

「なんだ、あいつ!」

「つまんねえな…」

柄の悪い二人組が床に唾を吐いた。

「里中君!なにをやっている!?!」

店長が千枝をまた責め立てる…。

すると…。

ぞっ!ぞっ!ぞっ!とすざましい足音がした…。

!?!?

その足音に、みんなが振り向くと…。

厨房から持って来た冷凍のカジキマグロー頭を携えて、自分が現れた。

千枝とりせ、店長、ガソリンスタンドの店員が嘩然となった。そして…、自分はカジキマグロー頭で素振りをはじめた。人一人殴り飛ばせそうなカジキマグローがあつて良かった…、と言つて、自分は柄の悪い二人組に狙いを定め、カジキマグローを振り上げた…。

ドガバキーン！！

！？

自分はカジキマグローで柄の悪い二人組の一人の顔面を殴った。

「ぎゃああああ…！」

柄の悪い二人組の一人は窓を突き破り、どこか遠くへ飛んで行った。

それを見て、柄の悪い二人組の片方が逃げ出そうとしたが、激昂状態の自分は容赦しなかった…。

カジキマグロを相手の足下に投げ転倒させた。

「ひいひいひい！！」

柄の悪い男はダウンした。

激昂状態の自分が柄の悪い男の前に立った…。

落ち着け…、と言いながら、いつもテレビの中でやっている戦闘シーンのアレをやって、柄の悪い男を本当の意味で落ち着かせた…。

「里中君…！なんだね！これは！？こんなこと…、許されないよ！！」

と店長が千枝を責め立てに迫った。

「あつ…、えつ！？」

すると、千枝はまた困った顔をした…。

「君はくっ、クビだあああああ！！！」

店長のその言葉を聞いた瞬間、千枝のなにかが弾けた。

ドカバキ！エンペラー！！

千枝は店長の顔面を靴あとだらけにした…。

「今まで、ありがとございました…。バイト代、ちゃんと振込めよ…」

靴あとだらけの店長を背にして、千枝は去った。

「うっ、うわあああん！先輩、怖かったー！！」

りせが自分に泣きついた。

自分は優しく泣き顔のりせを抱き締めながら、カジキマグロを拾った。

数時間後…。

自分は騒ぎを起こした張本人として、警察署に連れて行かれた…。取調室で、堂島から少し絞られた…。

自分はカジキマグロを抱きながら、堂島の説教を聞いた。

「里中千枝（店長の靴あとだらけの刑は不問になった）、久慈川りせが被害者ってことで正当防衛ってことにしてやったが、本当なら補導暦が付いてたんだぞ！」

かなり堂島が怒っている…。

「でも…、まあ…、お前は…、女の子泣かした奴が許せなかっただけだよ…、まあ、今回だけは…、許してやる…」

と言いながら、堂島は息を吐いた。

その堂島の優しさに、少しだけ絆が深まった。

自分はカジキマグロを背負いながら、警察署をあとにした。

翌日、昼休み 晴れ

屋上で、自分、千枝、りせが弁当を食べていた。
ちなみに、今日の自分の弁当はマグロ丼。

「千枝先輩…、ごめんなさい…、昨日、あたしが…」

「いやいや、いいのよ！りせちゃんは何も悪くないから！！前から、あのバイト先は問題があったし、ちょうど良かったわよ！それに、なんかスッキリしちゃった！」

と千枝は笑っている。

それでも、りせの顔は晴れない…。

「でも…、千枝先輩…。なんか凄く、必死にお金貯めてたみたいだったけど…」

りせがそう言う…。

千枝は顔を赤くした。

「あつ、あれは…！！大した理由で貯めてたんじゃないから！！ただ、ちょっと、お小遣いが欲しかっただけだから！！ハハハ！そうそう、『聖龍伝説』の新しいDVDが出てさー、それで足んなかったから…」

「そつ、そつなの…」

と千枝は見え見えの嘘を吐いている…。

自分はマグロ丼を食べながら、一体、千枝はなんのために金を貯めていたのかを考えた。

放課後 晴れ

陽介と一緒に帰宅することにした。

陽介はこないだの件のせいか、まだ千枝と口を聞いていない…。最近のこの二人は、本当に険悪な状態だ…。

陽介が下駄箱を開けると…。

!?

一枚のCDがあった。

「あっ、これって!?!」

陽介はCDを手にとった。

どうやら、千枝に貸していたCDのようだ…。

さらに、CDには一枚のメモが挟まっている。

『こないだはごめん…。弁償したから置いておきます…。 千枝』

とメモには書かれている…。

「里中の奴…」

陽介は複雑な顔をした。

そうか…、千枝が、こないだからバイトをしていたのは、陽介のCDの弁償のためだったのか…。

だから、あんなに一生懸命に…。

陽介に、こないだの出来事をすべて話した…。

「里中の奴…。んな目にあつてまで…。俺なんか…。まだ『聖龍伝説』を弁償すらしてもいねえつてのに…。しかも、俺…。あいつをあんな責めちまつたし…。」

どうやら、陽介は反省したようだ…。

そんな陽介の背中を叩いた。

「あつ！そつ、そつだよな！」

陽介はCDとメモを握った。

「で、さつ、里中の奴！今、どこだ！？」

急に焦り出した陽介に、屋上に居ると言った。

「ああつ、サンキューー！！」

陽介は凄い勢いで屋上まで階段を駆け上がった。

…。

陽介が千枝にどんな風に謝り、これから、二人がどんな会話をす
るのが気になったが、まあ、これで良しとしよう…。と自分に言
い、帰宅することにした…。

商店街

マクがあったので、行ってみた…。

「ラッシュャッセー！うわー！」

…。

またガソリンスタンドの店員と出会った。

シャドウは俺の前で毒を吐かない！吐くのは弱音だけだ！！編（微妙なネタバ

今回の話はネタバレが含まれていますので、『生田目を に

た』場合は…、今回の話を飛ばしてください。

シャドウは俺の前で毒を吐かない！吐くのは弱音だけだ！！編（微妙なネタバ

2011年某月某日（金） 曇り

昼間

直斗とりせが街中を歩いていると…。

「救うんだ…、俺が救うんだ…」

いきなり生田目が2人の前に現れた。

「救うんだ！！」

！？

なんと、生田目がりせと直斗に襲い掛かってきた。

「きゃあああ！！助けて！！」

りせが叫んだ。

すると…、誰かの足音が…。

「待てい！！」

と誰かが叫んだ。

「誰だ！？邪魔をするな！」

生田目が振り返ると、そこには陽介、千枝、雪子、完二、クマ、

自分の6人の姿があった。

そして、彼らが生田目の暴動を止めようとしている。

「誰だ！？お前ら！」

すると…。

「アカレンジュアイ！！」

と赤い戦闘服を着た陽介がポーズを決めた。

次に、千枝がいつものジャージ服を着て前に出た。

「キレンジュアイ！」

と千枝はポーズを決めた。

次に、雪子が赤いカーディガンを着て前に出た。

「アカレンジュアイ！」

と扇を持って、雪子がポーズを決める。

次に、完二が…。

「キレンジュアイ！」

と盾を持ってポーズを決めた。

次に、クマがいつものぬいぐるみを着て…。

「キレンジュアイ！クマ！」

とポーズを決め叫んだ。

最後に、自分が仮面ライダーディケイドのベルトとお面を着けて前に出た。

仮面ライダーディケイド!!と自分は叫んで、ポーズを決めた。最後に…。

「6人揃って、ジュネス戦隊!」

と陽介が言ったのに続いて、みんなが叫んだ。

「……ペルソナレンジュアイ!」「……」

そして、全員でポーズを決めた。

「……」

生田目が呆然としている…。

「さあ!早く逃げるんだ!!」

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

と陽介が、りせと直斗を逃がした。

そして、全員で生田目に向かい構えた。

「さあ、靴あとだらけになりたいのは誰!」

「覚悟なさい!」

「行くぜ!」

「ボッコボッコにするクマ!!!」

と千枝、雪子、完二、クマが生田目を睨んだ。

すると…。

「ちょっと、待ちなさい…。」

生田目が構えてるみんなの前に出た。

そして…、生田目は陽介に指をさした。

「君、何色？」

陽介はポーズを決めながら…。

「アカレンジユアイ!!」

次に、生田目は雪子に指をさした。

「君は？」

「アカレンジユアイ!!」

と雪子はポーズを決めて叫んだ。

「6人揃って…。」

陽介がそう言つと、みんなが続けて…。

「……………ジュネス戦隊!ペルソナレンジユアイ!!」……………

と叫んだ。

すると、生田目が叫んだ。

「違うよ!待てよ!」

生田目は今度は千枝と完二、クマに指をさした。

「君ら、何色…?」

すると、千枝、完二、クマは…。

「キレンジュアイ…」

「キレンジュアイ…、ツス」

「キレンジュアイ、クマ…」

とみんな答えた。

「6人揃って…」

陽介がそう言うつと、みんなが続けて…。

「……ジュネス戦隊！ペルソナレンジュアイ！！」「……」

と叫んだ。

すると、生田目がキレながら叫んだ。

「違うよ！待てよ！なんで、赤二人に黄色三人、例外一人なんだよ
！！おかしいだろ！！」

…。

生田目の言葉に、みんな黙り込んだ…。

あの自分ら…、一人一人の個性を見てほしいから、色がダブリま
した…、と答えた。

「色がダブってちゃあ、余計、個性見れないよ!！」

生田目は陽介、雪子に指をさした。

「まず、君ら!なんで、赤二人なの!？」

すると…、陽介が…。

「俺…、真ん中に立ちたかっただけです…」

と、しょぼくねながら言った。

「その気持ちはわかるよ!はい!じゃあ、君はなんで赤なの!？」

生田目は雪子に話を聞いた。

「千枝が…、あたしに赤が似合っつて言ってくれたから…」

「雪子…」

雪子は千枝を見つめながら言った。

「ツッコミにくい返しに戸惑いながら、生田目は、今度は千枝、完
二、クマに指をさした。」

「君らは、なんで黄色なの…?」

すると…。

「いや、俺…、なんていうか、黄色ポジションかなって…」

「クマも…、黄色ポジションかなって…」

完二、クマはそう答えた。
すると、生田目は…。

「はい、それはなんとなくわかるけど、その辺りは譲り合おうね！」
と言って、千枝を見た。

「はい、じゃあ、君！君、緑のジャージ着てるのに、なんで黄色なの？」

と生田目に聞かれ、千枝は…。

「黄色は…、ペルソナ4のイメージカラーだし…。設定資料集にも…、あたしが一番、黄色が似合ってるってキャラデザの副島さんが言ってたから…」

「そういう、見も蓋もないことを言わない！！！」

千枝の返しを、必死に生田目はフォローした。

「とりあえず…、君らはいいとして…」

最後に、生田目は自分を睨んだ。

「色はまだしも、一番、惜しいようで、君が一番惜しくないんだからな…！」

と生田目は自分に指をさした。

「なんで、みんなが戦隊でやってなのに、君だけ仮面ライダーなの…？」

いや、一人だけ仮面ライダーなのも良きかな…、と思いました…、と生田目に言った。

「全然、良くないよ！一人だけ自己アピール激しすぎだよ！統一性の戦隊物と、孤独なヒーローの仮面ライダーじゃ違うよ！？そりゃ、毎年同時上映やってるけど、豚肉と鶏肉ぐらい違うよ！！」

生田目の必死な説得に、みんなの心が揺らいだ…。

「すみません…、今度、よくみんなで話し合います…。」

と陽介が頭を下げた。

「ああ…、じゃあ、次はしっかり決めてくれよ…。」

「はい…。」

全員で生田目に頭を下げた。

「お疲れさまでしたー」

「ああ…、お疲れ…。」

こうして、みんな現地解散した…。

生田目と自分だけが残った…。

「ん？なんだい…、君は帰らないのか？」

生田目が自分に気付いた…。

そして、自分は生田目にこう言った。

平日の昼間から、なにやっってるんですか…？と。

生田目は頭を抱えて塞ぎ込んだ。

シャドウは俺の前で毒を吐かない！吐くのは弱音だけだ！！編（微妙なネタバ
お気づきの方が多いと思いますが、このファンフィクション作品、
ペルソナ4だけでなく元ネタになった作品が多数存在します…。

沈黙の番長編

2011年某月某日(月) 晴れ

放課後

どうも、精神的に不安定だ…。

最近の探索続きや、コミュニケーションの悩みを聞いているうちに感じた無意識の精神的疲労だろうか…。

階段を降りると、雪子に会った。

「あら…、大丈夫…」

雪子が自分の顔色を見て心配している…。

いや…、大丈夫だ…、と言って下駄箱に向かった。

「…」

雪子が遠くから自分の背中を見つめている…。

学校から出て、商店街に向かった。

精神的な疲労を感じるので、気休めに神社にお参りに行った…。

この神社に居るキツネから渡される絵馬に書いてある他人の願い事を叶えると、賽銭が貯まりキツネが喜び、それによって自分もいる都合が良くなるので、以前、必死にキツネに協力した…。

詳しくは、原作ゲーム参照。

しかし、今はもうキツネに十分に協力してやったので、普通にお参りに来た。

すると…。

！？

キツネが目の前に現れた！

キツネの口に、絵馬が下げられている…。

まさか…、また他人の願い事を叶えるというのか！？

こんな調子のときに…。

「こーん！！」

キツネが鳴いた。

伝達力、知識が高い自分の脳内で、キツネの鳴き声が日本語に吹き替えられて聞こえた…。

（久しぶりに、絵馬に書かれてある願いを叶えてもらいます！しかも、今回は『自称特別捜査隊』の方々から送られてきた願いを全員分、叶えてもらいます！！）

キツネの鳴き声が『 曜どうでしょう！？』の鈴井さんの声で再生された。

うわー！マジかよ！バカじゃないの！？あんたー！と大泉さんの口調で、キツネに言った。

「こーん！！（ちなみに、みんなに夢を与えるためこの企画についてアポなしだから、みんなの願いをこっそり叶えてね！じゃあ、早速、スタート！！）」

とキツネから無理矢理に渡された絵馬を受け取った。

どこかで見たとような汚い字だ…。

絵馬にはこう書かれている…。

『お金が欲しいです 花村陽介』

最初は陽介の願い事かよ！

しかも、大して面白みのない願い事しやがって！！

「こーん！！（早く行きなさいよ！バカ犬！！）」

とキツネ（CV・釘宮 恵）が鳴いた。

…。

仕方なく、ジュネスに駆け足で向かった。

しかし、キツネからバカ犬と罵られるのは、なんか嫌な気分だった…。

こうして、調子が悪いのに自称特捜隊メンバー全員の願いを叶える旅が始まった…。

377

ジュネス

食品売場で働いている陽介に自腹で壱万円札を渡した。

「えっ！どうした！？相棒！」

普通に金を渡そうとした瞬間…。

キツネから言われた言葉を思い出した。

『みんなに夢を与えるため、この企画についてはアポなしだから、みんなの願いをこっそり叶えてね！』

「どうやら、みんなに絵馬のことを悟らせないようにして願いを叶えなければならぬらしい…。」

「こないだ、陽介から借りた『T O L O V E っ! ?』の単行本に挟まっていた…、言った。」

「えっ、貸したっけ! ?」

陽介は疑問に思いながらも、壹万円札を受け取った。

陽介の絵馬の願いを叶えた!

明日、キツネに報告しに行こう。

翌日（火） 晴れ

放課後

神社に現れ、キツネを呼んだ。

陽介の願いを叶えたと報告した。

「ごーん!!（おーっ、さっすがー）」

とキツネ（CV・堀江 衣）が鳴いた。

絵馬の願いを叶えたので、家に帰ろうとした瞬間…。

「ごん！（次もお願いね）」

…。

またキツネ（CV・小清水 美）が絵馬を渡してきた。見ないフリして去ろうとしたが…。

「こーん…（おい、こら…、てめえ、まだ一人目だぞ…）」

とキツネ（CV・関 一）が言った。

…。
絵馬を受け取り読み上げた。

『花村に貸した壱万円が返ってきますように。 里中千枝』

次は千枝の願い事だ！

陽介の奴、どんだけ金欠なんだよ！！

「こーん！！（早く行きなさいよ！バカ犬！！）」

とキツネ（CV・釘宮 恵）が鳴いた。

…。
仕方なく、ジュネスに駆け足で向かった。

やはり、キツネからバカ犬と罵られるのは、なんか嫌な気分だ…。

ジュネス

食品売場で働いている陽介に向かって、昨日の壱万円札を千枝に渡して…、と言った。

「えっ！昨日の金は、俺の金じゃなかったのかよ！」

「ごめん、あの壱万円札は千枝から借りた『ToLoveるっ！？』に挟まってたんだ…、と言った。

「つて、なんで里中から借りてんだよ!! ていうか、里中が『T O Love るっ!?』なんか読むかよ!!」

とりあえず、陽介が嫌々ながらも引き受けてくれた…。

千枝の絵馬の願いを叶えた!

明日、キツネに報告しに行こう。

翌日（水） 晴れ

放課後

神社に現れ、キツネを呼んだ。

千枝の願いを叶えたと報告した。

「こーん!!（やるな、相棒）」

とキツネ（CV・森久保祥 郎）が誉めてくれた。

やはり、また絵馬を渡してきた…。

絵馬を受け取った。

男の字だ…。

絵馬に書かれている願いを読んだ…。

『夜中、おふくろが眠れないんで暴走族が静かになりますように…』

『異完二』

今度は、完二か…。

「こーん!!（早く行きなさいよ! バカ犬!!）」

とキツネ（CV・釘宮 恵）が鳴いた。

…。
仕方なく、ジュネスに駆け足で向かった。

ジュネス

食品売場で働いている陽介にクマが話し掛けた。

「ヨースケ！明日のマグロ解体ショーに使われるカジキマグロ一頭
が消えたクマ！！」

「えっ！マジかよ！？」

陽介は焦っている。

夜

ドガバキ！ドツガ！ガルル！バツシャー！！キバ！エンペラー！！

商店街周辺で激しい音がした。

「また！族かよ！ちきしょう！！」

完二は、また暴走族の暴走行為だと思い、腹を立てて拳を握りながら、道路に出た。

するど…。

「えっ!?!」

完二が道路を見ると、暴走族全員が何者かによりボコボコにされ、気を失い静かになっている…。

「えっ!?!えっ!?!」

自分が手を出す前に、撃沈している暴走族を見て、完二は頭が混乱している…。

道路を見ると、アスファルトにカジキマグロが突き刺さっていた…。

完二の絵馬の願いを叶えた!

明日、キツネに報告しに行こう。

翌日(木) 晴れ

放課後

神社に現れ、キツネを呼んだ。

完二の願いを叶えたと報告した。

「こーん!!!!!!(よくやったな)」

とキツネ(CV・石塚 昇)が誉めてくれた。

次の絵馬を受け取った。

女の子の字だ…。

絵馬に書かれている願いを読んだ…。

『ストーカーが居なくなりますように…。 久慈川りせ』

今度は…、りせ…。
仕方なく、またジュネスに駆け足で向かった。

ジュネス

食品売場で働いている陽介にクマが話し掛けた。

「ヨースケ！今日、戻ってきたマグロ解体ショーに使われるカジキ
マグロー頭がまた消えたクマ…！」
「えっ！マジかよ…！」

陽介は焦っている。

夜

ドガバキ！ドッグ！ガルル！バツシャー…！キバ！エンペラー…！
モモ、ウラ、キン、リユウ…！

マルキュー豆腐店周辺で激しい音がした。

「もうー、なによ…！」

眠っていたりせが起き上がって、部屋の窓から外を見た…。

「あれ…？」

りせの家を張り込んでいたストーカー数名が何者かによりボロボロにされ気絶している…。
店の前には、カジキマグロが突き刺さっていた…。
りせの願い事を叶えた！
明日、キツネに報告しに行こう。

翌日（金） 晴れ

放課後

神社に現れ、キツネを呼んだ。
りせの願いを叶えたと報告した。
絵馬を受け取った。
達筆に書かれた字だ…。
絵馬に書かれている願いを読んだ…。

『世界が平和になりますように…。 白鐘直斗』

今度は、直斗…。
いや、こればかりは普通に無理だろ…。
マジで無理だよ…。
だが、キツネが睨んだ…。

「こん！（勇気を出せ…）」

とキツネ（CV・浪川 輔）に言われた…。
仕方なく、またジュネスに駆け足で向かった…。

ジュネス

サービスセンターで電話を持っている陽介にクマが話し掛けた。

「ヨースケ！今日帰ってきたばかりのマグロ解体ショーに使われるカジキマグロ一頭が、またまた消えたクマ！！」

「つか、苦情がやべえよ！なんで、こんなにマグロ盗まれんだよ！！！！！！」

陽介は泣きながら焦っている。

夜

太平洋

ドガバキ！ドツガ！ガルル！バツシャー！！キバ！エンペラー！！
モモ、ウラ、キン、リュウ！！
カブト！ガタツク！ザビー！ドレイク！サソード！キックホツパ
ー！パンチホツパー！！

太平洋に激しい音が響いた…。

翌日（土） 晴れ

朝

直斗がテレビを見てみると…。

『日本に迫っていた謎の世界制服が目的の悪の組織が、先日未明、何者かにより駆逐されました…。悪の組織が所有していた戦艦には、カジキマグロー頭が残されており…』

直斗が驚いている。

「へえ…、こんなこともあるんだ…」

直斗の願いを叶えた！

今日…、いや、今日は帰れそうにないので、明日、キツネに報告しに行こう…。

翌日（日） 晴れ

午後

バルバルバルバル！！

神社に一台のヘリコプターが着地した…。

ヘリコプターから、自分と背の高い筋肉質な髪の毛を後ろに止めた男性が降りてきた。

久しぶりに日本の大地を踏んで、自分の膝が笑っている…。

男性は英語で自分に話し掛けてきた。

以下、自分の脳内再生。

「協力を感謝するジャパニーズサムライボーイ…。今回のミッション…。君が居なければ成功しなかった…。(C V・大明夫)」

自分は別にいい…。と答えた。

そして、男性に背を向け、神社に向かうと…。

「待ちな！(C V・大塚 夫)」

自分は振り返った…。

「そういえば、名前…。聞いていなかったな…。俺の名は、ケイチ
I・ライバツクだ…。(C V・塚明夫)」

男性に名を聞かれたので、自分は…。

I a m B A N C Y O … ! (私は番長です)

と言い残した…。

男は笑いながら、ヘリコプターに戻った…。

バルバルバルバル!

ヘリコプターは離陸した…。

自分は去って行くヘリコプターを黙って見つめた…。

FIN

『沈黙の番長』

主演

番長（ペルソナ4主人公）

キツネ

花村陽介

里中千枝

天城雪子

巽完二

久慈川りせ

白鐘直斗

クマ

スィーブン・セーブルっぽい人（特別出演）

カジキマグロ（友情出演）

主題歌

『Heaven』

『Never More』

（ペルソナ4サントラ収録曲）

ぐはっ!!!

自分は血を吐いた。

さすがに、ヤバイ!

本当にヤバイ!今までの疲労が一気に自分を苦しめる…。

そして、目の前に現れたキツネに直斗の願いを叶えたと報告した。

「こーん!!!(よくやった…)」

とキツネ(CV・大塚明)が誉めてくれた。

ぐはっ…。

さすがにもう無理だ…、と思い、足を震わせていると…。

「こん!!!」

キツネが2枚の絵馬をくわえている…。

ぐわんばっ!

自分は大量に血を吐いて倒れた。

まだ絵馬が残っていた…。

今までの分を考えると…、確か、クマと雪子の願いを叶えていなかった…。

まだ二人も残ってるとは…。

もう限界だ…。

血を吐いて地面を這いながら、キツネから絵馬を受け取った…。

クマが書いたと思われる絵馬を読み上げた…。

『いつまでも、センサーやヨースケたちと、ずっといっしょにいられますようにクマ』

…。

何故か、鼻の奥がツンとした…。
くっ…。

クマの絵馬を読んだ瞬間、急に気が抜けたのか…、意識が薄れてきた…。

いかん、疲労で…、目の前が暗くなってきた。

薄れる意識の中、せめて、最後の絵馬である雪子が書いた願いを読もうとした…。

『みんな怪我なく、ずっと、これからも一緒に過ごせますように…。
それから…、彼に…』

最後の文を読み上げる前に、自分は疲労で意識を失い神社に倒れた…。

さすがに体の限界だった…。

しばらくすると…。

「あら…」

神社に誰かが現れた…。

夕方

神社のどこかで、自分は横たわっている…。

目を開けると、日が沈んでいる…。

どうやら、長い時間、気を失っていたらしい…。

確か、雪子の絵馬を読んでいる途中で自分は気を失ったわけだが

…。

…！

そういえば、さっきから柔らかく暖かいなにかを自分の頬に感じる…。

まさか…。

今…、自分は俗にいう…、膝枕と言うものを…、誰かから受けているのではないだろうか…。

…。

さらに、膝枕をしている誰かの手が自分の頭を撫でているようだ

…。

その誰かの袖から良い匂いがした。

自分は呆然としていると…。

「いつも、お疲れ様…。」

！？

この声は…。

その誰かは、また優しく自分の頭を撫でている…。

「こん！（ミツシヨコンプリート…、おめでとつ…）」

目の前で、キツネ（CV・大塚 夫）が鳴いた。

…。

こうして、自分は自称特別捜査隊メンバー全員の絵馬の願い事を叶えた…。

気のせいか、今まで感じていた精神的な疲労がなくなったような気がした。

もしかしたら、あの無茶ぶりな企画は…、キツネの軽い恩返しなのかもしれない…。

このキツネはメスだし…。

…。

とりあえずは、日が暮れるまで意識が戻っていないフリをした…。

ジュネス

陽介とクマは、太平洋の謎の戦艦から戻ってきたカジキマグロを抱き締めながら泣いている。

「良かった…、良かった…、もう離さないからな…」
「もう離さないクマ…」

千枝はそんな二人を遠くから見つめた。

「アホか…」

完二編2

2011年某月某日（木） 晴れ

放課後

「
…」

完二は一人フラフラと川原を歩いている。

なにか思い詰めた表情をしながら、完二は遠い目で川原を見つめた。

（やっぱり変だよな…、男のくせに…、手芸が得意なんてよ…。それに…、どうも人からは変な目で見られちまうし…）

どうやら、完二はなにかセンチメンタルになっているようだ。

深くため息を吐いて、完二は川原を見ていると…。

！

「あれ？先輩？」

川原には自分が居た。

そして、トロンボーンを抱えている…。

「そっぴや、先輩は吹奏楽部だったけな…」

自分は静かにトロンボーンを鳴らした。

…。

儂く淡い優しい、人を包み込むようなやわらかい音色だ。

…。
完二はびっくりした。

「すげえ…、なんだよ…、これ…。この心地の良い音色は…。まるで、少しだけ温かい海に身体中が包まれたみてえだ…」

完二は自分のトロンボーンを聞き入っている…。
いや、自分の奏でる音楽に酔っている。

「すげえ…、さっきまで悩んでたのがバカみてえに思えるくらいだ…。荒んだ心が、どんどん和んでいくのを感じる…」

完二は目をつぶった…。
そして…。

！

自分はトロンボーンを鳴らすのをやめて、ギターを弾きながら歌い始めた…。

『GOD SPEED KNOW』

作詞、作曲

自分

楽曲提供

花村陽介

温かいところから出てきた…

盆ジュース…、なんかムカついたー

冷蔵庫かびてることさえ、堂島は気づいていないー

パラメーター上げるため、やってるけどー

味噌を食べる、きのこ食べる…

胃が限界だー

あたし、食べてゆくよ！

どんな不味いかびたものでさえ、きつと、胃が消化してー

食べるきのこの果て、弱さゆえに胃を壊さぬように…

MY EATER

上がるよ、勇気ー

GOD SPEED LOVER

と自分が歌い上げた。

「くっ」

完二は涙を拭いた。
あくびで出た涙を。

クマ編

2011年某月某日（金） 晴れ

放課後

学校で水泳大会（男子限定）が開かれた。

参加する選手は、陽介、完二、一条、長瀬、自分の五人…。

皆、優勝を狙っている…。

皆、この日のために過酷なトレーニングをして…、来なかった。

各選手にインタビューを試みた…。

「負ける気がしねえ…。」

と花村陽介選手は屈伸運動をしながらスタンバイをしている。

「なんで、俺だけ…、ふんどしツスか…。」

巽完二選手はふんどし姿で嘆いている。

「勝つに決まってるだろうがよ！」

一条選手は気合い十分だ…。

「ふっ…、この日のため、サッカーをやってきたようなもんだ…。」

長瀬選手は本末転倒するようなことを言っている。

最後に、自分…。

自分は足にテーピングを巻いている。

「無理クマよ！センサー！その足じゃあ！」

マナージャーのクマが自分の足を見て叫んだ。

自分は痛む足を見つめ、あの日を思い出す…。

昨日…、テレビの中に探索に向かった際…。

グギッ…！！

ジュネスのテレビから入り着地したときに腰をぶつけ、痛い！と言いながら立ち上がった瞬間。

ガギッ…！！

「あ…！！」

千枝から間違って、足を踏まれた…。

「センサー、やめるクマよ！」

回想をやめると、視界にクマが入った。

必死で自分を止めるクマに向かい、男はなにがなんでもやらなければならぬことがあるんだ…！と言った。

「わかったクマ！」

納得はやつ！と思った。

そして、競技は開始された。

陽介、完二、一条、長瀬が構えた。

ちなみに、自分は足の負傷からリタイアし、スタートのピストルを鳴らす係に回った。

皆がプールを睨んだ…。

プールに水が張られていなかった。

完！！

クマ編（後書き）

クマは意表突かれたキャラですね……。わざわざアニメーションにしてまで、中身を登場させるとは……。あと、王様ゲーム編での口調が絶対某仮面のテロリスト意識してましたよね……。

魁！男湯編

2011年某月某日（土） 晴れ

夜

今日は探索に行つて疲れたので、一人アポなしで天城屋旅館に日帰り入浴をした…。

先日、文化祭で苦い思いをした（原作ゲームの文化祭後の打ち上げ参照）露天風呂には、今自分だけだ…。

鼻歌を歌うことにした。

季節は穏やかに終わりを告げたねー、色褪せたー、記憶に乗せてー、さよならー、愛をくれたー、あの人は遠い空に恋い焦がれてーと、るる剣の主題歌を歌った…。

なんかテーションが上がってきた…。

誰も居ないようだし…、もっと自分を曝け出して歌うことにした…。

ゲツワイエンタフ！一人では解けない愛のパズルを抱いて！ゲツワイエンドタフ！この街で、優しさに甘えていたくはない！と、シテーション ターの主題歌を歌った…。

さらにテーションが上がってきた…。
さらに、自分を曝け出して歌うことにした。

ゴー！ゴー！マツソ！リングーに稲妻走りー、炎の戦士を照らすー、飛び散れー、キン肉ビーム！とキン肉マンの主題歌を歌った。
かなりテーションが上がった…。

どうしよう…、いくら誰も居ないとはいえ、ここでかなり自分を曝け出してしまったら…、さすがに大変なことになる…。

だが、まあいいか…。

よし!と思い、脱衣場で服を着た。

テーションが上がった勢いで、露天風呂に服のまま飛び込んだ。

そして…、自作の歌を温泉に服のまま浸かりながら歌った。

『ひやむぎ』

作詞、作曲

自分

激しく交差する街角でー

突撃、隣の晩ご飯ー

テーブルには、パンプキンパイー

これは主食じゃねえ!

おやつだ!!

俺のスイートタイムを邪魔した代償はデカイぜ!

(台詞:こないだ、冷蔵庫にあったビンをめんつゆだと思って、そーめんにつけて食べたら麦茶だった…)

hey yo! わかってんだぜ、楽しめ未来、マイマイ・ザ・チェンジ!

エキゾチック番長ー

学ラン開けて、超セクシーー

俺がいちばん…、セクシー…

振り向くと、腰にタオルを巻いて呆然としている陽介、完二、クマの姿があった…。

言葉が出なかった…。

すると…。

「ごめんな…」

何故か、陽介から謝られた…。

ときめき！女湯編（前書き）

あらかじめ言いますが、夢才子です。

ときめき！女湯編

2011年某月某月（日） 晴れ

夜

探索後、露天風呂に、千枝、雪子、りせ、直斗、自分が浸かっている。

全員、タオルを巻いています。

千枝は温泉に浸かりながら、腕を伸ばしている。

「いやー、今日の探索疲れたわー」

と千枝が言ったので、お疲れと言った。

「どうもー、リーダー。今日もナイスフォローだったわよ！」

千枝が笑っている。

直斗は呆然としている…。なにかあったのだろうか…。

「にしても、本当、花村の奴ー、最近、調子のりすぎよね…」

千枝が苦い顔をした。

「えっ、花村君、結構頑張ってるじゃない」

「そうだよ、千枝先輩ー」

と雪子、りせが陽介のフォローをした。

陽介のペルソナ、ジライヤは力をつけてきたからなー、と千枝に

言った。

直斗は何故か、だんまりしている…。

「でもさー、やっぱ、花村は…」

「もうー、とか言つて、千枝先輩ー。花村先輩のこと…。」

りせにニヤニヤされながら、そう言われると、千枝の顔が赤くなつた。

「ちつ、違つわよ!」

「ふふ…、千枝先輩ー、まだ、なんにも言つてわよー」

「りつ、りせちゃんだって…。普段は、完二君のことをバカにするけど、結構、りせちゃん、完二君のこと気にしてたりするわよね…。」

すると、今度はりせの顔が赤くなった。

「違つわよ! あんな奴! なんとも思つてないわよ! 先輩ー、あたしは先輩一筋だからねー」

と言いながら、りせは自分の肩に抱きついた。

「ちよつとーりせちゃん! 近づきすぎ!」

雪子がりせを自分から離そうとしている…。

やはり、直斗はだんまりしている…。

…。
直斗の様子がおかしいので、どうかしたのか? と聞いた。

「いや…、あの先輩方…、なにか、大切なこと見落としてませんか…？」

と直斗が言った…。

…。

！？

すると、雪子が自分を見て…。

「あっ！」

なにかに気がついた。

すると、直斗は一安心した…。

「もしかして、直斗君…。なんだかんだで…、完二君のこと…」

と雪子が言った。

「違います！」

直斗が半ギレで言った。

すると、千枝とりせが笑いながら…。

「もう直斗君ー、照れちゃってー」

「案外、完二と直斗、お似合いだよー」

と直斗をからかった…。

すると、直斗はタオルを抑えながら立ち上がってキレた。

「違います！違いますよ！！さつきから、あなた達は、物凄い大変なことを見落としていませんか！！！！」

そう言っつて、直斗は自分に指をさした。

！？

すると、千枝、雪子、りせはなにかに気づいた。

「あつ！？」

「ええつ！？」

「ウソツ！」

みんなが自分を見て、なにかに気づいた…。

…。

直斗は、やれやれ…、とため息をついた。
すると…。

「そうか」

「ごめんね…」

「気付かなかった…」

と千枝、雪子、りせは落ち込んでいる…。

「いや、解ればいいんですよ…。だから、先輩…、今から警察に…」

直斗がなにかを言おうとしていると…。

「直斗…、先輩のこと好きだったんだ…」

りせがそう言った。

！？

「ごめん…、気付かなかった…」

千枝が下を向いて、そう言った。
雪子はなにか思い詰めている…。
すると…。

「違うわぁあぁっ!!」

直斗が声を荒げて叫んだ。
直斗の勢いに、全員がビックリした。

「えっ!?直斗君」

「どうしたの!?!」

「別に、人を好きになるって悪いことじゃないわよ!!」

千枝、雪子、りせが激しくキレている直斗を落ち着かせた…。

「いいかげん、気付いてくださいよ!!なんで、女湯に男のリーダーが居るんだよ!!って、気付いてくださいよ!!なんで、誰一人として気付いてないですか!?!っていうか、何げに、これ大変なことですよ!!」

!?!

すると…。

「えっ…、わかってるわよ…」

「うん…、先輩居るってわかってたよ…」

「へっ…?」

冷静な千枝、りせに直斗は驚いた。

「直斗君に話してなかったけ？旅館の方で、混浴をやってみようかな…、って話が合ってたね…。それで、今、試験的に彼を呼んでやってみたのよ」

と雪子が説明をした。

すると、直斗が…。

「えっ！？でも、ちよっ…」

「いや、あたしタオルの下に水着着てるし…」

「あたしも」

「うん、それに脱衣場もちゃんと男女別に分かれてたでしょ」

と千枝、りせ、雪子はタオルを捲って、直斗に水着を着ているのを見せた。

もちろん、自分も水着を着ている。

直斗は頭を抱えた。

「そういえば、僕も水着を着ていた…」

直斗はタオルを捲って、自分が水着を着ているのに気づいた…。

「ハハハ！直斗君も、結構ドジだねー」

と千枝は笑った。

直斗は罰の悪そうな顔をして、温泉に顔を沈めた…。

という内容の夢を、完二は見た…。

「はっ…！」

目を覚ましたと同時に、完二は周囲を見渡した…。
いつもの完二の部屋だ…。

完二は汗を拭った…。

「なんで、俺…。俺が得しない夢なんて見たんだ…」

完二は胸を抑えた…。

だが…、完二の脳裏には、直斗の水着姿（夢の中）が焼き付いて
いる…。

「いや…、得はしたか…」

完二は赤くなった…。

しかし、夢才子ばかりしてすまないと思う気持ちと、夢才子にしないと、いろんな方面から反感買うよな…、という複雑な気持ちに完二は襲われた…。

りせ編2

2011年某月某日（火） 雨
夜

雨が降り続けている…。

マヨナカテレビになにかが映った…！

「あつ！と驚く料理から！」

「クマーン！と驚く料理までをご案内しますクマー！」

キッチンを前に、りせとクマがカメラに向かって言う。

「『番長先生のペルソナ料理教室』」

二人が声を合わせて言った。

「どうもー、久慈川りせこと、りせちーですー！」

「クマクマー！この番組はジュネスの提供でお送りするクマー！」

カメラに手を振りながら、二人は笑顔を作っている。

「さあ！今日も驚きの料理を作ってくださいるのは、この方！八十神料理学校講師、番長先生ですー！」

「センサー、よろしく願いますクマー！」

とりせに紹介され、キッチンに自分が立った。

カメラに向かって、落ち着け、貴様らああ！と叫んだ。

「ちよつ…、先輩…！生放送だよ…！？」

りせが小声でフォローした…。

「センサー！今日のお料理はなにクマかー？」

クマに聞かれたので、今日の料理は『イッポンダラの本漬け』と答えた。

「…」

「…」

りせとクマが黙った…。

冗談だよ…、と答えた…。

今日は『マグロのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング焼き』にしますと言った。

クマが黙った…。

「なっ、なに…、そのマグロのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング焼きって…」

（りせちゃん、今の暗記したクマか！？）

りせが一文字も間違わないで返した…。

まあ、『マグロのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロングマシントルネード焼き』は日本に馴染みが薄いからね…、と答えた。

（さっきと違うクマ…）

クマがそう思うと…。

「ですから…、先輩…、そのマグロのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロングマシントルネーダー焼きつてのは、どんな料理なの…?」
（また暗記クマか!?)

りせの記憶力にクマが驚いていると…。
まあ、君らは知らないと思うけど、マグロって奥が深いんだよ…、と言った。

「へえー、そうなんですか?」

りせが驚いている。

だって、シーチキンなんてみんな鳥肉で作られてると勘違いしてる人が多いけど、本当はマグロで作られてるからね!と自分は笑いながら言った。

「知ってる…」

「知ってるクマよ…」

あっそ…、と答えた。

…。

空気が気まずいので、じゃあ、さつさと『マグロのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロングマシントルネーダーライチエイサーズピードチエイサー金の力でゴウラムパワーアツプ焼き』を作るうかと言った。

（さつきと名前違うよ、なんかわけのわからないネーミングになってるクマ!）

クマが驚いていると…。

「だから…、先輩！『マグロのネオアームストロングサイクロンジエットアームストロングマシントルネードトライチエイサースピードチエイサー金の力でゴウラムパワーアップ焼き』ってなんなんですか!？」

(リセちゃんこそ、なんなのクマか!?)

リセの記憶力にくまが驚異を感じている。

キッチンにはカジキマグロー頭が置かれた。

「今日の食材は、カジキマグロー頭ですー」

「提供はジュネスクマー！」

自分はカジキマグロを持ち上げた。

そして、よっこいせ!と言っつて、窓に思いっきり投げつけた。

ドガバギーン!!

と窓が割れた…。

ここで…、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

りせ編2(後書き)

元ネタ「ごっつええ感じ キャシー塚本」

Heaven 編(前書き)

『ペルソナ4 ドラマCD VOI・I』発売記念作品

Heaven 編

2011年某月某日(土) 晴れ

夜

自宅で菜々子と過ごしていると…。

「そつだ！そつだ！お兄ちゃん、あのねー！」

と菜々子が一枚のチラシを出した。

これは明日発売のテレビゲームソフト『ポイドクエスト9』の宣伝のチラシではないか…。

…。
すると、ちょうどよくテレビがこのゲームについて報道している…。
都会あたりで、このゲームを買うためにゲームショップに並んでいる猛者達の長蛇の列が映されている…。

420

『昨日から並んでいます！』

『先週から並んでいます！』

『これを買うため、会社辞めました！！』

…。
いろいろ思ったことがあったが言わないでおこう…。
まさか…、菜々子は…。

「お兄ちゃん…、このゲーム欲しいんだけど…」

やはり…。

菜々子にテレビを見ての通り、すごい人が並んでるから買えないし、次に入荷するまで待とう…、と言った…。

「うっ…、うん…、だよな…。わかった…」

菜々子が落ち込んでいる…。

…。

菜々子は下を向いた…。

…。

菜々子が…、必死に我慢している…!?

『トランザム!』

自分の中で、なにかが起動した…。

たかがゲーム一つ、お兄ちゃんが買ってやる!と菜々子に叫んだ。

「えっ!?!お兄ちゃん…!」

菜々子はビククリしている。

イザナギをスタンバイさせ、駆け足で自宅から自分が出た行った。

「えっ!お兄ちゃん!今、夜の11時前だよ!」

菜々子は走り去っていく自分を見つめた。

2011年某月某日(日) 夜

0:00

市内某所にあるゲームショップの前には、長蛇の列がなっている。
…。

「はいはい！明日発売の『ポイドクエスト9』は、午前9時に販売開始いたします！数に限りがあり、入荷分に数を合わせた整理券をお一人様に一枚ずつにお配りしますので順番にお願いしますー！」

と店員がメガホンで列を作っている客に言った。

「自分もこの列に並び、整理券を受け取ろうとしたが…。」

「すみません…、お客様…、たった今、整理券がなくなりましたので…。」

！？

なんと、店員から整理券がなくなったと言われた。いや、それでも、なんとか買えないのか？と聞いた。

「すみませんが、混雑を避けるため、販売の際、整理券と代金で商品と引き替えさせて頂きます…。」

なんとということだ…。

整理券がないと、ゲームが買えないらしい…。

自分と同じように、整理券をもらえなかった者達が泣きながら帰ったり、あるいは、整理券をもった人間に譲ってくれと土下座したり、暴力で奪い去ろうとしていたりと戦場になっている…。

くっ…、まさか、ゲーム一つ買うのが、こんなに難しいとは…。

！？

誰かが自分の手を掴んだ！

「整理券くれえ…、頼む…、整理券を…」

整理券に飢えた整理券ジャンキーが自分に襲い掛かってきた！

しかし、その整理券ジャンキーの顔はどこかで見たような顔だ…。

「はっ！相棒！？」

なんと整理券ジャンキーは、陽介だ！？

一体、どうしたんだと聞いた。

「明日発売の『ポイドクエスト9』を買いに来たんだが、家の手伝いで遅れて…、整理券を受け取れなかった…。ちくしょう…、楽しみにしてたのに…」

陽介は泣きながら言った。

自分は、かくかくしかじかな理由で買いに来たが、整理券が受け取れなかったと話した。

「なるほど…、菜々子ちゃんのためにか…。しかし、どうやれば整理券を手に入れられんだよ…。人のを奪うしかないのかな…」

と陽介が言う…。

バカヤロウ！人の物を奪う人間は大事なものを無くす、と仮面ライダーカブトのお婆ちゃんが言っていた！と陽介に言った。

「！？そつだよな…、こついうときこそ、冷静にならなきゃだよな…」

整理券ジャンキーになっていた陽介の目が覚めた。

「だけだよ…、どうする？」

と陽介が聞いた。

人から奪うのはダメだが、人からもらうのは大丈夫だろ…、と言って自分はマーガレットからもらった金属バットを構え、ちよつと話し合ってくる…、と言い、整理券を持った人に近づいた…。

「うおおーい！なにやってんだよ！！！」

陽介が必死に自分の身体を止めた。

「それ奪うと変わんねえよ！！ていうか、奪うよりタチ悪いわ！」

じゃあ、どうするんだよ…、と聞いた。

「とりあえず…、普通に考えようぜ…。俺たちは今までも、そうやって困難を乗り越えてきたんだ…」

陽介は頼もしく言った。

ゲームを買うだけのこととは言え、陽介はかなり一生懸命にゲームを買う手段を考えている…。

そんな陽介の姿に絆が深まった…。
わかった！とにかく、考えてみようと言った。

「おう！俺とお前なら、絶対、この状況を打破できるはずだ！！！」

数時間後…

AM 9 : 30

店員がメガホンを持って叫んだ。

「ポイドクエスト9はたった今、完売しましたー！次の入荷は未定です…」

自分と陽介は、手ぶらでそのアナウンスを聞いた…。

「はい…、いくら考えてもダメなものはダメでした…」

買えないという真実に、自分達は辿り着いた…。

自分と陽介は大人の階段を一步踏んだ…。

「くっ…、帰ろうぜ…、相棒…」

陽介は泣いている…。

菜々子との約束を守れなかった…。

くそう…、と自分は拳を握った。

「相棒…」

なんて情けないんだ…、と自分は自分を責めた…。
陽介が自分の肩を叩いた。

「そんなことねえよ…。お前は、俺と違って自分のためにゲームを買っただけでなく、菜々子ちゃんのために買ったつもりだったんだから…。大丈夫だって…。菜々子ちゃんもわかってくれるって…」

と陽介が自分を慰めてくれた…。

陽介との絆が深まった…。

しかし…、せめて、なにか菜々子にやりたいと思い、ゲームショップで、あるゲームソフトを買った…。

自宅に、陽介を連れて帰宅した…。

「お兄ちゃん！」

菜々子が自分に駆け寄った。

「ごめんな…。菜々子ちゃん…。ゲーム買えなかったよ…」

と陽介が自分の代わりに菜々子に謝った…。
すると…。

「お兄ちゃんが、いきなり夜遅くに飛び出して帰ってこなかったから、菜々子、すっごく心配した…。菜々子が、お兄ちゃんにワガママ言ったから…」

!??

なんと、菜々子はゲームのことより、自分のことを心配してくれ
た…！

すっ、すまない…、と菜々子に言った。

「うづん…、ごめんなさい…。お兄ちゃん…。もう菜々子、ワガマ
マ言わないから…。だから、もう一人にしないでね…」

と菜々子が寂しげに言った。

ああ…、今度から気を付けると菜々子に言った。

「へっ！良かったな、相棒！」

陽介が鼻をこすって笑っている。

菜々子を一人にしたお詫びとして、『ポイドクエスト9』は買え
なかったが、違うゲームを買ってきたと言った。

「えっ？」

菜々子は驚いている。

買ってきたゲームは、アト スより発売中の『ペルソナ4』だ。

「うわー！お兄ちゃん、ありがとう！！本当はこれが欲しかったん
だ…！」

菜々子は凄く喜んでいる。

陽介も驚いた。

「うほお！これは、スタイリッシュでお洒落なRPGゲームと言わ
れてて、どこか親近感のあるキャラクター達が人気の『ペルソナ4』
じゃねえか…！」

よし！みんなで今から、『ペルソナ4』をやるっぜ！と言った。

「おおー！みんなも呼ぶか！！」

陽介はいつものメンバーに電話して、自宅に集めた。

「えーっ！？ペルソナ4！？あたしもやりたい！」

「ペルソナ4って、最高よね！」

「ペルソナ4は名作ツスよ！」

「やったー！今日は、ペルソナ4だね！」

「みなさん、はしゃぎすぎですよ！」

「クマも、ペルソナ4やるクマー！！」

千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマがペルソナ4で喜んでいる。
よし、今日はペルソナ4祭りだ！と自分は言った。

今日1日、みんなとペルソナ4で盛り上がった…。

菜々子やみんなを笑顔にしてくれた『ペルソナ4』、ありがとう

…。

こんな素晴らしいゲームを作ってくれたアト スさん、ありがとう
…。

だから、追加でまたソフト出してください。

お願いします。

ドラマCDも嬉しいけど、やはりゲームでの追加もお願いします。

マジで、お願いします。

アト スさん。

Heaven編(後書き)

実際、追加で出ないんですかね…。

一人でも傷ついた夢を取り戻すよ編

2011年某月某日(月) 晴れ

放課後

陽介の要望で沖奈市に来た。

「いやー、久しぶりだなー、この空気ー！」

陽介は両手を広げて深呼吸した。

「あの街も悪くネエけど、俺らって、ほら都会っ子じゃなかよ。だから、この空気の方が似合ってたところがあるよな」

ああ…、自分と陽介たちはシティーボーイだしな、と答えた。

「そうそう、都会が香るちょっと危険な感じの…ってか！」

なんていうか、ある意味、自分達ってシティーハンターだよな、と言った。

「…！」

陽介がなにかに気づいた。

…。

すると、陽介は…。

「相棒…。そうだよな…。俺たちって、シティーハンターだよな…」
なにを言っているんだお前は…。と陽介に言った。
すると、陽介が駆け足で駅に戻った。

「ごうしちやいらねエー！相棒！今すぐ、帰るぞー！」

まだ着いて、数分も経ってないぞ…と言った。
しかし、それでも陽介に強引に駅に連れて行かれた…。

そして、八十稲葉市内に帰還した。

陽介と一緒にサングラス、コートを着て、シガーチョコを口にく
わえた。

片手にはリボンシトロン…。

後ろにはあるのは、BMWのミニクーパー…（どっかに駐車され
てるの）

陽介はシガーチョコを食べながら…。

「相棒…。これからは俺たち、もっとハードボイルドに生きようぜ

…」

…。

そんな陽介の言葉に自分の心に潜むハムスターが騒ぎ始めた。

ああ…。頷いた。

こうして、陽介と自分はハードボイルドに生きることにした…。

BGM『Get Wild』（大人の事情）

夜

「荒れ狂う暴走族の前に、自分と陽介は構えた…。」

「ドガバキ！ドツガ！ガルル！バツシャー！！キバ！エンペラー！！」

「商店街周辺で激しい音がした。」

「また！族かよ！ちきしょう！！」

「完二は、また暴走族の暴走行為だと思い、腹を立てて拳を握りながら道路に出た。」

「すると…。」

「えっ！？」

「完二が道路を見ると、暴走族全員が何者かによりボコボコにされ、気を失い静かになっている…。」

「えっ！えっ！？」

「自分が手を出す前に、撃沈している暴走族を見て、完二は頭が混乱している…。」

「道路を見ると、アスファルトにカジキマグロとクナイが突き刺さっていた…。」

「陽介と自分が暴走族を片付けたのを、完二は知らない…（この作品はコピーを使用していません）」

翌日、すぐやめた。

俗・さよならモロキン先生編

2011年某月某日(月) 雨

午前

教室でモロキンが生徒全員を睨んだ。
何故か、お怒りの様子だ。

「全員、目をつぶれ!!」

モロキン以外の全員が目をつぶった。

自分も目をつぶった…。

周りがまったく見えない…。

「今から、わしが言う質問に対して正直に答える! そうだな、と思
つたなら挙手! 違うなら手を挙げるな! いいな!」

みなが返事した。

そして、モロキンが目をつぶっているみんなに質問を開始した。

「まずは、最初の質問!! このペルソナ4のりせちーの声で『釘宮
病』を発症した者は手を挙げる!!」

成人男性の大半が発症すると言われていた現代病のひとつ。まっ
たくもって治療法が見つからないため、高度文明社会の落とし穴と
も言われている。

…。

自分が手を挙げた…。

「なるほど…」

モロキンは頷いている…。

「…。次の質問だ！！感情移入すぎて浮気なんか出来ない！と思
い、デメリットはないに等しいのに複数の女子との恋人関係が出来
なかった！！違う女子との付き合いのも、2週目、3週目に回した
！！」

…。
手を挙げた…。

「…。次の質問だ！！バッドエンドの鬱展開が原因で、リアルにシ
ョックで体調を崩してしまったことがある！！」

…。
手を挙げた。

「…。このゲームのせいで、ジュネスのモチーフとなったと思われる
ジャコ、サイによく通うようになった！！」

…。
手を挙げた。

「…。このゲームのせいで、リアルに霧が出るとテーションが上がる
ようになった！！」

…。

手を挙げた。

「一月以降の正月、バレンタインデーイベントなども追加しやがれ
！！と思っっている！！」

…。

手を挙げた。

「この質問は犯罪者を擁護するような質問で悪いが、正直、真犯人
の　は　しをした以外…、そんなに嫌いではなかった…」

…。

手を挙げた。

「リアルに付き合うなら、千枝。ガチで嫁にするなら、雪子。りせ
ちーは俺の永遠のアイドル。直斗は愛すべき俺の後輩とと思っている
奴、手を挙げる！！！！」

無論、手を挙げた。

「実は言うと、男の子キャラの方でも恋人ルートみたいなのがあれば良かったと、わりかし本気で思っている奴、手を挙げる！！！！」

無論、手を挙げた。

「正直、アイマスも好きだ！！」

…。

手を挙げた。

「最後の質問だ…」

モロキンはゴホン…！とのを鳴らした。

「ぶっちゃけ、ペルソナシリーズは、この4しかやったことがない
！！」

とモロキンが叫んだ。
手を挙げた…。

「よくわかった、みんな目を開ける…！」

みんな、目を開けた…。

「おい、転校生…」

！

何故か、名指しでモロキンに呼ばれた。

「いい茶菓子があるから、あとで職員室に食べに来なさい…」

…。
はい…、と答えた。

俗・さよならモロキン先生編（後書き）

以上の質問内容について、作者である霧紙子とはまったく関係なくありません。質問の回答は作者である霧紙子の回答ではありません。

クライマックス番長編

2012年1月6日(金) 晴れ

ジュネスフードコート

昼間

フードコートのテーブルの上で、陽介、千枝、雪子の三人が食事をしている。

「うんまー！マジ、うんまー！」

千枝が美味しそうに、肉丼大盛り、ビフテキ串、ビフテキコロツケ、緑のためき…、おやつに肉ガムと食べている。

陽介、雪子が唾然としている…。

「ふうー、お腹いっぱい…」

と千枝は満足そうにしている。
すると…。

「千枝…、食べ過ぎよ…」

「そうだよ…、お前、一応、年頃なんだし、恥じらえよ…」

雪子、陽介が千枝を咎めた…。

「えーっ？こんなの朝飯前だよ！。今、昼飯だけど、アハハ！」

と千枝が笑った。

陽介、雪子はダメだ…、こりゃ…って顔をした。しばらくすると、自分がどうした騒がしいな…、と言って現れた。

「あつ、相棒！ちよつと、里中の奴に…」

陽介が振り向くと、牛一頭の丸焼きをロープでひっぱってきた自分の姿が。

「て、うわああああ！！なに持ってきてんだ！？おめええええ！！」

陽介は倒れた。

これから探索に行くんだから、栄養つけないとな…、と答えた。雪子が呆れながら立ち上がった。

「そんなの食べたら、ムナヤケしちゃうわよ！」

「そついう問題じゃねえよ！」

陽介が立ち上がった。

すると、千枝がよだれを出して喜び始めた。

「やたー！！肉だ！肉だ！！やほー！！リーダー、あたしも食べていい！？」

千枝は牛の丸焼きに喜んだ。

無論と答えた。

「まだ食うんかい！！」

さあ！お食べなさい！と言いながら、自分と千枝は牛一頭の丸焼きを、バクバク！と食べ始めた。

ウマー、ウマー、と言いながら、自分は牛の丸焼きにまたがりながら囓った。

千枝はファイルの部分を食べながら…。

「いやはや…、リーダー…。やはり…、冬は牛一頭に限りませ…」
と言った。

まったくだ…、バクムシャ！と答えた。

「肉はあなたを裏切らないし、肉はあたしを裏切らない…。つまり、肉はみんなを裏切らない…。肉は世界を裏切らない…。世界は肉を裏切らない…、これ世界の心理…」

千枝はそう言った。

陽介、雪子が唾然として、自分たちを見つめている…。
自分と千枝は牛一頭を完食し、フードコートには骨だけ残った。

しばらくして…。

探索に行くため、皆、制服の下に装備品を着用してジュネスに現れた。

周りから不審な目で見られないように二人組ずつに分かれ、自分と陽介、完二とクマ、りせと直斗、最後に千枝と雪子という順番で家電コーナーのテレビの中に入ることにした。

千枝、雪子が家電コーナーに向かって店内を歩いていた。

千枝は制服の下に『鎖かたびら』を装備している。

「いやー！今日は肉いっぱい食べれたし！大満足ー！！」

千枝が楽しそうに笑っているのを、雪子が白い目で見ている…。

「どつたの…、雪子？」

「千枝…。あんた…、ちょっと…、太ったんじゃない…」

！？

雪子の言葉に、千枝がビクッ!となった。

「そ、そ、そんなわけないわよ!？ゆっ、ゆっ、ゆっ、雪子!へへへへ、んなこと言わないでYO!…!」

「なんで、ちよつとラップ調…」

千枝は激しく動揺している…。

!？

ふと…、千枝が目をやると家電コーナーで体重計を見つけた…。

「はっ!」

「ん?」

すると、千枝はかなり焦りながら、雪子の背中を押した…。

「あっ!雪子!あたし、急に急用を思い出したから、先にテレビに行つてて!…」

「えっ?わかつた…」

千枝にそう言われ、不審に思いながらも雪子はテレビの中に向かった…。

雪子が居なくなるのを見計らいながら、千枝は徐々に体重計に近づいて行く…。

「1くじ…」

千枝は家電コーナーの試乗用の体重計に靴を脱いで乗ろうとした……。
「どうやら……、さすがに体重が気になってきたらしい……。
すると……。」

テレビの中……。

入り口広場

自分、陽介、雪子、完二、りせ、クマ、直斗が集まっている。
みんな、千枝が来るのを待っていた……。

千枝が来るまで、雪子、りせ、クマ、直斗はジュネスから持ってきた卓盤で麻雀をやって時間を潰しており、自分と完二はジュネスのゲームコーナーから奪ってきたガ バライド（仮面ライダーのカードゲーム機）をやっていた。
陽介はイライラしている……。

「おせえな……、里中の野郎……。ていうか、てめえら！勝手に店から、いろいろ持ってくるな……！」
と叫んでいると……。

「おーっす……。」

千枝が虚ろな顔で現れた……。

「おせえぞ！里中……！」

陽介が千枝を責めた。
だが、千枝は陽介を無視して、自分の前に現れた…。

「あの…、リーダー…、話があるんだけど…」

千枝はそう言った。

みんながビクッ!となった。

早く速やかに用件を言えと、ガンバライドをやめ、千枝に言った。

「いや…、あの…、ふたりっきりで話したいんだけど…」

!?

みんなが愕然となった。

なんだか知らないがわかったと言い、ベルベツトルームのドアを開け、千枝と一緒に中に入った。

盗み聞きされないように、ベルベツトルームのドアの前に、我がペルソナ『イザナギ』を置いた…。

「なっ、なんだ? 里中の奴…、様子がおかしいぞ…」

陽介は驚いている。

完二は呆然とした…。

「もしかして…」

りせは顔の影を濃くした…。

ゴゴゴゴゴ! !

「怖いクマ! なんかりせちゃん怖いクマよ! !」

クマはりせに怯えた。

「千枝…」

雪子はベルベットルームのドアを見つめた。
しばらくすると…、自分と赤い顔をした千枝がベルベットルームから出てきた。

「じゃあ…、そのお願いね…」

「あっ！千枝…」

雪子は千枝になにかを言おうとしたが、その前に、千枝はテレビの中から出て行った…。

陽介、完二、直斗が自分に近づいてきた。

「おい！相棒？なに話したんだよ」

「里中先輩、どうかしたんスか？」

「なにか、重要な話をしたみたいですが…？」

と聞かれたので、自分はニカツ！と意味ありげに笑いながら、三人に一枚の紙を差し出した。

（（なんだ！？そのジョセフ・ジョスターが柱の男に逆転した時のような笑い方は！？）（））

ゴゴゴゴゴ…！

陽介、完二、直斗が心の中で思った。

今日は探索中止だ…と告げた。

！？

「なんだ！待てよ、相棒！テレビン中に人は入ってないけど、探索を中止にするって！？」

「どうしたんスカ！？」

「せつ、先輩！探索を言い出したのは、あなたですよ！」

陽介、完二、直斗は急な中止に驚いている。

そんな三人を無視して、自分はテレビの中から出て行った。

陽介、完二、直斗が呆然としている…。

「一体、なにが…」

「明らかに、里中先輩の相談受けてから、態度が急変したツスね…」

「ええ…」

すると…。

「追いましょうよ…？ねえ…！？」

「苦しいクマ…」

ゴゴゴゴゴ…！

りせがクマの襟首を握って、すざましいオーラを放っている…。

「うわぁ…」

陽介はため息を吐いた。

「ん…？そついや…」

そして、陽介はチラッと自分が渡した紙を見た…。

「千枝…、元気なかつた…」

雪子は千枝が心配なようだ…。

陽介は完二、りせ、直斗、クマにメモを回した…。

ジュネスの入り口前に、千枝と自分の姿があった。

「ごめんね…、急にこんな話をして…」

気にするな、と言った。

寛容力が高まった。

じゃあ、行くか…と言つて、千枝と自分は歩き始めた。

その背後を、陽介、雪子、完二、りせ、きぐるみを脱いだクマ、直斗が尾行している…。

「なんか…、里中の奴…、いつもと雰囲気違うな…」

「そうツスね…」

陽介、完二は千枝の様子が、いつもと違うことを気にした…。

すると…、りせが…。

「間違いない…、あれはデートよ…」

！？

「なにっ!」

「そんなんっ!」

「バカなんっ!」

「クマー!!」

陽介、直斗、完二、クマが驚いた。

「な、な、なに言ってるのYO!りせちゃん!」

雪子はラップ調に驚いていると、りせは…。

「間違いないわよ…。だって、千枝先輩…、なんか凄く恋する乙女っぽかった…」

「くっ、くるしいクマ…。ぽよん…とするクマ…」

とクマに左腕でヘッドロックを決めながら言った。

しかし、何故か、苦しいはずなのに、クマは嬉しそうな顔をしてヘッドロックを受けている…。

「それに、先輩の態度も急変したもん!間違はなくデートよ!…うわああん!…」

りせは更にクマのヘッドロックをキツくし、涙を流して叫んだ。

「りせちゃん…、もっとキツくするクマ…。むぎゅとするクマ…」

クマは、何故か嬉しそうだ…。

「クマ!俺と代わ…、れじゃなかった!りせ!それは考えすぎだつて!…」

陽介はりせに言った。

「うわああん！！先輩と千枝先輩が、うわああん！！」
「……」

とつとつ、りせは泣き始めた。

とつとつ、クマはダウンした。嬉しそうな顔をしながら……。

「くっ！こりゃあ……、りせのためにも調べるしかねえ！行くぜ！みんな……！」

と泣き崩れたりせ、ダウンしたクマをジュネスに置いて、陽介、雪子、完二、直斗の四人は自分と千枝の追跡に向かった。

「千枝……、どうしたんだろ……」

雪子は沈んだ表情だ……。

次回予告……！

果たして、自分と千枝は一体なにがあったのか……！

果たして、陽介、雪子、完二、直斗の四人は真実にたどり着けるのか……？

果たして、自分が持ってきた牛一頭は国産なのか……？

謎が謎を呼ぶ……！

怒涛のクライマックス……！

次回、『P4 くライマックス番長』最終回！『さらば番長』
編……！

お楽しみに！

クライマックス番長編（後書き）

というわけで、いきなりで申し訳ございませんが、次回の更新でファンフィクション作品を終了とさせていただきます…。どうか、最後までよろしくお願いいたします…。

さらば番長編

前回までの話

千枝と自分は、いきなり探索を中止してデートを始めた！

これにより、りせはショックを受け、クマは酸欠で幸せそうに気絶した！

一体、二人はなんでデートしはじめたのだ！？と陽介、雪子、完二、直斗が立ち上がった。

果たして、彼らは真実にたどり着けるのか！？

果たして、自分が持ってきた牛一頭は国産なのか！？

謎が謎を呼ぶ！怒涛の『P4 くライマツクス番長』最終回！

『さらば番長』

商店街の四目内書店前に自分と千枝が居た。

「いやー、ごめんね……。いきなり、こんな話に付き合わせちゃって……」

と千枝が罰が悪そうに言う。

気にするな……。ちなみにあの牛は国産だと言った。

寛容力、知識が高まった。

しかし、何故、自分に相談した？と千枝に聞いた。

「えっ…、いやぁ…。実は…」

千枝は顔を赤くした…。

一方…、四目内書店の遠くの電柱から陽介、雪子、完二、直斗が自分と千枝を見つめていた。

「くっ、よく聞こえねえ…」

みんな耳に全神経を使っていたが遠いので、自分と千枝の会話が聞こえないようだ…。

「にしても…、やっぱ…、デートっぽくねッスか…」
「そうですよね…」

完二、直斗は自分と千枝の雰囲気は良く見えたようだ…。

「…」

さつきから、雪子は暗い顔で黙っている…。
すると…、自分と千枝は書店に入った。

「!?!?」

長い間、書店の中に、千枝と自分が居る…。

しばらくすると、自分は一冊の本を購入して書店から出てきた。

「なっ!なんだ!?!?あの本…」

陽介が目をこらして、自分の持っている本のタイトルを見た。

「なんて、タイトルルツスか…」

完二に聞かれ、陽介は…。

「えつと…、『失樂園』…」

！？

陽介、雪子、完二、直斗は驚愕した。

「しっ…!!」

「らく…!!」

「えん!?!」

陽介、完二、直斗は流れるように言った。
すると、雪子は叫んだ。

「それって、どんな遊園地!?!」

「ちゃうわ!?!」

直斗が顔を赤くしながら、雪子に『失樂園』の内容を軽く教えた。陽介はなんで直斗が内容を知ってるんだと疑問に思った…。

「ふえっ！」

雪子の顔が真っ赤になった。

「…」

完二の顔も…。

一方、千枝と自分…。

いやあ…、この本欲しかったんだよね…、と言いながら自分は笑った。

「そっ、そんなの読んだ…」

千枝は赤い顔をした。

そして、また自分と千枝は歩き出した。

陽介は、さっきの千枝の表情を見逃さなかった。

「里中の奴、さっき、赤い顔をしたぞ！！しかも、相棒は笑ってたぞ！」

「なっ、なんかヤバイツスよ、これ！！」

「そっ、そうですよ…」

完二、直斗はなにを想像しているのか、凄く顔が赤くなっている…。
すると…。

「みんな！落ち着こう！とりあえず、落ち着いて冷静になろう！」

雪子は顔を真っ赤にして、冷えびたを熱びたにさせて気絶した。

「うおい！天城！？」

「天城先輩！大丈夫ツスカ！？」

「すみません！僕が余計なこと言っただけに！！」

そんなこんなしている間にバスが来た。

「乗ろっ」

と千枝に言われバスに向かった。

「おおい！！急ぐぞ！」

と陽介、バスを追いかけ始めた。

完二、直斗に抱えられながら、雪子も天城屋旅館へと向かう…。

バスに乗って天城屋旅館に到着した自分と千枝の後、遅れて、陽介、意識を取り戻した雪子、完二、直斗が到着した。

「くっ…、やはり、ここか…」

「やべえ…、なんか興奮してきた…、いや、緊張してきたツス…」

陽介、完二、直斗は顔を赤くしている…。

雪子は旅館の玄関に居た中居の葛西さんに、千枝と自分を見なかつたかと聞いた。

「えっ、お友達なら、さつき…」

葛西さんが指した方向に、陽介、雪子、完二、直斗が飛んで行った。

そして、とある一室の戸の前…。

「じゃあ…、はじめ…、よっか…」

！？

千枝の聲がした。

戸を前にして、陽介、完二が鼻血を流しながら緊張していた。

「間違いなく…、里中先輩の声…」

直斗は鼻血を拭った。

「なっ、なにしようとしてるのよ！二人して！あたしんちで！！！」

雪子は顔を赤くして戸を前フリなく開けようとした。

！？

「うわっ！天城！」

「天城先輩、ヤバイツスよ！！！」

「落ち着いてください！」

陽介、完二、直斗が驚いた。

雪子が戸を開けた。

そこには…。

パーン！
パーン！
パーン！
パーン！
パーン！

！？

自分、千枝、りせ、クマ、菜々子がクラツカーを鳴らした。

「ハッピーバースデー！雪子！」

「おめでとう！雪子先輩！」

「ユキちゃん、おめでとうクマー！」

「お姉ちゃん！おめでとう！」

また千枝、りせ、クマ、菜々子がもう一発ずつ、クラツカーを鳴らした。

「へっ？」

呆然とする雪子の目の前には、大きなケーキがあり、部屋の中には豪華な料理とプレゼントがあった。

そして、部屋には自分、千枝、りせ、クマ、菜々子の姿が…。雪子はなにがなんだか、わからない顔をしている…。すると…。

「天城、遅れながらだが、誕生日おめでとう！」

「天城先輩！誕生日おめでとうッス！」

「誕生日おめでとうございませす」

陽介、完二、直斗も拍手を始めた。

「えっ…？」

やっと、雪子は少しだけ状況を理解した…。

「もしかして…、これって…、あたしの誕生日会…！？」

うん！と千枝は頷いた。

「えっ、でも…、いつの間に、こんな…。というか…、あたしの誕生日は先月よ…。と言うより、あれ、なにがどうなって…」

その点について、千枝が改めて説明しはじめた…。

数時間前…。

ジュネス家電コーナーで、千枝（鎖かたびら装備）が体重を測ろうとしていると…。

千枝が体重計を見て、なにかを呟く…。

「体重計…、たいじゅうけい…」

すると…、千枝の頭に何かが走った。

「あれ？なんか忘れてるような…」

千枝は、急に何かを忘れていることを思い出した。

「あれ？たいじゅうけい…、たんじゅうけい…、たんじゅうけい…、たんじょうかい…、誕生会…。ハッ！！」

千枝がハッ！となった。

そして、千枝はその場で叫んだ。

「そうだ！去年の12月6日、いろいろあつて、雪子の誕生日を祝っていないじゃん！！」

ジュネス家電コーナーに、千枝の声が響いた。

こうしちゃいられないと、千枝はテレビに急いだ。

千枝（鎖かたびら装備）が乗った体重計は見事破壊された…。

公式設定です。

テレビの中のベルベットルームで、千枝がそのことを自分に相談した。

「おっ、お客人…、くっ、苦しい…」

なるほど…、と自分はイゴールの膝の上に座って話を聞いた。

「ねっ？だからさ、お願い！1ヶ月遅れだけどさ！今日は、みんな
で雪子の誕生日を祝おうよ！」

もちろんだと言った。

「さすが、リーダー！」

しかし、どうせなら、サプライズで盛大にやろうと、自分が言った。
た。

そして、様々な案を出した。

今回の雪子の誕生日会を自分プロデュースですることにした。

「ふふ…、さすがお客人…、ぐっ…、あ…、膝がしびれ…」

「さすがですわ…。あなたは本当に友達想いな方ね…」

自分に膝の上に座われて苦しそうなイゴールと、優しそうな微笑
みでマーガレットが誉めてくれた。

このサプライズバースデーを成功させるには、みんなの協力が必
要だ…。

そう思い、ベルベットルームから出たときに、自分に近づいてき
た陽介に一枚のメモを渡した。

あの時のメモに、こう書かれていた…。

『雪子の誕生日をサプライズ祝う…。テレビから出たあと、各自の
役割を携帯にメールを送るから、各自チェックしろ…』

と書いており、陽介、完二、りせ、クマ、直斗はメモを見たあと、携帯のメールから各自の役割を確認させた。

まず、自分と千枝はテレビから出たあと、会場である天城屋旅館に携帯でアポを取った。当然、旅館の皆さんは協力してくれた。さらに、パーティー準備が終わらないうちに雪子を自宅の旅館に帰らせないよう、デートするフリをして商店街まで行って気を引き、準備完了の連絡が来るまで書店で時間を潰した。

陽介、完二、直斗は上手いこと雪子の気を自分と千枝に惹き付け、準備が終わるまで会場に近付けさせないよう時間を稼いでもらった。そして、自分と千枝が書店から出たのを合図に準備が完了したのを告げ、雪子を旅館まで誘う役割をしてもらった。

最後に、泣き真似と気絶したフリをして、ジュネス居残りたりせとクマは、ジュネスでバースデーケーキやプレゼントを買い、菜々子を呼んで、旅館でのパーティー準備を手伝ってもらっていた。準備が完了したら、自分に連絡をするように言った。書店内でこの連絡を受けて、自分と千枝はバスに乗った。

つまりは、今日一日の謎の行動すべては、雪子の1ヶ月遅れのバースデーを成功させるためだったのだ。

「てなわけ！」

千枝から今までの経緯を聞いて、雪子はヘタヘタと膝から崩れた。

「そつ、そうなんだ…。てつきり、あたし…。千枝達が…。『失樂園』だと…。あつ、あれもわざと!?!」

雪子が自分に聞いた。

いや、あれは普通に買ったと言った。

菜々子、クマ以外の全員の顔が赤くなった。

「ねえねえ! 『失樂園』ってなあに?」

「クマも知りたいクマ!」

無邪気に菜々子、クマが聞いてきた…。
陽介は苦い顔で…。

「大人の遊園地だよ…。ハハハ…」

「花村先輩…。妙に的を獲てるツス…」

陽介、完二は苦い笑いをした。

「うーっす!」

「あれ、もう始まつちやったか!?!」

「えっ、一条君に、長瀬君!?!」

雪子が振り向くと、一条と長瀬が現れた。

一応、自分が呼んでおいた。

「いんっ!」

「うわっ!なんで、キツネが!」

一条、長瀬の後ろには、キツネと小西尚紀も居た。

尚紀はキツネに驚いている。

「あっ、あの…、こないだはどうも…」

と家庭教師のアルバイト先の秀も現れた。誕生日の関係で自分が呼んだのだ（原作ゲーム参照）。

「えっ…、なんで、あたしもよ…」

「久しぶりー」

「どうも…、先輩…」

部のマネージャーのあいと、演劇部の結実、吹奏楽部の綾音も現れた。

なんとなく、自分が呼んでおいた。

「なあんの騒ぎ…、これ…」

「んま！美味しそうな料理ね…」

「えっ！柏木先生に、大谷さんまで！！」

！？

呼んでもいないのに、何故か、柏木と大谷が現れた。

雪子だけじゃなく、全員が驚いた。

たぶん、偶然、居合わせたのだろう…。

まあ、いいや…。

かなり人数がいっぱいになった…。

「みつ、みんな、ありがとう…。本当にありがとう…」

！？

雪子が歓喜余って泣いた…。

「あつ、雪子…」

泣いた雪子の姿を見て、千枝が驚いた。

「ん…、あつ…」

急に千枝はモジモジし始めた…。

…。
そんな彼女の背中を、自分は叩いた。

「はっ！？そうだよね…、わかってる！」

千枝は自分の目を見て頷いた。

千枝は雪子の前に出た。

「雪子…！」

「千枝…」

雪子の手を優しく握りながら、千枝は彼女の手にも『リストバンド』を渡した。

千枝の手首にも、同じ様にリストバンドがあった。

「これ…、あたしからのプレゼント…。大した物じゃないけど…、あたしとお揃いだから…。先月、いろいろ大変で…、当日に誕生日会出来なくてごめんね…。一ヶ月遅れだけど…、17歳の誕生日、おめでとう…、雪子…」

「千枝…」

雪子は泣きながら、千枝のお揃いのリストバンドを受け取った。

「ありがと…、千枝…」
「へへっ…」

千枝は顔を赤くした。
雪子は涙を拭った。
そして…。

「千枝は、いつまでも…、あたしの大事な大事な友達だよ…」
「…！」

と言って、雪子は千枝を抱き締めた。

「う…、あつ、当たり前だよ…、雪子は…、あたしの大事な大事な友達だ…、よ…」

千枝の目も涙で緩んできた…。
しかし、せつかくの雪子の誕生日会で泣くまいと、千枝は必死に涙を堪えた…。
すると…。

「あれーっ！里中、もしかして、泣いちゃってんのー!?!」
!?!?
陽介が千枝をからかった。
千枝は…。

「泣いてなんかいないわよ！バカ！空気読みなさいよー!」
と涙を拭って、陽介を睨んだ。

千枝は陽介の目を見た…。

「へへっ…！オメーは、それでいいんだよ…！」
「花村…！」

陽介の目が少し赤かった…。

「とりあえず、1ヶ月遅れだけだよ、17歳おめでとう！天城…！」

と陽介が拍手をした。

すると…。

みんながパチパチ！と拍手した。

「おめでとウツス…！」

「誕生日おめでとウー、雪子先輩…」

「おめでとウございます…」

「おめでとウクマー…！」

「おめでとウー…！」

完二、りせ、直斗、クマ、菜々子が拍手して、千枝、雪子を祝福した。

「ああ、おめでとウー…！」

「おめでとウー…！」

「こんっ…！」

「おめでとウございます…！」

「おめでとウございます…！」

一条、長瀬、キツネ、尚紀、秀も拍手をした。

「おめでと…」

「おめでとー！」

「おめでとうございますー！」

「よくわからないけど、おめでとね…」

「おめでと…、料理まだ？」

あい、結実、綾音、柏木、大谷も拍手をした。

雪子はまた涙を流した…。

「みんな…、本当にありがとう…」

千枝は優しく自分のリストバンドで雪子の涙を拭ってあげた。そして、陽介は仕切り直そうとした…。

「よし、腹も減ったことだし！ご馳走をいただきますか！」

すると…、クマがなにかに気付いた。

「あつ、待つクマー！！」

「なんだよ！クマ！水さすなよ！」

「センサーが居ないクマー！」

！？

いつのまにか、自分が居なくなっている…。

「えっ！先輩、こんなときにどこツスか！？」

完二が周囲を見渡して、自分を探す。

「えっ！先輩ー！どこー！？」

りせがそう叫ぶと、「ここだと言って、りせの背後から自分が現れた。

「ひっ!」

りせが驚いた。

「どこ行ってたんすか!!先輩!」

と完二が自分に聞いてきたので、トイレと答えた…。

「ちよつ、あんたー!」

「先輩い…、いい空気だったのに…」

「本当に…、あなたらしいですよ…」

「センサー、トイレクマー!」

と完二、りせ、直斗、クマが自分を見つめて苦笑いをした。陽介、千枝、雪子はクスクス…、と笑っている…。菜々子が自分に近づいた。

「あれ?お兄ちゃん…、目赤いよ!?!どうしたの!?!」

!?

みんなが驚いた。

…。

排尿の際の飛沫が、目に掛かったと答えた…。

こうして、1ヶ月遅れの雪子の誕生日は大成功だった。
かなり、みんなで盛り上がった。

しばらくすると、自分、陽介、千枝、完二、りせ、直斗、クマ、
菜々子以外のみんなは夜も遅くなったので帰った…。
雪子はケーキをみんなの分に切り分けて配った。

「生き残りたい!!生き残りたい!!」

「君を愛してるクマー!!」

「ばっ、クマ吉!歌詞間違えんなよ!!」

と陽介とクマが宴会場のカラオケをノリノリで歌っている…。

「うっさい!ったく…」

「…」

「いいぞー!花村先輩ー!クマー!!」

千枝と直斗は迷惑そうな顔をしながらケーキを食べ、場酔いしはじめたりせは盛り上がってきた…。

「次は、俺ツスよ！花村先輩！」

と完二がカラオケ本を持って、陽介、クマにつめかけた。だが、りせが横から入り込み…。

「なに言つてのよ！次はあたしらよ！」

「はあ！？ていうか、おめえ！顔赤いぞ！また場酔いかよ！」

完二、りせは揉めている。

「はい、菜々子ちゃんの分」

と雪子は菜々子の前にケーキを置いた。

菜々子は、先ほどから辺りをキョロキョロ見渡している…。

「あれ？またお兄ちゃん、居なくなっただー」

「あら…、本当ね…」

また自分が一人、どこかへと居なくなっただ。

「どこかしら…」

雪子が心配そうに周囲を見渡して、自分を探している…。

その様子を見て、千枝と直斗はクスツと笑う。

歌い終えた陽介が…。

「またトイレじゃねえの？ハハハ」

と笑っていると、千枝が…。

「バカ…。本当に空気読めないわね…」

陽介はへッ？と言う顔をした。

千枝の顔は赤くなった。

雪子は立ち上がった。

「あたし、探してくるね！」

と自分を探しに、雪子は宴会場から出て行った。

菜々子も立ち上がった。

「菜々子もー、お兄ちゃん、探すー」

と菜々子も自分を探しに行こうとしたが…。

「待って…、菜々子ちゃん…」

直斗が菜々子の手を握って止めた。

菜々子は、んぐぐ…という顔をした。
すると…。

「大丈夫…。先輩のことは、雪子先輩が見つけてあげるから…。だから、今は、一緒にケーキ食べよう」

「…、うん！」

直斗はそう言って、菜々子を落ち着かせた。

「次はあたし！」

「俺だつて言つてんだろ！最近、フィギュアを出したからって調子乗んなよ！」

「二人とも、ケンカやめれー！」

りせと完二はカラオケの取り合いをしている…。

クマは二人の間に挟まれている…。

陽介は千枝のケーキを見つけた。

「おっ、ケーキうまそうじゃん！」

「あっ！それ、あたしの！！！」

時遅く、陽介は千枝のケーキの上に乗っていたイチゴを食べてしまった…。

「あっ…！」

「よりによって、大事に取ってた、あたしのイチゴちゃんを…！！！」

千枝は陽介を睨んだ。

「悪い！すまねえ！！！」

陽介は平謝りしながら、千枝から逃げた。

「待て！！このジュネス！！！」

千枝は逃げる陽介を追いかけた。

そんな二人をよそに直斗と菜々子は楽しそうにケーキを食べている。

雪子は自分を探しに、旅館内を見て歩いた。

「どこ…、どこに居るのかしら…。もしかして、帰っちゃったのかな…」

雪子は不安げた…。

そして、雪子は板場に通リ掛かった。

すると…。

！？

一人の筋肉質な初老の男性が、刺身が盛られている皿を持ってドカドカ歩いている。

男性は、何故か、ちょっと怒っている…。

「えっ！？なに！」

雪子はクレーマーかと思って慌てている。

初老の男性は板場ののれんを開けた。

「このあらいを作ったのは誰だ！？旨すぎるぞ…！」

なんと、初老の男性が刺身を絶賛している！

すると…。

初老の男性の前に、一人の少年が立った…。

自分が作った…。

何故か、板場で包丁を持って板前をやっている自分が手を挙げた。

雪子はずっこけた。

「貴様！その若輩で、このように繊細にマグロを捌けるとは…、一

体…、何者だ!？」

と初老の男性に聞かれた。
なので、ここう答えた…。

通りすがりの番長だ…！覚えておけ!!、と…。

『P4 ～クライマックス番長～』

ファンフィクション作品

原作

PS2ソフト

『ペルソナ4』

キャスト

主演

ペルソナ4主人公（イザナギ、マーラ、ジャアクフロスト）

メイン出演

花村 陽介 (ジライヤ、スサノオ、ガダム)

里中 千枝 (ススカゴゼン)

天城 雪子

巽 完二

久慈川 りせ

白鐘 直斗

クマ

サブ出演

堂島 遼太郎

堂島 菜々子

キツネ

長瀬 大輔

一条 康

小西 尚紀

海老原 あい

小沢 結実

松永 綾音

諸岡金四郎

柏木典子

上原 小夜子
中島 秀

イゴール
マーガレット

生田目太郎

足立 透

ガソリンスタンドの店員

ゲスト

・天城屋旅館中居の中井さん
罰ゲーム係のシャドウ（魂を刈るもの。LEVEL・80）
・キ 肉マン消しゴム

中華料理店愛屋店主

・面接担当

恐喝グループ
完二と会った子ども

八十高演劇部のみなさん

・八十高野球のみなさん

・柄の悪い二人の男

・ファミレス店長

天城屋旅館中居の葛西さん

・ス イーブン・セ ールっぽい人（特別出演）

・海 雄山っぽい人（特別出演）

・カジキマグロ

・マークのついたキャラは今作品のオリジナルキャラです。当たり前ですが、原作ゲームには登場していません。

テーマ曲

『Pursuing My True Self』

『Havene』

『Never More』

（ペルソナ4サウンドトラック収録）

挿入歌（原作ゲームとは金輪際に関係ありません）

『G O D S P E E D K N O W』

『ひやむぎ』

作詞、作曲、歌、主人公

『G e t W i l d』

（大人の事情）

スペシャルサンクス

ジュネス

天城屋旅館

八十稲葉警察署

M O E L 石油

八十稲葉市のみなさん

八十神高校のみなさん

読んでくれた読者の皆様方です。

脚本

霧紙子

製作

『小説家になるつ』

『P4 くクライマックス番長』

f i n

さらば番長編（後書き）

急遽終了となったのは、想定外にハイペースで書いてしまい、しばしの充電が必要になったからです…。まだ書いていないキャラクターやネタがたくさんあり、それに向けて充電します…。ファンフィクションを書くのは今作が初めてで、まったくの手探りから、ここまでハイペースで書いてしまったぐらいに本当に書いて楽しんでました。多少、純粋なファンの方には謝っても謝りきれない表現を多数しましたが、本当に大好きな作品のペルソナ4で、こんなにいろいろな話を書いて楽しかったです。とにかく、どのキャラクターも好きで仕方ありませんでした。

蛇足編（前書き）

現在、同時進行で『電王』との合作ファンフィクションも書いており、しばらくはこちらにも力を入れつつ、充電完了次第、また『クライマックス番長』を再スタートさせます。ですので、またキャラ崩壊祭りになりそうですが、またお付き合い頂けたら幸いです。ペルソナ4を題材して遊びまくった今作品であり、短期間ではありましたが、多くの応援と好評価、アクセス、本当にありがとうございます。原作ゲームのペルソナ4と読者の皆様には感謝しても仕切れない気持ちです。本当にありがとうございます。ちなみに、以下の本文は本当に蛇足です。

天城屋旅館前…。

制服に着替えた自分と着物姿の雪子が外に出て、月を見ている…。

「綺麗なお月様だね…」

自分の隣で雪子が月を見て笑った。

…。

自分は無言のまま雪子の目の前に立ち、なにかを手渡した。

「あら？」

雪子は驚いた。

自分の手にあるのは、神社の『お守り』…。

「あっ…、ありがとう…」

雪子は顔を赤くして、そのお守りを受け取った。

自分はまた雪子の隣に座った。
すると…。

「あと、二ヶ月とちょっとだね…」

雪子が沈んだ顔でそう言った…。

「春になったら…、あなたは…」

雪子がうつむいた。

ああ…、と自分は頷いた…。

「」

無言のまま、二人で月を見た…。

雪子は頬を自分の肩に乗せた。

「もう少しだけ…、このまま…」

雪子は儂げに呟いた…。

…。
誕生日…、おめでとう…、と自分は雪子に小声で言った…。

翌日、晴れ

陽介はジュネスの家電コーナーで、千枝から破壊された体重計を見つけた。

「里中あああああ！！」

陽介は泣き叫んだ。

ジュネスのフードコートで、ビフテキを食べながら、千枝は歓喜の声を挙げた。

「肉はあなたを裏切らない！！」

ガツガツと千枝はビフテキを噛み締める…。

今日も霧のないよく晴れた一日だ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9013g/>

P4 クライマックス番長

2010年10月10日01時28分発行